

## 二 地価修正の時代

### 5、〔明治21年〕 地籍条例法律案

#### 地籍条例制定ノ議

地籍ハ土地ノ面積ヲ正フシ其所有ヲ明カニシ地租ヲ賦課スルノ基礎ニシテ、財政上ノ要具タルノミナラス、國家ノ版圖亦之ニ由テ定マル、其關係スル所実ニ大ナリト稱フヘシ、明治維新ノ時ニ当リ封建割拠ノ余ヲ承ケ田制ノ潰乱殆ト其極ニ達セシヲ以テ、政府夙ニ地租改正ノ議ヲ決シ遂ニ此大業ヲ完成セリト雖トモ、其主トスル所務メテ大綱ヲ提ケ旧租ノ偏畸ヲ救フニ止マリ、図籍ノ如キモ完全ノ整理ヲ得ルニ至ラス、地租ノ改正ト共ニ毎五年之ヲ新製センコトヲ期セリ、是以テ改租以來歲月ヲ経ルニ從ヒ益々紛乱錯雜ニ陥リ、土地ノ官簿ニ登載セラレスシテ課税ヲ脱セルモノアリ、重複ノ登載ニ由テ地租ヲ重課セラル、アリ、熟田ヲ荒地ト称シテ課租ヲ免ル、アリ、丈量ノ誤謬ニ由テ面積ノ正シカラサルアリ、其他図籍ト實際ト齟齬スルモノ甚タ多ク、征税ノ根拠漸ク將ニ乱レントス、是當時ノ情勢已ムヲ得サルニ出ツルト雖トモ、固ヨリ之ヲ放任スヘキニ非ス、因テ地租条例制定ノ後図籍整理ノ事ヲ令シ、次テ地押調査ノ業ヲ起シ、實際ト図籍トヲシテ相応合セシメントヲ期シ、將ニ本年ヲ以テ完結ヲ告ケントス、其結果ヲ見ルニ土地ノ異動スルモノ式千五百万有餘筭、即チ全國筭數四分ノ一二達ス、紛雜此ノ如シ、地押ヲ舉行スルノ必要ナリシコト以テ知ルヘキナリ

今ヤ地押ノ完結ニ由リ脱落重複等ノ為メニ租額ノ正シカラサリシモノ皆整理ニ就キ、全國民地ノ調査全ク成リ図籍モ亦タ完備スルヲ得タリ、此時ニ方リ速ニ地籍ノ制ヲ確定シ之ヲ永久ニ保存整理スルノ法ヲ設ケスンハ、久ラスシテ再

と紛乱に陥り、遂に前功ヲ失フニ至ルヘキハ數ノ免レサル所ナリ、其弊ヲ防クハ各地ニ專任ノ官司ヲ置キ地籍ノ事務ヲ管理セシメ、以テ其整理ニ便スルニ在リ、現今ノ制タル其事務府県郡区町村ニ分属シテ統一スル所ナシ、焉ノ其整理ヲ望ムヘケンヤ、且今專任ノ官司ヲ置クモ敢テ國庫ノ經費ヲ増加スルヲ要セス、徵稅費ノ現額内ニ在テ其費用ヲ支弁スルヲ得ヘシ、果テ此法ニ由ルトキハ民地ノ整理益々完カルヘキハ論ナク、官地モ亦自ら整理スルニ至ルヘシ、蓋民地下官地トハ境界相接シテ相離レス、故ニ民地ノ整理完全ナルニ於テハ、之ニ連接スル所ノ官地モ亦整理ノ便ヲ得ルハ自然ノ理ナリ

地籍ノ制ヲ確定スルト同時ニ施行スヘキ要件ハ、賚少ノ事故ニ由テ地価ヲ修正スルノ法ヲ廢スルコト是ナリ、現行ノ地租條例タル改租ノ成蹟ヲ維持シ賦租ノ基本ヲ鞏固ニスルヲ主トシ、賦課ノ方法整理ノ順序等ハ大抵改租ノ法令ニ率由セリ、故ニ土地ノ異動ハ一々之ヲ調査シテ地価ヲ修正シ地租ヲ増減スヘキモノトシ、地目變換哇呼廢設ノ小故モ之ヲ申告若クハ出願セシメ、犯ス者ハ之ヲ罰スルノ制ヲ設ケタリ、然ルニ其條目ノ煩瑣ナルト人民ノ法令ニ嫻ハサルトニヨリ、土地ノ異動アルモノ申告セサルモノ比々皆是ナリ、故ニ嚴ニ法令ヲ施行センカ許多ノ罪人ヲ生スルノミナラス、又時々地押ヲ行ハサルヲ得ス、是徒ニ官民ノ煩擾勞費ヲ醸スモノニシテ、其得ル所失ヲ所ヲ償フニ足ラス、反テ所有權ノ安固ト國富ノ基本トヲ害セントス、夫地租ノ制度ハ改租ニ由テ大本既ニ定マリ、今回ノ地押ニ由テ節目亦舉カレリ、土地異動ノ小故ハ一切之ヲ不問ニ付シテ可ナリ、何ソ一々之ヲ調査シテ地価ヲ修正スルヲ要センヤ、農事ヲ勸メ國力ヲ養フノ急ナル今日ノ如キニ在テハ殊ニ改正ノ緊要ナルヲ覺ユルナリ

其他地券ヲ廢シ開墾竣功ノ年期ヲ長クシ、土地ノ衰頹セシモノハ其地価ヲ修正シテ租額ヲ減シ、地租不納処分ヲ市町村ノ負担ニ付シテ官沒公売ノ法ヲ廢スル等ノ教事モ、亦官民ノ煩勞ヲ省キ力田ヲ勸ムルニ於テ頗ル有用ノ改正ニ属スルヲ以テ、齊シク之ヲ實施センコトヲ要ス

已上ノ改正ヲ以テ現法ニ比スルニ、其得失概要左ノ如シ

第一 現法ニ拠レハ府県郡区町村各々地籍整理ノ事務ニ當ルト雖トモ、改正案ニ於テハ一切之ヲ地籍所ニ属スルニヨリ、地方ノ煩勞ヲ省キ且地籍紛乱ノ患ヲ免ルヘキ事

第二 現法ニ拠レハ内務省ハ地籍ヲ編成シテ官地民地ヲ調査シ、大蔵省ハ土地台帳ヲ編成シテ地租ヲ整理セシモ、改正案ニ於テハ官地民地ノ調査ヲ併セテ地籍所ニ任スルヲ以テ、從來地方ニ於テ負担セル地籍編成ノ勞費ヲ減シ、併テ官地ノ整理完全ナルヲ得ヘキ事

第三 改正案ニ於テハ地券ヲ廢スルニヨリ、其書換ニ要スル官民ノ勞費ヲ省クヘキ事  
第四 哇呼廢設地目變換等ノ地価修正ヲ廢スルヲ以テ、大ニ土地検査ニ属スル官民ノ勞費ヲ省キ、又賦課徵收ノ煩ヲ減スヘキ事

第五 勞費ヲ用ヒ地力ヲ進メタルモノ、地租ヲ増課セス、又開墾ノ年期ヲ長クスルニヨリ大ニ墾耕樹藝ヲ勸奨スルノ効アルヘキ事  
第六 現法ニ拠レハ土地衰頹スルモ地価修正ヲ許ササルニ、改正案ニ於テハ之ヲ調査シテ地租ヲ輕減スルノ路ヲ開クヲ以テ、人民ノ利少カラサルヘキ事

第七 改正案ニ於テハ地租不納処分ヲ市町村ノ負担ニ付スルヲ以テ、官沒公売ノ処分ヲ要セスシテ土地保護ノ便ヲ得ヘキ事

抑租稅ハ經國ノ重事ニシテ其法制ノ得失ハ影響スル所極メテ大ナリ、就中地租ハ我租稅ノ最要者タルヲ以テ、其基礎タル地籍ノ制ヲ確定シ、之ヲ賦課徵收ノ法ヲ簡易適実ナラシムルハ當務ノ急タルコト言フ俟タス、本議ノ要目ハ上ニ列挙セシカ如ク、現法ニ加フルニ著大ノ改良ヲ以テスルモノニシテ、官民ノ利タル決シテ鮮少ナラスト信セリ、茲ニ

地籍条例案ヲ具シ、大蔵省官制ノ改正、地籍官ノ組織及ヒ登記法ノ改正ニ關スル諸案ヲ附シ閣議ヲ請フ

一 地籍条例案

秘

法律第 号

地籍条例

第一条

凡土地ノ地籍ハ此条例ノ定ル所ニ從フモノトス

第二条

地籍トハ土地台帳地圖及地租台帳ヲ總稱ス

一 土地台帳ニハ土地ノ番号名稱面積等級地価所有ノ區別及所属、又ハ所有者ノ名ヲ登錄ス

二 地圖ハ市町村函字圖ノ二種トシ、市町村圖ニハ四隣ノ境界及毎字ノ地形ヲ画キ、字圖ニハ四隣ノ境界及毎筆ノ

地形番号名稱等級ヲ記入スルモノトス

三 地租台帳ニハ名稱毎ニ市町村總計ノ面積地価地租ヲ登錄ス

第三条

土地所有ノ區別ハ左ノ如シ

御有地

官有地

府県有地

郡有地

市町村有地

公共組合有地

私有地

第四条

土地名稱ノ区分ハ左ノ如シ

皇宮地

御陵墓地

皇族邸地

官庁地

神社地

寺院地

軍用地

学校敷地

市街宅地

郡村宅地

田

畑

塩田

鉱泉地

牧場

池沼

森林

山岳

原野

遊園

道路

灯台地

鉄道敷地

製作用地

溝渠

堤塘

運河

河川

河岸地

湖

海

浜地

墓地

火葬地

雑地

第五条

土地ノ面積ハ市街宅地ハ坪數ヲ以テ定メ、其他ハ總テ段別ヲ以テ定ルモノトス

坪數ハ方一間ヲ坪ト為シ、坪ノ十分一ヲ合ト為シ、合ノ十分一ヲ勺ト為ス、勺未満ハ算入セス

段別ハ方一間ヲ歩ト為シ、三十歩ヲ畝ト為シ、十畝ヲ段ト為シ、十段ヲ町ト為ス、但振以下ハ歩ノ十分一ヲ合ト為シ、

合ノ十分一ヲ勾ト為ス、勾未滿ハ算入セス  
上地ノ丈量ハ曲尺ヲ用ヒ六尺ヲ一間ト為ス

第六條

土地ニ異動ヲ生シ左ノ各項ニ該ルモノハ地籍官吏ニ申告シ、面積地価ノ鑑定若クハ年期ノ査定及地籍ノ登録ヲ請フハ  
シ

- 一 無租地除租地ノ有租地トナリタルトキ
- 二 有租地ノ無租地除租地トナリタルトキ
- 三 土地ヲ開墾スルトキ
- 四 一筆ノ土地ヲ分裂シ、又ハ二筆以上ノ土地ヲ合併スルトキ
- 五 土地ノ面積量定ニ誤謬アルヲ發見シタルトキ
- 六 荒地開墾地ノ年期滿限ニ至ルトキ
- 七 土地ノ衰損シタルトキ

第七條

地籍ノ謄本ヲ要スルトキハ地籍所ニ左ノ手数料ヲ納メ請求スルコトヲ得

- 但手数料ハ地籍謄本印紙ヲ以テ納付スルモノトス
- |        |      |     |
|--------|------|-----|
| 土地台帳謄本 | 一筆二付 | 金貳錢 |
| 地圖謄本   | 全    | 金貳錢 |

第八條

地租ハ府県有地郡有地市町村有地公共組合有地私有地ニ賦課シ、御有地官有地ニハ之ヲ賦課セサルモノトス

第九條

府県有地郡有地市町村有地公共組合有地私有地ノ中、左ノ各項ニ該ルモノハ地租ヲ蠲除ス

- 一 府県郡庁舎其他直接ノ公用ニ供スル土地
- 二 鐵道敷地公共ノ用ニ供スル道路溜池用悪水路溝渠
- 三 郷村社境内公園及公立学校地
- 四 禁伐林其他風火水災防禦ノ為メ公共ノ用ニ供スル土地
- 五 墓地火葬地
- 六 天災ニ罹リタル荒地

第十條

荒地ノ除租ハ被害ノ年ヨリ二十年以内トス

第十一條

開墾ノ土地ハ五十年以内ノ開墾年期ヲ定メ該年期内ハ其地価ヲ更定セス

第十二條

地力ノ衰頹シ左ノ各項ニ該ルモノハ現状ニ由リテ地価ヲ更定ス

- 一 道路河川港灣等ノ變更ニ由リ其土地ノ著ク衰頹シタルトキ
- 二 地力衰頹ニ由リテ紫地ノ形状ニ變シタルトキ

第十三條

第六條ニ依リ処分ヲ了シタル土地ハ荒地ノ外翌年ヨリ地租ヲ賦除更正スルモノトス  
第十四條

除租又ハ地租ヲ更定スヘキ土地ニシテ其申告ヲ為サ、ルトキハ尚現地租ヲ徵收ス  
有租又ハ増租ト為ルヘキ土地ニシテ其申告ヲ為サ、ルトキハ、異動ヲ生シタル時ニ遡リ其租額ヲ追徵ス  
但五年以前ニ遡ルコトヲ得ス  
第十五條

地価ハ地租改正以降査定ノ額ニ據置ク、其一般ニ地価ヲ更定スルハ特ニ法律ニ由ル

第十六條

地租ハ「地価百分ノ二ケ半」ヲ以テ一ケ年ノ定率トス

第十七條

地価ハ其地ノ品位ヲ詮定シ其所得ヲ審査シ、尚土地ノ情況ニ応シテ之ヲ定ム

第十八條

地租ノ市町村額ハ毎年三月十五日限府県知事之ヲ市町村ニ達ス

第十九條

地租ノ納期ハ大蔵大臣之ヲ定ム

第二十條

市町村ハ其市町村ノ地租ヲ取立テ及ヒ之ヲ納付スルノ義務アルモノトス

第二十一條

市町村ハ地租收入役ヲ置クモノトス

第二十二條

此條例ニ關スル細則ハ大蔵大臣之ヲ定ム

第二十三條

北海道沖繩県小笠原島伊豆七島ニハ此條例ヲ施行セス

第二十四條

明治五年二月達地券渡方規則、明治七年第二百十号布告地所名称區別、明治十年第十八号布告買上地松下地等収稅除  
稅区分、明治十四年第十四号布告地租徵收期限、明治十七年第七号布告地租條例、其他従前ノ法律規則中本條例ニ抵  
觸スルモノハ本條例施行ノ日ヨリ廢止ス

第二十五條

本條例ハ明治二十二年 月 日ヨリ施行ス

地籍所ヲ置キ地籍官ヲ設クルノ件

中村

凡ソ土地ノ經界ヲ正シ所有ノ區別ヲ明ニスルハ、國家經綸ノ上ニ最モ重要ノ事タルハ論ヲ俟ス、故ニ全國土地ノ圖籍  
ヲ作り、其地積面積價格及ヒ所有ノ沿革ヨリ郡区町村ノ境域位置ニ至ル迄、摺テ以テ見ルヘキモノアラシムルハ固ヨ  
リ政府ノ務メタリ

抑地籍ノ用タル其範圍広シト雖トモ、凡ソ人民其私有權ニ關シ土地ノ形状所在經界地位ヲ識ラント欲スル場合ハ勿論  
行政上ニ於テ官民有土地ノ区域又ハ財産ノ變更ヲ識ラント欲シ、又ハ租稅徵收ノ基ヲ定ムルノ場合ニ於テハ、必ス以

テ根拠トスヘキモノタリ

本邦ニ於テハ古來土地ヲ貴重スルノ風習ニシテ、凡ソ土地ノ經界ヲ圖シ所有ノ別ヲ立ルニ至テハ、其地ノ佃位如何ヲ問ハス寸分ノ微ト雖トモ決シテ之ヲ忽ニセス、殊ニ町村ノ經界封土ノ境域ノ如キハ自然ニ嚴格ナル區域ヲ存セリ、唯昔時人民ニ土地ノ私有ヲ許サ、ルカ為メニ、一地毎筆ノ図籍ヲ明ニスルノ必要少ナキト、百般ノ事實概ネ古伝旧慣ニ依リ必シモ簿籍ニ依頼セサルノ風習ナリシカ為メニ、簿冊ノ設ケ未タ完備ナラサリシ而已

維新以後人民ニ土地ノ私有ヲ許シ、又百般ノ事物漸ク簿籍ニ頼ルノ風ヲ成シ始メテ地籍ノ精ヲ要スルニ至リ、地租改正ノ事業ニ依テ種其整理ノ緒ニ就キタリト雖トモ、當時未タ大ニ力ヲ図籍ニ致スニ違アラズ、從テ其整理保存ノ方法順序モ未タ確立セズ、故ニ改租後数年ヲ経テ地籍頗ル紊亂シテ重複脱漏誤謬ノ地アルヲ見ルニ至レリ、明治十九年以後更ニ土地整理ニ着手シ、實地ヲ照査シテ毎地毎字及ヒ毎町村ノ図籍ヲ作り、毎地ノ所在沿革及ヒ形状広狭ヲ明ニシ、佃位ノ高低所有ノ移動ヲ審カニスルノ基礎ヲ立ルヲ得タリ、若シ今ニシテ地籍ノ整理ヲ永遠ニ維持スルノ方法ヲ設ケサレハ、更ニ再ト錯亂シテ復收拾スヘカラサルニ至ラントス

今本邦ノ地籍ニ關スル行政ノ狀況ヲ按スルニ、郡区役所ニ地券台帳ヲ備ヘ土地ノ交換異動アル毎ニ之ヲ更正釐革スヘキ順序ナリト雖トモ、其簿冊ヲ管スル所ノ官吏ハ各種ノ雜務ヲ兼掌シ執務ノ精神專一ナラス、從テ技能精緻ニ至ラサルヲ以テ勞多クシテ實踐奉ラス、概モスレハ疎漏錯謬ニ陥ルハ自然ノ勢ニシテ免ルヘカラサル所ナリ、殊ニ官有ノ土地下民有ノ土地トハ全ク其所管ヲ異ニスルカ如キ組織ナルヲ以テ、徒ラニ勞費ヲ増シ錯謬ヲ醸スノミ、蓋此等ノ組織ハ頼テ以テ地籍ノ整理ヲ望ムヘキモノニ非ス

今ヤ每人土地所有ノ權ヲ証スルニ地券アリ、又其所有權ノ移轉ヲ証スルニ登記法アリト雖トモ、地券ト謂ヒ登記ト謂ヒ共ニ實地ノ如何ヲ見ルニ足ラス、唯地券台帳ニ拠ルニ過サルヲ以テ、若シ其台帳ニシテ錯謬アレハ從テ其錯謬ヲ襲

ヒ、遂ニ地籍ノ紊亂ト俱ニ地券登記ノ錯謬ヲ致スハ必然ノ事ナリトス、故ニ地籍整理セサレハ登記法亦確実ナルヲ得サルヘシ

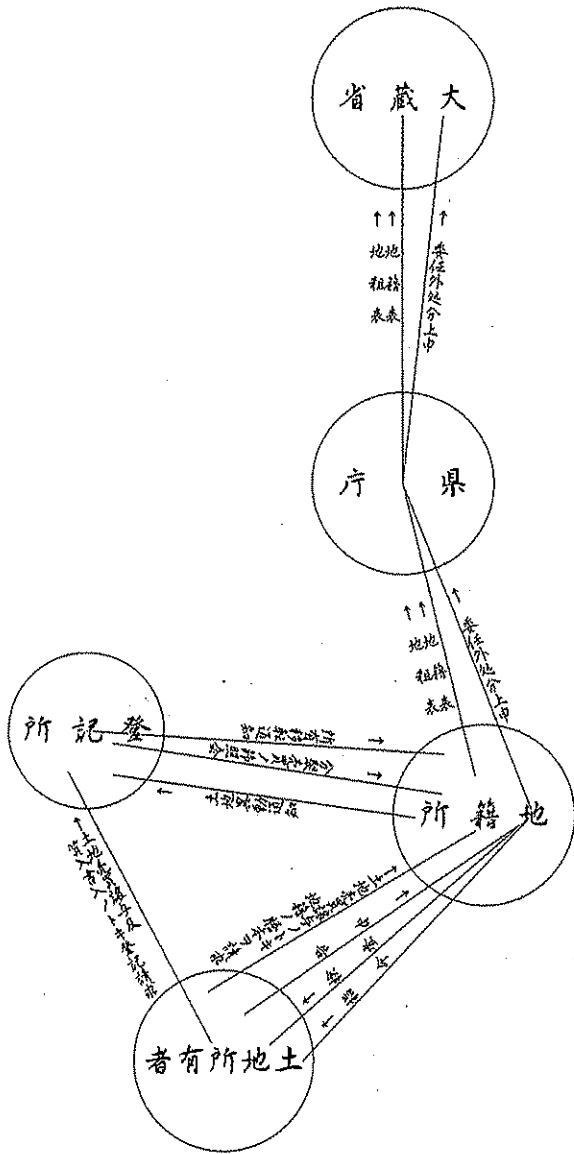
況ンヤ本邦歲入ノ最大要部タル地租ノ徵收上ニ於テモ、地籍ノ整理ヲ要スルハ論ヲ俟タズ、改租以來巨多ノ勞費ヲ以テ調整セシ図籍ノ如キハ、主ニ地租徵收ノ為メニセシモノナリト雖トモ、亦以テ前述諸般ノ目的ヲ達スルノ用ニ供スルニ足レリ

今幸ヒニ前述図籍ノ利用スヘキモノアリ、是時ニ方リ其整理ヲ維持スルノ方法ヲ設定セハ、勞少シテ効率リ以テ永遠不易ノ基ヲ立ルヲ得ヘシ、然レトモ地籍ノ整理ハ格段ナル事務ニ屬シ、其所置ノ敏捷確実専門練熟ノ技能ヲ要スルトナリシニ、普通ノ行政事務ヲ管スル郡區長ニ囑任シ、數多ノ雜務ヲ混同掌理スル吏員ノ兼掌ニ委シテ其整理ヲ求メント欲スルモ、決シテ得ヘカラサルノ望ミナラン

又從來取扱ノ如クスルトキハ、土地ノ異動アルニ際シ所有者ヨリ願進ヲナストキハ郡區役所ヲ經由スルノ順序ニシテ、之ヲ地券台帳ニ照合シ相違ナキモノハ地方庁ニ送達シ、地方庁ハ其都度検査員ヲ派遣シ實地ヲ検査セシメ、処分済ノ後再ヒ地券ノ訂正ヲ請ハシムルノ成規ナリシヨリ、郡役所ニ於テハ一地ニシテ數回ノ手數ヲ要スルノミラス、地方庁ニ於テハ検査員派遣ノ煩雜ナルヨリ自然延滞セルカ為メニ、土地所有者ハ往々時機ヲ失シ事業上ニ支障ヲ來スノ恐れ尠カラス、之ヲ土地事務ノ吏員ニ委シ階般ノ処理ヲ為サシムル時ハ、郡區長ニ於テハ繁雜ナル事務ヲ避ケ從テ土地所有者ノ手數ヲ減シ、又地方庁ニアリテハ其時々検査員ヲ往復セシムル等ノ冗費ヲ省キ、官民ノ便宜ヲ得テ地籍ノ整理益々確実ニ帰スルニ至ルヘシ

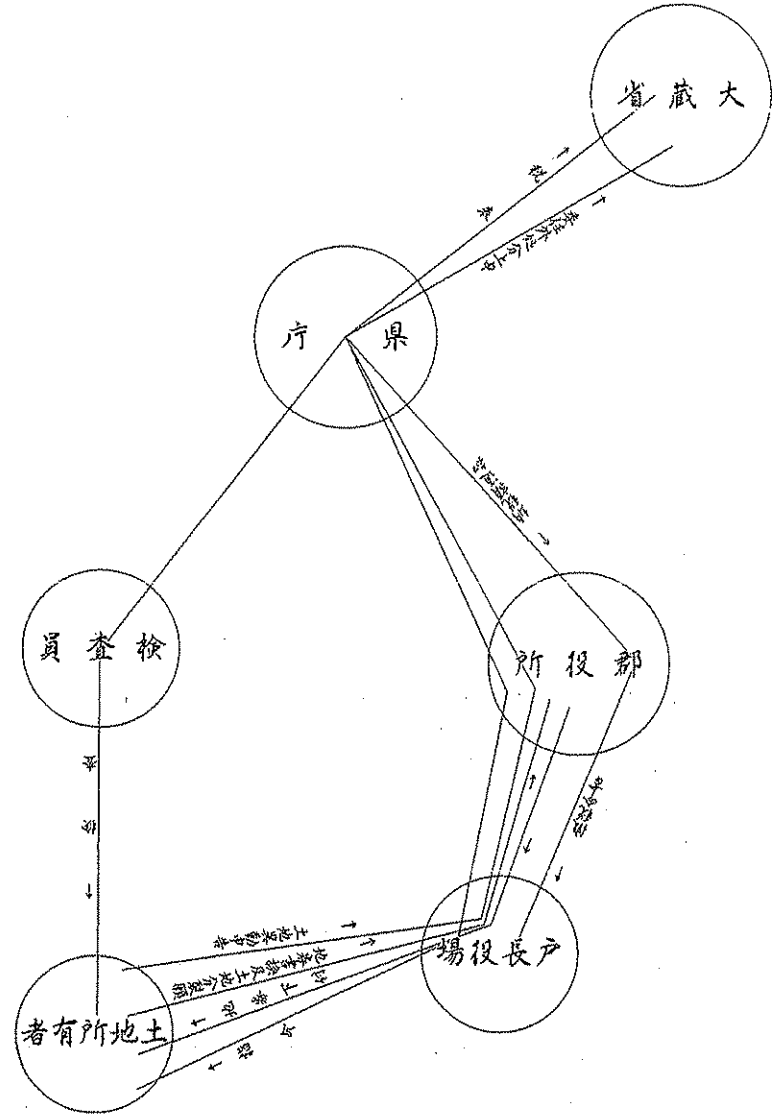
故ニ各地方ニ地籍所ヲ設ケ、特ニ專務ノ吏員ヲ置キ專心一意処務ノ敏捷確実ヲ図ラシメ、現今僅ニ整備セル所ノ図籍ヲ保持シ復タ錯亂スルコトナカラシムルハ、單ニ地租徵收ノ上ニ於テモ方々忽諸ニ付スヘカラサルコトタリ、況ンヤ

地籍事務組織



登記法ノ確實ヲ維持シ其他前ニ述ル國家経綸上ノ必要少カラサルニ於テオヤ  
 地籍所設置ノ費用ノ如キハ将来別ニ増加ヲ要セス、目下一般税務ノ為メニ消費スル所ノ額ヲ充用スルヲ以テ足レリト  
 ス、畢竟現在ノ状況ニ於テハ数多ノ人員相混シテ数多ノ事務ヲ管掌シ、理務ノ脈絡一貫セサルカ為メ許多ノ扞格乖離  
 フ来シ、又從テ鹵莽粗雑ニ流レ更訂精査ヲ要スルコト多ク、加フルニ官民有地ノ所管ヲ異ニスル等ノ不便アリ、其間  
 徒勞徒費ヲ致スモノ少カラスト雖トモ、專任ノ地籍所ヲ設ルトキハ是等ノ徒勞徒費ハ全ク減却シテ、将来吏員練達ノ  
 後ハ其事務ニ対スル經費ノ減少期シテ望ムヘキナリ  
 今專任ノ地籍所ヲ設置スルハ、恰モ新規ニ一種ノ官衙ヲ設クルノ感アルカ如シト雖トモ、其現在府県郡区ニ於テ執  
 ル所ノ地籍ノ事務ヲ地籍所ニ移シ、從來混同処理セシモノヲ各自ニ分掌セシメ、以テ統理ノ脈絡ヲ一貫スルニ過サル  
 ナリ、即チ別紙地籍事務組織並ニ現行地租事務取扱組織ノ図解ヲ添ヘ供覽

# 現行地租事務取扱組織



## 地券ヲ廃止シ地籍ヲ必要トスルノ議

中村

地籍條例ヲ制定シ地籍所ヲ設置セラレ、該法実施ノ際地券ハ廃止ノ計画モアルヨリ、地押調査上発見ノ異動地ニ係ル地券書換ハ殆ント三千万筆ノ巨數ニテ、容易ノ整理ニアラサルヨリ、当中止ノ訓示ニ相成居候処、條例制定ノ議ハ急速ノ御詮議ニモ至リカタキ由ニ就テハ、此上無期限ニ地券ノ書換ヲ中止シ置クトキハ、自然官簿ノ整備ヲ欠キ紊乱ヲ醸成スルノ媒介タルヘキニヨリ、此際地券ノ存廃ヲ定メ土地ニ関スル帳簿ノ整理ヲ計ラサルヘカラス

因テ按スルニ、従来ノ如ク地券ヲ存在セントセハ、先以テ三千万筆内外ニ係ル地券台帳ヲ整理シ、毎筆ノ地券ヲ調製シ下付セサルヘカラス、之ニ対スル経費モ夥多ヲ要シ容易ノ事業ト言ヲ得ス、然ラハ断然廃止ノ処分ニ出シカ、之レカ廃止トナルトキハ共ニ地券台帳ノ廃棄ニ属スヘキニヨリ、地租賦課ノ基本トスヘキ毎筆ノ反別地価地租及ヒ所有者ノ氏名ヲ官ニ於テ徴スヘキモノナク、荒地開墾地目交換等ノ異動アルニ際シ其土地ノ賦除租ヲ為ス能ハサルニ至ル、故ニ之レニ代ルヘキ簿冊ノ完成スルニ非サレハ決シテ廃止セラレ難キモノナリ

議者或ハ曰ク、毎筆ノ反別地価所有者ノ氏名等ヲ知ラント欲セハ、戸長役場ニ備置スル土地台帳ヲ利用シテ可ナリ、地券ハ廢絶スルモ地租ノ賦除ニ於テ何等ノ差支アラシヤト、抑モ戸長役場ニ備置スル帳簿タルニハ土地台帳一ハ所有者名寄帳ナリ、其土地台帳ナルモノハ土地番号順ニ反別地価地租等ヲ登録シ、名寄帳ナルモノハ各地目ヲ類別シ人別限ニ記載シタルモノニシテ、是迄ノ経験ニ徴スルニ名寄帳ノ方ハ毎納期地租ヲ徴收スル上ニ於テ、各自ニ伝令スル員額ノ必要ニシテ片時モ等閑ニ付シ難キモノナレハ、地租ノ異動所有ノ移転等ハ務メテ加除訂正ヲナシアリシモ、議者ノ論スル土地台帳ノ方ハ土地ニ異動アリシ際ニアラサレハ照査ヲ為スノ用ナク、為メニ時々異動ノ訂正ヲ怠リ、不完備ノ簿冊ニシテ地租賦課スルノ原簿ト為スカ如キハ、言フヘクシテ行ウヘカラサル論タルヲ免レス、況ンヤ爾来ハ町村制度ヲ実施セラレ、民選町村長ノ担理ニ係リ充分ノ監督ヲモ為シ能ハサルモノニ於テヤ、町村役場帳簿ノ頼ム



ヘカラサル此ノ如シ

故ニ地券ヲ廃止セントセハ、必ス官ニ於テ公正ノ帳簿ヲ備エ相當官吏ヲシテ之ヲ管理セシメ、每筆ノ字番号等級ヨリ反別地価地租及所有者ノ氏名等ヲ巨細ニ登録シ、常ニ其異動ヲ整理シ紛乱錯雜ナカラシムルハ、国税ノ最大部タル地租ノ賦課徴収上ニ必要欠クヘカラサルハ、固ヨリ論ヲ俟タサルナリ

今日ノ情勢ニ於テハ早晚地券ハ廃止セサルヘカラサルノ時機ニ際会シ居ルヲ以テ、目下堆積セル三千万筆ヨノ地券ヲ調製下付スルハ警事ニ属スヘキニヨリ、寧ろ廃止ヲ断行シ中止ニ係ル異動ノ土地ヲ該台帳ニ加除更正シ、之ヲ土地台帳ト改称シ従前ノ如ク郡区役所ニ於テ管理セシムルコトトセハ、敢テ地租ノ賦課徴収上ニハ差支アラサルヘシ

然レトモ、地券ナルモノハ明治六年以降民間ニ於テハ土地ノ確証ナリ、地券ヲ所有セサレハ土地ノ所有權ナキモノトノ習慣ヲナシ居ル今日ナレハ、登記法ノ頒布後先買移転セシモノハ登記ノ謄本ヲ受クルコトヲ得、地券ニ換ユルノ確証ヲ所持シ得ヘキモ、一億二千万筆已上ノ土地其売買譲与ニ係ルモノ僅カニシテ、大部分ノ土地ハ今日モ尚ヲ地券ヲ以テ所有權ノ確証ナリトシ、民間互双ノ融通ニモ利用シ居ルモノナレハ、今廃止ニ際セハ無証抛トナリ、毎地每筆ノ員額ヲ知ラントスルモ之ヲ求ムルニ由ナク、中心安カラサルノ感想ヲ懷キ、地券ニ換ユルノ功力アル毎筆ノ明細書ヲ請求スルニ至ルヘキハ必然ナルニヨリ、土地台帳ノ謄本ヲ請求者ニ下付スルノ道ヲ開キ、官ニ備ユル台帳ト照応セシメ、土地ノ取扱上諸般ノ便宜ヲ企図セサルヘカラサルナリ

以上陳述スル如キ方針ニ決スルモノトセハ、差向台帳ノ整理ニ少クトモ三十万円以上ヲ要スヘク、而シテ事務取扱上モ依然トシテ在来ニ異ナルコトナシ、今日計画スル所ノ地籍法ニ抛ルトキハ、取扱官衙ノ位置ハ郡役所ノ所在地ニ置クヲ以テ、敢テ所有者ニ不便ヲ感セシメサルノミナラス、専務ノ官吏ヲシテ該事務ヲ取扱ハシムルニヨリ、従前ニ比スレハ諸般敏捷ニ処理シ得、且ツ重大ニ係ル事務ノ外ハ概不該処ニ委任スルヲ以テ府県庁ニ往答スルノ勞ヲ省キ、土

地ニ関スル諸進達警等戸長役場ヲ經由スルコトヲ止メ、土地ノ異動其他諸願届書等ヲ為スニ際シ、所有者自カラ之ヲ調製シ能ハサル者ニ対シテハ、其依頼ニ応シ丈量製図其他ノ願書ヲ調製スルヲモ、該吏員ヲシテ弁理セシムル等簡易取扱ノ道ヲ開クヘキ目的ナレハ、是迄戸長役場ニ於テ其時々照査スル等ノ繁雜ナル事務ヲ避クルノ便益アリ、斯ノ如ク戸長役場ヲ經由セサルコト、為セハ、該役場ニ備置スル土地台帳ハ地籍所ニ引継カシムルモ可ナルヲ以テ、廢棄ニ屬セシ地券台帳ヲ新タニ修補セシムルノ勞費ナク現行取扱ノ儘ニ據置クトハ、一層官民ノ便利ヲ得ヘキハ信シテ疑ハサルコトナレハ、希クハ速ニ地籍法ノ御決裁アラントヲ切望ノ至リニ堪エサルナリ

#### 地籍条例草案ニ関スル意見書

地籍条例草案ノ要領ヲ總括スレハ、其結果ニ於テ左ノ三個ノ目的ヲ有スル者ノ如シ

第一 従前ノ定額稅ヲ改メテ配當稅トナスコト

第二 従前ノ地價稅ヲ改メテ收益稅トナスコト

第三 米価利子ノ作用ニ依リ地租改正ノ不公平ヲ引直スコト

故ニ今地籍条例草案ノ可否得失ヲ論断スルニ當リ、右三項ノ順序ニ從ヒ一々之ヲ推究スヘシ

#### 第一 従前ノ定額稅ヲ改メテ配當稅トナスコト

元來配當稅ナル者ハ其真主意ニ從ヘハ年々國會ニ於テ其租稅ノ總額ヲ議決シ、順次之ヲ州邑等ニ配當スヘキ性質ノ者ナルヲ以テ、其稅率ハ年々増減變更アルヘキヲ常トス、然レトモ地租ノ如キ其稅率年々ニ變更スルトキハ、農産經濟上ニ於テ不利少カラサルヲ以テ、海外諸國地租ニ配當法ヲ用フル者ト雖トモ、概ネ其租額ヲ一定シ年々増減變更スルコト無シト關ク、是其國會議員ノ能ク經濟ノ利害ヲ了解セルヨリ起リタル良習慣ト云フヘキ也、然レトモ方今我國ノ

如キ未熟不鍛鍊ナル國會ニ向テ、歳入全部ノ過半ヲ占ムル所ノ地租ヲ以テ配当税ト為スハ、太々危険ナルノ虞ナシト云フ可ラス、何トナレハ配当税ナル者ハ年々其總額ヲ増減變更スルヲ以テ真主意トナス者ニシテ、又年々之ヲ増減變更スルノ甚々容易ナル者ナルヲ以テ、假令地籍條例草案第十八条ニ於テ地租總額ヲ若干万円ト定ムルノ明文アリト雖トモ、該条修正ノ意見ハ年々國會議場ノ一大問題ト為リ、政府ト國會トノ間ニ於テ將來年々多少ノ葛藤ヲ生スルノ虞ナシト云フ可ラス、或ハ又之方為メニ農産經濟ノ目的ヲ顧ルノ虞ナシト云フ可ラス、却テ速ク現行地租條例定額税ノ基礎安全鞏固ナルニ及ハサル者アルカ如シ、然レトモ是憲法上ノ問題ト密接ノ關係ヲ有スルヲ以テ、容易ニ論断ヲ下ス可ラス、樞密院ノ如キハ自ラ意見ノアルアラン

### 第二 従前ノ地価税ヲ改メテ収益税トナスコト

租税ノ宜シク収益ニ課スヘクシテ資本ニ課ス可ラサルハ税法一般ノ原則ナルヲ以テ、本項ニ於テハ大ニ原案者ニ向テ同意ヲ表スル所ナリ、然レトモ是モ亦一概ニ論ス可ラサル者アリ、一經濟學士ノ説ニ「エンサイクロペジ」、ブリタニカ「租税条下ニ見ヘタル「ミル」氏ノ説ナリシカト覺之、租税ノ宜ク収益ニ課スヘクシテ資本ニ課ス可ラサルハ固ヨリ論ナシト雖トモ、資本ニ向テ課スル所ノ租税モ其額多ラサレハ却テ資本ヲ増殖シ、収益ニ向テ課スル所ノ租税モ其額多キトキハ却テ資本ヲ減少スルノ事實アルヲ以テ、其課税ノ形状ノミニ依リ經濟上ノ真利害ヲ容易ニ断言ス可ラスト云ヘリ、故ニ今此地価税ヲ改メテ収益税ト為スニ當リ、其官民ノ勞費モ甚々多ラス、又其改算ノ手數モ甚々容易ニシテ、將來大ニ地租ノ賦課徴収上ニ於テ便利ヲ生スルコトアラハ、断然地価税ヲ改メテ収益税ト為スモ不可ナカルベシト雖トモ、若シ地価税ヲ改メテ収益税ト為スニ當リ、官民共ニ巨多ノ勞費ヲ要シ巨多ノ葛藤ヲ生スルノ虞アラハ、必シモ強テ之ヲ執行スヘキノ必要アルヲ見サルナリ、故ニ本項ノ可否得失ヲ論断スルハ次項所得算出ノ方法如何ヲ推究シテ、而シテ後之ヲ決定スルヲ以テ至當ノ順序ト為スヘキ也

### 第三 米価利子ノ作用ニ依リ地租改正ノ不公平ヲ引直スコト

原案ニ添付セル配当地租計算表(第二十五号)ナル者ハ、地租改正ノ際ニ當リテ査定シタル收穫米ヲ用ヒ、明治六年ヨリ同二十年ニ至ル十五ケ年間最昂最低各兩年ヲ除キ、中間十一ケ年各府県下著名ノ市街上中下米ノ相場ヲ平均シ、之ニ因テ以テ其所得ヲ算出セル者ナルカ故ニ、其目的專ラ米価ノ作用ニ依リ各府県ノ間ニ於ケル地租改正ノ不公平ヲ引直サント欲スル者ナリ、又同案ニ添付セル所得算出方法省令案(第九号)ニ依レハ、地価ヲ実トシ地租百分三ニ地方税率百分一及ヒ各府県下平均利子歩合ヲ加ヘ、之ヲ法トシ法ヲ以テ実ヲ除シ得ル所ノ數ヲ以テ其所得ト定ムル算則ナルカ故ニ、其目的專ラ利子ノ作用ヲ以テ各府県内ニ於ケル地租改正ノ不公平ヲ引直サント欲スル者ナリ、然ルニ前年地租改正ノ實際ニ於テハ收穫ト利子ト米価トノ三者互ニ相待テ其有餘不足ヲ斟酌シ、辛フシテ現今ノ地租額ヲ定メ人民ノ同意ヲ得タル事實モ亦少ラサルヲ以テ、今其收穫ヲ動スコト無シテ單ニ米価ト利子トノミヲ變更シテ、以テ之ガ公平均ニヲ求ムルハ所謂枘子定規タルヲ免レスシテ、實際不公平ノ上ニ不公平ヲ重ネ、不均一ノ上ニ不均一ヲ重ナルノ虞ナシト云フ可ラス、又官民巨多ノ勞費ヲ要シ巨多ノ葛藤ヲ生スルノ虞ナシト云フ可ラス、

今若シ地租ニ常ニ其公平均一ヲ保持シテ失ハサルノ良法アリヤ否ヤト問フ者アラハ、毫モ脚蹠スルコト無クシテ決シテ無シト答ヘサルヲ得ス、一國家學士嘗テ地租改正ヲ論シ「ブルンツリー氏「スターツ、ウエルテルブツフ」地租条下ニ見ヘタリト覺之、地租ヲ以テ公平均一ニシテ道理ニ協ヒタル租税ト為ント欲スルニハ、必ズ年々其収益ヲ審査シ之ニ向テ租税ヲ賦課スルノ外他ニ方法無ルヘシ(従前我國ノ檢見法ノ如キ者)、此事實際決シテ行フ可ラサル以上ハ、地租ハ必ズ多少ノ不公平アルヲ免レサル者トシ、地租改正ヲ以テ希臘女神ノ裁縫ニ比シ一面漸ク公平ヲ得ントスルニ方レハ、他ノ一方ニ於テ既ニ已ニ又一ノ不公平ヲ生スルヲ免レサルコトヲ極論セリ、然レトモ數十年前ノ久シキヲ經其公平均一ヲ失フノ太シキ大ニ農産經濟ノ利便ヲ失フニ至レハ、已ムヲ得スシテ地租改正ニ着手セサル可ラサルコト

アルヘキナリ、ソレスラモ英國ノ首府タル倫敦市街ノ如キハ、方今其中心タル繁盛ノ市街ハ往古ノ如税ノ儘ニシテ、目下既ニ場末ニ墮シタル古ヘノ倫敦市街ハ却テ市街ノ重税ヲ負フカ如キコトアリトカ聞ケリ、然ルニ我國ノ如キハ地租改正ノ整頓ヲ未ルコト未タ十年ニ滿タス、此時ニ當リ前陳ノ如キ支離不完全ナル方法ヲ以テ其不公平ヲ引直サント欲スルハ、更ニ目下ノ急務ナルヘシトハ考ヘラレサル也、何況ヤ、此算則ニ拠リ各府県内ノ各郡村ニ於テモ亦全國ノ官城福島等數県ニ於ケルカ如キ者アリテ、改算ノ際苦情百出スルノ虞ナシト云フ可ラサルニ於テヤ

故ニ此際是非從前ノ地価稅ヲ改メテ収益稅ト為スノ必要アリトスルモ、其算則ニ至テハ極メテ簡單ノ法ヲ用ヒ、現行地租ノ四倍即チ券面地価十分ノ一ヲ以テ其所得ト定ムル等ノ方法ヲ用ヒ、必ス人民各自ノ間ニ於テハ、此改算ノ為メニ租稅ヲ増減セラル、ノ幸不幸ヲ異ニスル等ノ事実ナカラシムコトヲ欲セリ、而シテ又農産ヲ作興シテ帝國ノ実力ヲ涵養スルカ為メニ、目下地租ノ幾分ヲ輕減スルヲ以テ方今必要ノ得策ナリト為サハ、此所得算出トハ相關連スルコトナク、斷然地租十分ノ一即チ四百万円ヲ輕減シ、現行地稅率百分ノ二・五ヲ改メテ百分ノ二・二五ト為スニ若カサルベシ、是其國庫ニ於テ失フ所ノ金額ハ殆ト原案ト同一ナリト雖トモ、其結果ノ公然明白人々ニシテ解シ易キニ至テハ、固ヨリ同日ノ論ニ非サルヘシ、其他地籍條例草案各條ニ就キ少シク異見ナキニ非スト雖トモ、事枝葉ニ涉ルヲ以テ姑ク之ヲ省ク

(財務省財政史室所藏「松方家文書」第36号―20―24)

### 6、〔明治21年〕地籍條例原案

秘「地籍ニ関スル最後ノ案」

#### 地籍條例制定ノ議

現行地籍條例ハ改租ノ成蹟ヲ維持シ賦租ノ基本ヲ鞏固ニスルヲ以テ主ト為シ、賦租ノ方法整理ノ順序等概ネ地租改正法ニ率由セリ、而シテ夫ノ図籍ノ如キ當時地租改正ト共ニ每五年ニ新製ヲ期セシヲ以テ、未タ全ク備ハラサルモノアリ、或ハ散逸シタルモノアリ、其存在スルモノモ改租後殆十年漸ク紛乱シテ復タ見ルヘカラサルモノアリ、又其實地ヲ願レハ土地ノ官簿ニ漏泄シテ地租ヲ通脱シタルモノアリ、又官簿ニ簿記シテ地租ヲ重課セラレタルモノアリ、或ハ熟田ノ荒地ト稱シテ賦租ヲ免レタルモノアリ、或ハ丈量ノ誤謬ニ由リテ面積ノ正シカラサルモノアリ、或ハ原野ノ既ニ開墾シテ田圃トナリタルモノアリ、図籍ト實地ト齟齬シテ根柢漸ク將ニ乱ントス、是ニ於テ地租條例ノ頒布後圖籍整理ノ事ヲ令シタリ、其圖籍ヲ整理スルハ先ツ實地ヲ正フスルニ在ルヲ以テ、地押調査ノ事起リ將ニ本年ヲ期シテ其事ヲ了セントス、今地押ニ由リテ整理スル所ヲ觀ルニ、土地ノ異動スルモノ總計式千五百万有餘筆ニシテ、即全國筆數四分ノ一二達セリ、夫ノ脱落重複丈量誤謬等ニ由リ租額ノ正シカラサルモノモ皆整理ノ緒ニ就キ、全國ノ民地全ク整齊シ圖籍モ亦完全ナルニ至ルヲ得タリ、抑改租ノ時ニ方リテハ封建割拠ノ余ヲ承ケ田制ノ潰乱其極ニ達シ、文運未タ開ケス民心未タ安カラス、施為ノ間主トスル所ハ其大綱ヲ提ケ旧租ノ偏畸ヲ救フニ在リ、其今日地押ヲ奉行シ改租ノ欠漏ヲ補ヒ田制ノ拡張ヲ図リシモ、亦已ムヲ得サルナリ、夫レ土地ノ圖籍タル面積ヲ正シ所有ヲ明ニシ、以テ財政ノ要務タルノ外又以テ帝國ノ版圖ヲ定ル所ノモノニシテ、其關係スル所極メテ重シ、而シテ其之ヲ整頓スルハ管守ノ煩スルヲ便ニスルニ非レハ其実ヲ舉ルコト能ハス、官地ト民地トハ境界相接シ輻輳相承ケ其管理固ヨリ相離ルヘカラス、今ヤ民地ノ圖籍既ニ能ク整理セリ、此時ニ方リ各地ニ地籍所ヲ置キ主任官ヲ設ケ、専ラ土地ノ整理ニ任セシムルトキハ民地ノ整理將來益完ク、又特ニ費ス所ナク官地モ亦將ニ自ラ整理セントス、且夫レ現行ノ租法タル賦租ノ本ヲ明ニシ改租ノ蹟ヲ固クスルニ在ルヲ以テ、土地ノ變故ハ一々調査シ地価ヲ修正シ地租ヲ増減スルモノト為シ、

地目変換畦畔廢設ノ小故モ条例ニ於テ其願出届出ノ制ヲ立テ、又之方罰則ヲ設ケタリ、然レトモ人民ノ法令ニ悞ハサル、其土地ヲ變賣スルモ肯テ之ヲ申告セス、知ラス識ラス条例ニ触ル、ニ至ル、今之ヲ履行セントスルトキハ、夫ノ地押ニ類ルノ外他ノ方法アルコトナシ、而シテ其地押ヲ願ハハ官民ノ勞費頗ル大ナリ、方今農事ヲ勸メ国力ヲ養フノ急ナルニ、若キ地押ヲ執行シ若キ小故ヲ調査シ頻ニ地租ヲ増減スルハ、徒ニ煩擾ヲ醸ス耳、其官民ノ得ル所以テ其失ヲ所ヲ償フニ足ラス、反テ私有物權ノ安固ト國家算有ノ基本ヲ害セントス、今改租ノ欠漏ハ今画ノ地押以テ之ヲ補正シ、土地ノ歩積懸額漸ク中正ニ帰スルヲ得タリ、地租ノ制度ハ改租ニ由リテ大本既ニ定リ地押ニ由リテ節目準ル、則現法ノ畦畔廢設地目変換ノ如キ、土地ノ小故ハ一切不問ニ措キテ其地価ヲ修正セス、開墾ノ如キ勤勞ニ由リテ土地ヲ改良シタルモノハ大ニ其年期ヲ長フシ、地力衰頹シ若クハ地位降下シタルモノハ特ニ其地価ヲ修正シテ賦租額ヲ輕フシ、又國家經濟ノ緩急ヲ計リ地租ノ課率ヲ減シ竹田ヲ勸メ民力ヲ養ハントス、今現法ト比シ其利害ヲ約言スレハ

- 一 現法ハ府県郡区町村各區籍整理ニ任シタルモ、地籍條例ハ其事務ヲ一切地籍所ニ屬スルヲ以テ、府県郡区町村ノ煩ヲ除キ、且地籍紛乱ノ憂ヲ免ル、事
- 一 現法ハ内務省ハ地籍ヲ編成シテ官地民地ヲ調査シ、大藏省ハ土地台帳ヲ編成シテ地租ヲ整理セシモ、地籍條例ハ官地民地ヲ一齊ニ地籍所ニ任スルヲ以テ、從來町村ニ於テ負担スル所ノ地籍編成ノ勞費ヲ減シ、併セテ官地ノ整理完全ナルヲ得ルコト
- 一 現法ハ地券ノ制アルモ、地籍條例ハ之ヲ廢スルヲ以テ、從來地券書換ニ要シタル郡戸長及所有者ノ勞費ヲ省ク事
- 一 開墾其他勞費ヲ用ヒ地力ヲ進メタルモノ、地租ヲ増課セス、又開墾年期ヲ長フスルヲ以テ、陸田ノ開墾山林ノ樹芸興起シ一般ノ農事發達スル事
- 一 現法ニ於テハ地力衰頹シテ其收穫ヲ減損シ、土地衰微シテ其品位ヲ降下シタルモノ、地価修正ヲ許サ、リシモ、

地籍條例ハ之ヲ調査シテ其地租ヲ輕減スル事

- 一 畦畔廢設地目変換等ノ地価修正ヲ廢スルヲ以テ、大ニ土地検査ニ屬スル官民ノ勞費ヲ省クコト
  - 一 前項ノ如ク土地ノ小故ニ由リ地価ヲ修正セサルヲ以テ、大ニ賦課徴収ノ煩勞ヲ省ク事
  - 一 地籍條例ハ地租不納処分ヲ市町村ニ負担セシムルヲ以テ、遽ニ官沒公売ノ処分ニ至ラスシテ土地保護ノ便ヲ得ル事
- 是レ本按ノ要目ナリ、夫ノ地籍所ヲ置キ官吏ヲ設ル費用ノ若キハ、現時ノ徵稅費額以テ支弁スルニ足リ、敢テ増費ヲ要セス、茲ニ大藏省官制改正按并地方地籍官ノ組織、登記法中改正ノ要件ヲ記載シ閣議ヲ請フ

内閣總理大臣宛

大藏大臣

〔国立公文書館所蔵「日賀田家文書」第5号—43〕

〔地籍條例勅令案等は省略〕

朕地籍條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

内閣總理大臣

大藏大臣

法律第 号

第一条 凡帝國土地ノ地籍ハ此條例ノ定ル所ニ從フモノトス

第一条說明 一國ノ法律ハ其物ト人トヲ治メ、土地ト人民トハ特殊ノ管理ニ掃スヘ者ナリ、即チ地籍ハ帝國ノ版圖ヲ明ニシ、官有民有ノ區別ヲ定メ土地ノ權利義務ヲ鞏固ニスル者ナリ、本邦ノ地籍ハ尙創始ニ屬シ混然トシテ未タ一定セサル者アリ、故ニ特ニ本条ヲ設ク

第二条 地籍トハ土地台帳地圖及地租台帳ヲ總稱ス

第二条說明 從來ノ地籍ナル者ハ未タ普ク行ハレス、故ニ現今ニ在リテハ官民有ノ土地共ニ一定ノ圖書アルコトナシ、仍テ地籍簿ヲ設ケ官民有ヲ問ハス尽ク之ヲ登錄スル者トス、而シテ其官有ニ係ル土地ハ漸次整理スル者ト爲シ、其民有地ハ將ニ土地台帳ヲ以テ之ニ充テントス、是從來ノ県庁郡衛地券台帳ハ或ハ正確ヲ得サル者アリト雖モ、今回土地整理ニ由テ新調スル所ノ土地台帳ノ正確ナルニ由ル、又其地圖ノ從來杜撰籠笨ナル者モ今回新調製スルニ由リ

第三条 土地台帳ニハ土地ノ番号名称面積等級所有ノ區別及所屬又ハ所有者ノ名ヲ登錄ス

第三・四・五條說明 仏國ノ制ヲ按スルニ公有ノ土地官有ノ土地アリ、之ヲ合シテ國有ノ財産トス、其共和曆七年三月三日法律第七章ヲ按スルモ、其收利アル者ハ副稅ヲ負擔シ、其收利ナキ者ハ之ヲ負擔セス、獨國ノ制モ亦此ノ收利ノ有無ニ由リテ國有財産ヲ區別セリ、然レトモ千八百八十五年六月廿五日ノ法律第六條ニ依レハ、國稅ヲ免除シタル土地ニハ地方ニ於テ副稅ヲ課セス、但特別所得稅ヲ附加スルトキハ、收利アル國有ノ土地ニハ之ヲ課スルモノトセリ

本条ノ國有土地ハ官庁等政府ニ屬シテ收利ナキ者、又森林鉾山鐵道工場耕地牧場等收利アル者モ之ヲ併稱シタル者ナリ

明治七年第百廿号<sup>地籍</sup>所名称區別ノ布告ハ、地方稅ノ制度ナキ時ニ於テ定メラレタレトモ、其後地方稅ノ經濟ニ屬スル物件ヲ生シタルヲ以テ、是等ハ宜ク國有ト區別セサルヘカラス、仍テ府県有土地ノ一項ヲ掲ク

元第五條說明 普國ノ制ニ地籍官一名アリテ、地租法家屋稅法等ニ從ヒ所有者ノ轉換ヲ登記シ地租帳地圖等ヲ整理シ、又登記ノ際費用ノ大數ヲ爲シ賦稅減稅除稅等ノ令書ヲ發セリ、而シテ其職務ニ於テハ常々県庁ノ監督ヲ受テ之ヲ執行ス、其諸州県庁第三部ニ於テハ直稅官地官林ノ事ヲ掌リ、并ニ每郡ノ地籍局ヲ管理セリ、白耳義國地籍ノ制モ亦大同小異ナリ、我邦今日郡衛ハ地券台帳ヲ備ヘ、戸長役場ハ土地台帳ヲ備ルノ制ナリト雖モ、其整頓ヲ見ルハ蓋シ共ニ容易ニ非ルヘシ、仍テ將來ニ在リテハ郡衛ニ地籍官ヲ置キ、之ヲシテ地籍賦租ノ事ヲ專担セシメントス、然ルトキハ戸長役場ノ小ニ過キテ不整理ヲ見ルヲ防キ、併セテ官有地ノ管理ヲ正確ニシ政府一般ノ便益ナリトス

参照

第五條 地籍ニ關スル事務ハ郡役所ニ於テ之ヲ掌理スルモノトス

第四條 土地所有ノ區別ハ左ノ如シ

御料土地

國有土地

府県有土地

市町村有土地

私有土地

第五條 土地名稱ノ区分ハ左ノ如シ

皇室地	御陵墓地	皇族邸地	官庁地	神社地	寺院地	軍用地
市街宅地	郡村宅地	田	畑	塩田	鉱泉地	牧場
池沼	森林	山岳	原野	遊園	道路	灯台
鉄道用地	製作用地	溝渠	堤塘	運河	河川	河岸地
湖海	浜地	墓地	火葬地	雑地		

第六条 地図ハ村図字図町図ノ三種トシ、村図ニハ四隣ノ境界及毎字ノ地形ヲ画キ、字図町図ニハ四隣ノ境界及毎筆ノ地形番号等等級ヲ記入スルモノトス

第七条 土地ノ面積ハ市街宅地ハ坪数ヲ以テ定メ、其他ハ總テ段別ヲ以テ定ルモノトス

坪数ハ方一間ヲ坪トシ、坪ノ十分一ヲ合トシ、合ノ十分一ヲ勺トス、勺未滿ハ算入セス

段別ハ方一間ヲ歩トシ、三十歩ヲ畝トシ、十畝ヲ段トシ、十段ヲ町トス、但歩未滿ハ算入セス

土地ノ丈量ハ曲尺ヲ用ヒ六尺ヲ一間トス

説明 地租条例第五条ヲ掲ケ土地面積ノ称呼ヲ明ニス

第八条 土地ノ所有權ヲ移転シ又ハ質入ト為シ、及ヒ之ヲ解約シタル場合ニ於テハ、地籍官吏ニ申告シ手数料金貳錢ヲ納メ地籍ノ登録ヲ請フヘシ

第九条 土地ニ興動ヲ生シ左ノ各項ニ該ル者ハ、地籍官吏ニ申告シ手数料金三錢ヲ上納シテ面積所得ノ量定及地籍ノ登録ヲ請フヘシ

- 一 無租地免租地ノ有租地トナリタルトキ
- 二 有租地ノ免租地トナリタルトキ

- 三 有租地ノ荒地トナリ、荒地ノ有租地トナルトキ
  - 四 土地ヲ合併分裂スルトキ
  - 五 面積ノ量定ニ誤謬アルヲ発見シタルトキ
  - 六 地力ノ衰頹ニ由リテ地形ノ変シタルトキ
- 第十条 地籍ノ謄本ヲ要スルトキハ地籍所ニ出頭シ、左ノ手数料ヲ納メ之ヲ請求スルコトヲ得

- 土地台帳謄本一枚 金貳錢
- 地図謄本一枚 金貳錢

説明 本条例ニ於テ地券ヲ廢止スルヲ以テ本案ヲ設ク

第十一条 地租ハ府県有土地市町村有土地私有土地ニ配賦シ、御料土地固有土地ニハ之ヲ配賦セサル者トス

第十二条 府県有土地市町村有土地私有土地ノ中、左ノ各項ニ該ルモノハ地租ヲ免ス

- 一 府県庁舎其他直接ノ公用ニ供スル土地
- 二 鉄道用地公共ノ用ニ供スル道路溜池用悪水路溝渠
- 三 郷村社境内公園及公立学校地
- 四 禁伐林其他風火水災防禦ノ為メ公共ノ用ニ供スル土地
- 五 墓地火葬地
- 六 天災ニ罹リタル荒地

第十三条 説明 地租条例ニ於テ免租ノ明文アル者及從來免租シタル者ヲ掲ク、即地租条例第四条ノ道路郷村社境内公立学地溜池用悪水路堤塘并溝ハ本条第一第二第三項ニ入レ、墳墓地ハ第五項ニ之ヲ掲ク、鉄道ハ從來特ニ免租シ

禁伐森林ハ從來免租セサルモ、公益ノ為メ所有者自ラ直接ノ利益ヲ得ル能ハサル者ナルヲ以テ、今共ニ免租地ニ編入ス、其第五項衛生ノ用ニ供スル土地ハ即チ斃骸捨場火葬場ノ如キモノヲ云フ

第十三条 荒地ノ免租ハ被害ノ年ヨリ二十年以内トス

第十四条 地方ノ衰頹ニ由リテ地形ノ変シタルモノハ、現状ニ由リテ所得ヲ調査シ地租ヲ配賦スルモノトス

第十五条 第九条ノ三項ヲ除クノ外、処分ヲ了シタル土地ニシテ其免租ニ係ル者ハ其月ヨリ地租ヲ減免シ、其有租地ニ係ル者ハ翌月ヨリ地租ヲ配賦スルモノトス

第十六条 免租又ハ地租ヲ更定スヘキ土地ニシテ、其申告ヲ為ササルトキハ尚現地租ヲ徴収ス

有租又ハ増租ト為ルヘキ土地ニシテ其申告ヲ為ササルトキハ、変更ヲ生シタル時ニ遡リ其租額ヲ追徴ス、但五年以前ニ遡ルヲ得ス

第十七条 地租ハ年額金 円トシ、別表ニ由リテ府県ニ配賦ス

第十八条 地租ヲ毎地ニ配賦スルハ所得ヲ調査シ品位ヲ詮定シ、尚土地ノ情況ニ由リテ之ヲ定ム

十八條說明 地租改正ニ於テ定ムル所ノ地価ナル者ハ売買ノ市価ニモ非ス、又其土地ノ真価ニモ非ス、只課税ノ標準タル一種法律上ノ価格ニシテ、蓋シ空価ト云フ謂フヘキ耳、將來此空価ニ由リテ府県税以下ノ副税ヲ議定スルトキハ、課税ノ基本明ナラスシテ上下安固ノ念失セン、是本条ニ於テ地租ハ所得ニ由リテ將來徴収スルコトヲ明言スル所以ナリ

第十九条 一般ニ土地ノ所得ヲ調査スルハ每十五年ニ之ヲ行フ

第二十条 地租ノ市町村額ハ府県知事之ヲ定メ、毎年四月一日限市町村ニ達ス

第二十一条 地租ノ納期ハ左ノ期限ニ従フヘシ

第一期	明治七月一日ヨリ 同八月三十一日限	市街宅地 其他ノ土地	五分
第二期	同九月一日ヨリ 同十月三十一日限	市街宅地	五分
第三期	同十一月一日ヨリ 同十二月三十一日限	市街宅地	五分五厘
第四期	同一月二十六日ヨリ 同二月二十五日限	市街宅地	五分
第五期	同三月二十六日ヨリ 同四月二十五日限	田	五分五厘
第六期	同五月二十六日ヨリ 同六月二十五日限	田	五分五厘

第二十二條 市町村ハ各納租者ニ地租ヲ配付シ、及之ヲ取立テ納付スルノ義務アルモノトス

第二十三條 此條例ニ關スル細則ハ大臣之ヲ定ム

第二十四條 北海道沖繩縣小笠原島伊豆七島ニハ当分此ノ條例ヲ施行セス

付則

第二十五條 明治五年二月達地券據方規則、明治七年第百二十号布告地所名称区、明治十七年第七号布告地租条

例、其他従前ノ法律規則中本條例ニ抵触スル者ハ本條例施行ノ日ヨリ廢止ス

第二十六條 本條例ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス

地租配賦表

東京府	金五拾万式千八百九拾九円
京都府	金六拾五万八千五拾七円
大阪府	金百拾九万五千五百三拾式円

神奈川縣 金六拾六万九千百六円  
 兵庫縣 金百六拾九万五千四百七拾六円  
 長崎縣 金四拾壹万七千四百七拾九円  
 新潟縣 金百六拾三万八千六百五拾円  
 埼玉縣 金百貳拾四万四千七百拾八円  
 千葉縣 金百拾六万九千五百拾貳円  
 茨城縣 金百六万六百四拾貳円  
 群馬縣 金七拾壹万五千五百四拾三円  
 栃木縣 金七拾万四百四拾円  
 奈良縣 金五拾四万九千四百五拾三円  
 三重縣 金百拾六万貳千五拾四円  
 愛知縣 金百五拾三万四百六拾四円  
 静岡縣 金百四万五千貳百六拾七円  
 山梨縣 金三拾七万貳千七百七拾三円  
 滋賀縣 金百八万六千七百五拾貳円  
 岐阜縣 金九拾五万四千貳百七拾八円  
 長野縣 金九拾六万四千三百三拾七円  
 宮城縣 金五拾九万四千貳百貳円

福島縣 金百貳万八千貳百五拾壹円  
 岩手縣 金五拾万八千五百貳拾円  
 青森縣 金四拾五万五千九百八拾貳円  
 山形縣 金八拾三万七千三百四拾六円  
 秋田縣 金六拾八万三千貳百拾四円  
 福井縣 金五拾九万七千三百五拾円  
 石川縣 金七拾壹万貳千六百四拾六円  
 富山縣 金八拾三万三千三百三拾七円  
 鳥取縣 金四拾壹万三千五百九拾九円  
 島根縣 金六拾四万貳百五拾七円  
 岡山縣 金百貳拾三万貳千八拾壹円  
 広島縣 金百拾三万四千三百七円  
 山口縣 金五拾七万九千貳百三円  
 和歌山縣 金五拾六万六千四百貳拾七円  
 德島縣 金五拾三万四千四百拾五円  
 愛媛縣 金百貳拾五万九千九拾四円  
 高知縣 金四拾九万九千五百貳拾貳円  
 福岡縣 金百三拾貳万五千九百七拾五円



大分県 金六拾八万五千六百九拾四円  
 佐賀県 金六拾四万七千五百円  
 熊本県 金九拾壹万五千六百貳拾三元  
 宮崎県 金三拾八万八千六百拾六円  
 鹿児島県 金五拾九万八千貳百六拾四円  
 総計 金三千七百万円

朕地籍条例施行ノ際土地所得ノ調査法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

内閣総理大臣

大蔵大臣

勅令第 号

地籍条例施行ノ際ニ於テ所得ヲ定ルハ、地租改正以降調査シタル地価ニ基キ、其地価算出法ニ依リ換算スルモノトス

朕登記法改正ノ件ヲ裁可シ此ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

内閣総理大臣

大蔵大臣

司法大臣

法律第 号

明治十九年法律第一号登記法第四十条ニ左ノ一項ヲ加ヘ同条ヲ二項トス

四十条

一項

地所ノ登記ヲ請フ者ハ地籍ノ謄本ヲ受クヘシ

(同前「目賀田家文書」第5号—3—6)

朕大蔵省地籍総監官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

内閣総理大臣

大蔵大臣

勅令第 号

大蔵省地籍総監官制左ノ通相定ム

第一条 大蔵省ニ地籍総監一人ヲ置ク、奏任トス

第二条 大蔵省主税局中ニ地籍部ヲ置キ、左ノ規程ニ依リ地籍地租ニ関スル事務ヲ掌理セシム

一 地籍ニ関スル事項

二 地租ニ関スル事項

朕大蔵省官制改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

内閣総理大臣

大蔵大臣

勅令第 号

明治十九年勅令第貳号大蔵省官制中左ノ通改正ス

第十二条 地租課ノ三字ヲ削ル

第十四条 削除

朕地方官官制改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

内閣総理大臣

内務大臣

勅令第 号

明治十九年勅令第五十四号地方官官制中左ノ通改正追加ス

第十五条 知事ノ命ヲ承ケノ下ニ「地籍ノ管理」ノ五字ヲ加フ

第四十八条 各府県ニ左ノ地籍官ヲ置ク

一 地籍監督

二 地籍主事

地籍主事補

三 地籍監督地籍主事地籍主事補ハ判任トス

四 地籍監督ハ収税部ニ属シ、収税長ノ指揮ヲ受ケ其主務ニ従事ス

五 地籍主事ハ知事ノ指揮ヲ承ケ地籍所ノ長トナリ、地籍ニ関スル事務ヲ掌理ス

六 地籍主事補ハ主事ノ指揮ヲ承ケ地籍事務ニ従事ス

第四十九条 地籍所ハ府県内各市郡若クハ数郡ニ之ヲ置ク

(同前「目賀田家文書」第5号—9—11)

7、明治24年 地価修正に付目賀田種太郎申陳

廿四年四月二日大蔵次官ニ陳ス

租税ハ民命ノ繫ル所ナリ、之ニ関スル重要ナル施為ハ必ス先ツ事實ヲ審ニシ、而シテ之ヲ処スルノ理由如何ヲ審ニスヘキナリ、既往地租ノ經理ニ於テ此二者ノ審明不尽ノ憾ナキ能ハサルモノアリ、将来ニ推シ深ク憂慮ニ堪ヘス、故ニ之ヲ左ニ申陳ス

十七年地租条例ヲ発スルニ際シ聞ク処ハ、当時ノ地価ハ概ネ平当ナリ、十三年廿五号布告一地方限り地価ヲ修正スルノ要ナシト、条例ノ発スルヤ和歌山県静岡県ハ曰ク、十三年廿五号以來十八年処分ヲ待テリ、之ヲ如何スルヤト、更ニ聞ク、是処分ヲ要スルモノナリト、果シテ如斯ナリシナラハ、当時十三年廿五号布告ノ存廢ハ大ニ審査ヲ要セシ事

案ノ一ナリ

十七年八十九号ヲ以テ町村土地台帳式ヲ訓令シ、十八年二月実地台帳ヲ对照スル為メニ、土地ノ取調即地押ノ事ヲ内訓セリト雖トモ、實ニ大事忽卒ノ間ニ始マリ施為上ノ困難ヲナカラサリシハ、当初ニ於テ事實ト処分ノ理由ノ審査ヲ欠キタルノ憾アリ、就中山口県再丈量ニ於テ其増反別課税ノ負担ニ堪フルヤ否ヤハ密議忽卒ニ決シ、例ヲ引テ筑前ノミナラス豊前美作等ニ及ヒ、中頃顧ミテ他ノ官城山形等ヲ止ムルカ如キ、事實ト処分ノ理由ノ審明ヲ欠キシニナリ廿年地押ノ最中ニ於テ和歌山静岡三重等ノ諸県ニシテ、前陳十三年廿五号布告ノ時処分ヲ了セスシテ、十八年再改正ヲ待チシ地方ニ對シ之ヲ放過スルヲ得サルニ至リ、地租条例ニ於テ該布告ハ廃止サル、モ、其効力ハ処分未結ノ分ニ及フモノトシ是ヲ処分セリ、今其法律ノ解釈ノ当否如何ハ暫ク論セスト雖トモ、法ヲ私スルノ結果ヲ免ル、能ハス、是癸二十七年地租条例發布ノ時事実ノ審査充分ナラサリシニ起因セリ。

而シテ山口県等ノ処分ハ、地租改正条例施行規則第二則ニ於テ反別ノ広狭ト称スルハ、当時相当ニシテ成ルヘキ丈ノコトヲ指シタルニ過キスシテ、他地方ノ如ク精確ナル反別ニ依リシニアラストノ事實ノ間ニ隔シ、十三年廿五号布告ノ未決処分ハ政府カ法律ヲ然カク解釈セシトノ点ニ帰スヘシト雖トモ、両ナカラ物議ヲ免レスシテ、或ハ違法不当ノ処分トノ議院ノ建議アルモ知ヘカラス

今爰ニ事實ノ審察ヲ要スルハ地価ノ事是ナリ、或ハ地価ノ低位ニ在ルモノヲ指シテ不権衡ナリト称スルモノアリト雖トモ、現行地価ハ如何ナル標準ニ依リテ之カ高低ヲ論スルヤヲ審ニセサルヘカラス

抑地租改正ノ成續ニ就キテ約言スレハ、其地価ノ基礎タル收穫ハ旧來ノ因襲ト各地ノ権衡ノ大觀ニ定マリタルモノ多ク、為メニ之カ高低ノ標準ヲ定ムルニ由ナシトス、更ニ各地ニ就キテ細言スレハ、著シク増租セシ尾張遠江越後栃木千葉ノ如キ、埼玉群馬ノ如キ、是概ネ旧幕又ハ親藩領等ノ因襲輕租ニ係ルモノヲ高クセシニ過キス、又著シク減

租セシ加賀豊前筑前紀伊防長日薩隅ノ如キ、旧租苛重ノ因襲ヲ去リシニ過キス、又地価高シト称スル河内和泉摂津紀伊ノ如キ、全ク旧租ヲ標準トシ若クハ此標準ヲ模範トセシモノナリ、其他増減著シカラサル地方ヲ略陳スレハ、旧幕親藩等低租ノモノヲ高クシ、少藩其他ノ因襲高租ノモノヲ低クシ、主トシテ旧租ノ増減ニ過キサルモノナリ、即大体ヲ要スルニ一方ニ於テハ百八十三万八千四百円ヲ増シ、一方ニ於テハ二百九十万餘円ヲ減シタルモノナリ

而シテ此大觀上ヨリシテ一郡一村ニ涉リ、各筆ノ等級ノ如キモ上中下田畑ノ旧等ヲ修補セシモノ多ク、真正ニ等級ヲ組成セシハ關東高知徳島等ニ過キス

夫地価ハ收穫ノ一位ヲ十位ニ進メタル者ニシテ、法律ヲ以テ称呼スルノ名義ナリ、收穫ハ土地ノ原位置ニシテ増減スヘカラス、米価モ亦事實ニ依リテ生スルモノニシテ高低スヘカラスト雖トモ、利子ハ土地ノ情況ヲ斟酌シ負担ヲ平均スル為メ地価ヲ算出スルノ率ニ過キスシテ、無形ノ断定ニ屬スルモノナリ

試ニ慶長元禄天保等ノ右高ヲ比較スルニ、時トシテ増減アルニ係ラス、国位ニ於テハ大体動クコトナク殆ント一定不易ナリ、地租改正ノ收穫モ愈ニ之ヲ繼承シ、概ネ旧租ニ依リテ増減セシハ誠ニ故アルナリ、而シテ其利子ナリ米価ナリ、連絡シテ近傍府県ノ比準宜シキヲ得セシメシニ過キサルナリ、面積スラ尚精確ヲ保ツヘカラス

然リト雖トモ、此改正ニ於テハ大体旧租ノ偏畸ヲ校正セシ故ニ、改租前ニ比シ減租二百九十万五千九百九円ナリ又明治四年廢藩置縣ノ後、從來ノ苛租ニ苦シテ止ムヲ得サリシモノハ、定免ヲ除キ検見取租ノ法ト為シ、無慮七百五十四万三千五百円ヲ減セリ

此改租前後ノ減租計千四百四万八千六百餘円ナリ

之ニ廿年ノ修正減租三十七万餘円、廿二年ノ特別修正減租三百二十四万九千九百円ヲ加ヘ、合計前後ノ減租千四百六十五万九千九百九円ナリ

以上ハ明治四年以降廿二年迄ニ地価ノ偏畸ヲ校正セシ減額ナリトス、再ヒ之二十年ノ減額ヲ加フレハ二千二百三十万四千三百余円ト爲ル、既往數百年來ノ偏重ヲ正シ十九年間ニ此減額ヲ行ヒ、一個三一公七個七九民ノ所得ト爲シ、大体ニ察シテ大ナル不權衡ナキヲ得タルハ、幸ニ國家大故ナキニ由ル

今ヤ既往ニ徴セス、只地価ノ修正若クハ低減ヲ論スト雖トモ、是事實ヲ審ニセサルモノト爲ハサルヘカラス、或ハ宝曆十三年ノ反別ニ依レル山口県ノ地価ヲ指シテ低キニ失スト云フ、毛利氏治國ノ後慶長以來檢地他ニ比スレハ頻繁ニシテ、地租改正ニ於テハ反別ヲ減スル二千二百余町ナリ、宝曆六年ノ民口五十二万四千六百二人ニ對スル明治廿一年ノ九十二万三千二百人ハ、或ハ總負擔ノ余裕アルニ依リテ生活シ得ルヤ否ヤ、必ス其間審査スヘキ事實アルヲ願ミサルナリ

「農科大學教授曰ク、山口ノ一人ニ付五十円ノ負債アリト」

或ハ宮城原ハ低價ナリト云フ、良沃ノ地少ナク水害多キヲ願ミサルナリ、或ハ一般ニ既定ノ地価ハ不平均ナリト云フ、其固ト大觀ニ成リテ局部ノ標準ナキヲ願ミサルナリ、或ハ一般ニ低減スヘシト云フ、地方制度ノ確立セサル間ハ市町村稅特別稅ニ重キヲ加ヘ、朝三暮四タルヲ願ミサルナリ、又小作料ノ最高額ハ増地ニシテ尚二石一斗二居ルモノアリ、將來地主トノ關係ハ如何ナルヘキヤ否ヤヲ願ミサルナリ、又將來運輸交通ノ發達ト共ニ各地ノ情勢ノ變更ニ從ヒ、地価ノ如キ從テ查スレハ從テ變スルコトヲ願ミサルナリ、又國家ノ急須ハ増スルモ減スルナク、殖産ノ發達ハ時ヲ期シテ發達スヘカラス、如斯希望ノ頼ルヘカサルアリテ、或ハ甲ニ減シテ乙ニ増スノ事ナキヲ願ミサルナリ

又法律ニ於テハ如何、現行地価ハ地租條例第八條ニ於テ、全國ノ地価ヲ修正スルハ前以テ布告スヘシトアリ、是實ニ租額ヲ移動シ修正ヲ常事ト爲スカ如キコトナカラシメサルコトヲ宣明スルモノニシテ、私有物權ノ安固ト國家富有ノ基本ヲ愛護スルニ外ナラス、而カモ時局國勢ノ如何ヲ願ミレハ、法律ノ明條ニ之ヲ存スル決シテ偶然ニアラサルナリ

事實如斯法律如斯ナルニ關セス修正ト云ヒ減租ト云フ、其勞費ヲ累ネ或ハ地価ニ不期ノ變動ヲ与ヘ、時トシテ社會ノ情勢ヲ攪亂シ國家ノ富實ヲ傷フノ漸ヲ啓クカ如キ、其結果ハ一ナリ

故ニ地租ノ事ニ對シテハ常ニ慎重ノ方嚮ヲ守リ輕シク之ヲ論セス、先ツ其事實ノ如何ヲ審査スルヲ要ス、而シテ此事豈地租ノミナランヤ

歲計ノ余レルモノ、如キ、紙幣消却元資増加ノ爲メ十三年四十八号布告第三條府縣土木費下渡廢止ノ事是ナリ、而シテ地方稅支弁ノ河ニシテ之ヲ國河ニ編入スルノ事ノ如キ、實ニ目今ノ急ニシテ永ク國家百年ノ利益ノ關スル所ナリ、是事實ニ於テ然ルノミナラス、紙幣整理ノ成緒ト共ニ前陳四十八号布告修正ヲ要スルハ必然ノ事ナリトス是等制置行ハレ直接ニ土地ノ負擔ヲ輕減スヘク、敢テ地価ノ修正低減ノ要ヲ見サルナリ

(國立公文書館所藏「目賀田家文書」第11号—23)

## 8、「明治24年」地租將來施設趣意書

### 地租將來施設趣意書

地租ノ制ハ中世紛淆ニ屬シ、地租改正ニ於テ之ヲ統一スト雖、主トシテ經久ノ慣習ニ從フモノナリ、故ニ將來ノ施設ハ既往ノ沿革ニ鑑ミ計圖スルヲ要ス、爰ニ其趣旨ヲ述フルニ方タリ、之ヲ三段ニ要約ス

第一段 地租改正ヨリ明治十八年土地整理ニ至ル

第二段 明治廿二年特別地価修正及現在

第三段 地租ニ關スル將來ノ施設

第一段 地租改正ヨリ明治十八年土地整理ニ至ル

明治三年大蔵省ニ於テ旧幕府慣習ヲ參酌シ、檢見方法ヲ以テ收税スルコトヲ達ス

此方法ハ反別錯乱ノ地ト旧來反別ヲ用キサル土地ニ行ハレ難ク、概テ均一ノ賦課ヲ得ル能ハサルヲ以テ、大蔵省ハ地価ニ從テ賦税スルノ方案ヲ上請シ、先ツ之ヲ從來無税地市街地ニ施サントラ請フ、四年十二月允可ヲ得テ沽券税法ヲ東京市街ニ行ヒ、尋テ之ヲ各地市街地ニ行ハントス、是レ地券税法施行ノ始メニシテ、明治五年二月地所売買ノ禁ヲ解キ売買地価百分ノ一ヲ收税スルノ方法ヲ定ム

明治六年七月二十八日 上諭ヲ以テ地租法ヲ頒ツ、明治九年ヲ以テ結了ヲ期セシト雖モ、明治十四年ニ成功ス  
明治十三年廿五号布告ヲ發ス、理由左ノ如シ

地租改正条例第八章ニ「地租改正後売買ノ間地価ノ増減ヲ生シ候共、改正ヨリ五ケ年間ハ最初取定メ候地価ニ依リ收税可致事」トアリテ、地価ノ再改正ヲ為スヘキカ如キ意ナリト雖、當時ノ事實ニ徴シ法意ノ判明ヲ欠キ、而カモ行ハレ難キノ条件タルヲ見ルヘシ、夫地租改正ノ業ハ九年ヨリ十一年ノ間ニ竣功ヲ告ケシト雖モ、郡村ノ内部ニ至テハ帳簿ノ整理ヲ終ハラサルアリ、租税仮納ノ計算ヲ了セサルアリ、改租費用ノ精算ヲ完結セサルアリ、又改租以降ノ米価ヲ超過シ為メニ全部ノ再改ヲ要スヘク、其之ヲ行フノ結果タル租額變更ノ煩ニ堪ヘス、所謂前事功ヲ竣ラサル後事蹟ヲ接セントス、依リテ神奈川県外十七県ニ對シ地方ノ収獲ノミヲ更正シ、地租ニ於テ五万式千五百四拾五円六厘ヲ減シ、余ハ十八年ヲ待テ処分スヘキコト、為シタリ

明治十七年地租条例ヲ發ス、其理由ヲ要略スル左ノ如シ

一 既往地租法令ノ曠欠散漫ヲ補修ス

二 地租改正条例第六章ノ第一段ハ、過去ニ於テ物産増殖ノ地方ニ在リテモ別ニ物産税家屋税ヲ課スルナク、地租

ヲ増加スルヲ常トセルカ故ニ、其地租ハ是等物産税家屋税ヲ包含スルノ事アルヲ謂ヒ、第二段ハ地租改正ハ地方ニ課スルコトヲ明カニシ、百分ノ三ヲ課率ト為スヲ謂ヒ、第三段ハ未來ニ就キテ土地ヨリ生スル物産ニ課税シ、二百万円ニ至ル毎ニ地租二百万円ヲ減スヘキヲ謂ヒ、課率百分ノ一ニモ至ラシメンコトヲ予想セシニ過キササルナリ、然ルニ殖産商工ハ時ヲ經ルニアラサレハ興起スルコトヲ望ムヘカラス、夫此希望ノ頼ル能ハサルモノト國家ノ急須ノ常ニ要スルモノトヲ概律シ、甲ニ減シ乙ニ増シ互ニ調理セシメントスト雖モ、得ヘカラサルハ敢テ言明ヲ假ラサルナリ、是事ノ草創ニ方タリ法律ニ於テ行政ノ目的ヲ示セシニ過キスシテ、其限闕ノ明カナラサリシニ因ル

三 地租改正条例第八章ハ明治七年五十三号布告追加ニ係リ、地価ヲ以テ売買価トセシ故ニ本章ヲ設クルナリ、既に陳スルカ如ク五ケ年毎ニ地価ヲ改正スルハ、實ニ私有物權ノ安固ト國家富有ノ基本トヲ障害スルモノナリ、而カモ時機國勢ノ如何ヲ顧ミス、年ヲ期シテ改正ヲ常事ト為スカ如キコトアルヘカラス

以上兩章ハ、國家ノ存立ヲ保ツル地租ヲシテ頻年移動アラシムルモノナリ、故ニ地租條例ニ由リテ將來必要アルニアラサレハ地租ヲ改正セサルコトヲ照明ニシ、一般安固ノ念ヲ与フルト共ニ此兩章ヲ廢ス

明治十八年二月大蔵卿ハ土地整理ノ事ヲ内訓ス、願フニ地租改正ハ非常ノ事業ニシテ、所得ヲ算定スヘキ土地ノ実積既ニ由ルヘキモノナク、其事緒錯乱名状スヘカラス、故ニ官民所見ノ弊スル處歩積ヲ正フシ一般租額ノ正當ヲ得ルニ止リ、図籍ノ如キ或ハ具備セス、或ハ爾後事故ノ為メニ散失シ、或ハ齟齬シテ實地ト對照セサルモノアリ、故ニ地租條例ノ發布以降町村ヲシテ土地台帳ヲ編製セシメ地籍ヲ鞏固ニシ、及十三年廿五号布告ニ從ヒ改租ニ於テ地価ノ當ヲ得スシテ処分了セサルモノトヲ整理セシメ、廿一年ヲ以テ結了ヲ告ケタリ

第二段 明治廿二年特別地価修正及現在

土地整理ノ舉行ト共ニ帳簿ヲ整理シ各筆ノ賦額ヲ明カニシ、地租ノ根基爰ニ一定スルコトヲ得タリ、依テ地券ヲ廢シ又收稅部出張所(現今ノ直稅分署)ヲ設ケテ土地台帳繪圖ヲ管理セシメ、將來地籍ヲ維持スルコトヲ計ル

又地租條例ヲ改正シテ開墾ノ年期ヲ延長シ以テ拓地方農ヲ勸メ、又荒地免租ノ目ヲ増シ地目交換ノ檢査ノ程度ヲ寬ニシテ一般ノ勞費ヲ省キ、又地方ノ荒蕪シテ原地ニ復シ難キモノハ、實地ニ就キテ地租ヲ低減スル等ノ事ヲ定ム、是皆將來ノ方案ニ對スル施設ニアラサルハナシ

改租以降各地地方情勢ノ變更著シクシテ、為メニ穀價ノ變動ヲ起シ、又改租当初收獲利子ノ査定ニ於テモ少シク更正ヲ要スヘキモノアリ、而シテ其事殆ント全國ノ地價ノ修正ヲ要スヘクシテ、十三年廿五号公布ノ範圍ノ及フ所ニアラス爰ヲ以テ法律廿二号特別地價修正法ヲ頒ツ、減租スルモノ三百貳拾四万九千九百拾四圓七拾七錢七厘トス

### 第三段 地租ニ關スル將來ノ施設

我國古來租稅ヲ農ノ一途ニ課シ寬苛輕重其揆ヲ一ニセサルノミナラス、其租率モ或ハ四公六民ト稱シ、或ハ五公五民ト稱スト雖モ、概テ收獲十分ノ三四ヲ實租ニ充テ、其他地租額ノ比例ニ依リテ課セシ所ノ徭役賦金亦寡キニアラス、故ニ明治四年廢藩置縣ノ後毎年地租ノ減差著シキハ、從來苛斂ニ苦シムモノ陸續租法ノ改良ヲ請求シ、其止ムヲ得サルモノハ定免ヲ解キ檢見收租ノ法ト為セシニ由ル、是各地旧稅偏倚ノ甚シキニ起因セリ

又地租改正ノ当初減租セシモノ貳百九拾万五千九百九拾八錢五厘、又明治十年減租ノ詔ニ依リ減租セシモノ八百貳拾四万三千八百六圓三拾錢四厘、合計千九百拾四万八千九百拾五圓四拾八錢五厘ニシテ、地租改正以前ノ旧額ニ比スレハ負擔ヲ減スルコト十分ノ二四四七二下タラス、而シテ地租改正以後ニ在リテモ、十三年廿五号公布ノ効果ニ依テ三拾七万五千五拾八圓四拾七錢八厘ヲ減シ、廿二年特別地價修正法ニ依テ三百貳拾四万九千九百拾四圓七拾三錢七厘ヲ減シ、前後ヲ通シテ旧租ニ比スレハ實ニ千四百七拾六万五千八百八拾四圓七拾錢ヲ減セリ

改租以降十七年間ニ此減租ヲ行ヒ漸ク負擔ヲ均一ニスルノ方嚮ヲ見ルハ、幸ニ國家大政ナク当初ノ總旨ヲ施行スルヲ得ルニ由ル

然リト雖トモ現在ニ就キテ其租額ト收獲トノ比例ヲ案スレハ、其租額十分ノ二二五二當レリ

之ヲ細言スレハ米老石ヲ收獲スル処ノ田ニシテ、二斗一升二合五勺ヲ園稅ニ供シ、殘七斗八升七合五勺ヲ以テ種肥料地方公費ヲ負擔シ、其余ハ人民ノ所得ニ歸スルモノナリトス

此負擔既ニ輕キニ非ス、然リト雖トモ今日ニ於テ急要ナルモノハ減租ニアラスシテ修正ニアリ、是將來施設ノ第一着トス

癸二十三年廿五号布告ノ効果又廿二年特別地價修正ノ如キ、改租以降ノ經歷ニ於テ負擔重キモノヲ修正セシト雖トモ、其負擔輕キモノハ未タ修正ニ至ラス、而カモ運輸交通ノ開クルト共ニ盛衰便否其処ヲ替ヘ、米價ノ更正ヲ要スルモノアリ

又宅地稅ノ如キ課稅ノ原義ニ適セサルノミナラス、地租改正ノ嗣後運輸交通ノ發達ト變化トニ從ヒ隆替著シク、參照ノ如ク為メニ賦課方法ノ別ニ審究ヲ要スヘキアリ

又鉱泉地稅ノ如キ、移動スヘキ營業ノ收利ヲ一定不勳ノ地租ニ編算シ、課稅ノ本義ニ適セサルアリ  
故ニ一般減租ヲ行フニ先タチ此修正ノ準ナカルヘカラス、否ラサレハ根本ヲ校ラスシテ枝葉ヲ理ムルニ過キサルナリ、輕キハ尚輕キニ失シ重キハ尚負擔ヲ免カレサルヘシ

此要件行ハルハ、ヲ得ハ、正當ノ順序ニ從ヒ地籍ノ調査ニ由リテ土地ノ鑑定ヲ明カニセサルヘカラス  
現行ノ稅法タル名ハ地價ニ課スルト雖、其實ハ土地ノ收益稅ナリ、而シテ其收益ヲ鑑定スルニハ先ツ土地ノ面積ヲ測量セサルヘカラス、面積正シカラサレハ負擔ノ輕重ヲ生シ徵稅ノ根基ヲ失フニ至ルヘシ

現今民有地ノ面積ハ、明治十八年以來人民ノ申告ニ依リテ稍ヤク歩積精確ニ近カキヲ得タリト雖トモ、繪圖ハ未タ尺  
ク精密ナルコト能ハス、或ハ地押調査ニ際シテハ新調ニ係ルモノアリト雖モ、或ハ尚地租改正當初ノ繪圖ヲ補修シ之  
カ用ニ充ツルモノアリ、是費用ノ加重ヲ恐ル、カ爲メニシテ止ムヲ得サルモノナリト雖、寬過スレハ再ヒ紛乱ノ恐レ  
ナキ能ハス

一 地一筆ノ歩積ハ土地台帳ニ記載シ又字図ニ存セリト雖、町村図ノ基本確立セサルトキハ、其疆界ノ紛乱アルト共ニ  
全村ノ各筆同時ニ根基ヲ失フニ至ルヘシ、故ニ今日ニ在リテハ町村図ノ調製ヲ急要トス  
町村図ハ必ス陸軍測量ノ四等三角形ヲ基本点トシテ之ヲ部分ニ画シ、中ニ筋骨ヲ添ヘ一筆ノ小区分ヲ細画スヘシ、  
既ニ陸軍ニ於テ四等三角形図ヲ調製スルモノ全國十五分ノ一ナリ、宜シク今ニ於テ之ヲ町村図ニ適用シ、其基本点ヲ  
一定シテ變動ナカラシメ、後年ノ計圖ヲ定メサルヘカラス  
故ニ地籍圖ハ陸軍測地圖ト連繫シ細大照応シ、管守ノ錯綜ヲ防キ費用ヲ省クコトヲ得ヘシ、而シテ地籍調査ト云ヒ陸  
軍測地圖ト云ヒ、國費ノ許ス処限リアリテ稍ヤ悠遠ノ期年ヲ要スト雖、左ノ諸件ハ現今ニ於テ大ニ費用ヲ要セスシテ  
拡充スルヲ得ヘシ

- 一 自治体ノ完成ト共ニ官民相応シテ其繪圖ヲ作ルコト
  - 一 此繪圖ニハ陸軍四等三角形ヲ基本点トスルコト
  - 一 直税分署ニ於ケル地籍管守ノ事ヲ拡充シ、土地測量ヲ法ヲ精密ニシ一筆ノ異動ヲ審ニスルコト
- 前陳ノ諸件ニシテ今日行フヘキハ之ヲ行ヒ、其他後年ノ永圖ヲ期スルモノニ對シテハ、現在ノ施設ラシテ之ニ順応セ  
シムルコトヲ要ス

又前調査ト共ニ施設スヘキモノハ土地純益ノ調査ナリ、土地純益ノ調査ハ純益釐定法ヲ設ケサルヘカラス、又釐定法  
ヲ實施スルニハ其諸機關ノ組成ト目的トヲシテ各其効果ヲ全カラシメサルヘカラス

純益釐定法ノ如キハ之ヲ設クルニ容易ナリト雖、其機關ノ経絡宜シキヲ得、善良ナル経歴ヲ積ミ内外其機能ヲ果スニ  
アラサレハ、蓋シ莫美ノ釐定ヲ得ヘカラス、即其機關ハ官ニ在リテハ農商務省地方庁ノ特別委員、又各町村ニ於テハ  
農會其他ノ組織ニ依リ各般ノ資料ヲ具有シ調査ノ用ニ供スヘシ、其詳細ヲ指言スレハ種肥料農具買入飼養料土地修繕  
費農具小屋掛料勞力ノ費用、又農産物ノ所得等ノ如キ年ヲ期シテ農業ノ統計ヲ作ルヘシ、又森林ニ在リテハ森林ノ維  
持費看守費苗木ノ樹芸費等ヲ調査スヘク、又一般ニ物価ノ調査ハ商業會議所等ノ機關ニ依ルヘシ、要スルニ煩ヲ省キ  
簡ニ就キ事ニ臨ミテ官民爭フヘカラサルノ資料ヲ具備セサルヘカラス

現行地租ヲ課スルノ地価ハ收穫米価利子ノ三者ヲ以テ成立シ、米価ト利子ハ概ネ一県又國郡同一ナルヲ以テ定メ易キ  
モ、收穫ノ如キハ一村乃至一筆毎ニ其額ヲ異ニシ、時ヲ積ムニアラサレハ有形ノ標準ヲ得ヘカラス、而カモ其收穫タ  
ル一時人民ノ申告官吏ノ釐定ニ止リ、或ハ一村内ノ等級ニ至リテハ不權衡ナキヲ保シ難キアリ、故ニ地価ノ高低ヲ論  
スル概ネ標準ナキノ紛争ニ過キササルナリ

事既ニ如斯ナルヲ以テ、完成ナル純益調査法ヲ設クルハ目今ノ急務ニ属スト雖、其機關ノ経絡宜シキヲ得ルハ蓋シ今  
ニ於テ難シトス、依テ現在ニ於テハ事宜ニ酌ミ當事者ノ腹案ヲシテ將來ノ目的ニ注向セシメ、諸般ノ施設ラシテ後來  
設クル所ノ釐定法ニ順応シテ慫ラサルコトヲ期スルナリ

後來ニ於テ完全ナル釐定法ヲ設クルニ方リ最要ノ件アリ、曰ク現行地価ヲ廢スル是ナリ  
抑改租ニ於テ提查セシ收穫ハ土地一歳ノ所得ニシテ、即其原位置置ナリ、利子ハ此所得ヨリ生スル原価ヲ產出スルノ  
率ナリ、又穀仙ハ收穫ヲ換算スルモノナリト雖モ、此收穫ニ由リテ地価ヲ定メタルハ收穫ノ一位ヲ十位ニ進メタル者  
ニシテ、其地租ヲ徵スルヤ百分數ヲ以テ課率ヲ定メタルニ由リ、一見スルトキハ其負担輕キカ如キモ、其課額ハ收穫

十分ノ式個二二五三当レリ、故ニ地価ハ売買価ニアラス、又土地ノ実力ヲ表スルモノニアラス、課税ノ為メニスルノ法律上ノ価格ニ過キサルナリ

而シテ当初地価ノ算出ニ於テハ、控除セシ処ノ土地負担ノ渾テノ公課ハ既ニ数次ノ変更ヲ經テ課率ヲ異ニシ、現今ノ地価ハ負担ノ標準ト為スヘカラス、将来尚此法律上ノ価格ヲ標準トスルトキハ、官民共ニ負担ノ輕重ヲ明ニスルノ便ヲ欠キ、純益ノ母定ニ於テモ亦莫実ヲ得サルニ至ルヘシ

夫既ニ收穫ハ事業ナリ、課税ノ基本ナリ、地価ハ法律ヲ以テ稱呼スルノ名義ナリ、畢竟改租ノ当初ニ於テ從來慣行ノ検見収租法ト區別スルカ為メニ、事宜ニ通シテ之ヲ設クルニ止マレリ、宜シク時機ヲ將來ニ見ルニ從ヒ、之ヲ廢シ人民ヲシテ安固ノ念ヲ得セシムヘシ、是ト共ニ純益ノ調査ヲ得ヘク、從テ將來地租ノ賦課法ヲ講スルヲ得ヘシ

直税ハ所及普ネクシテ且薄カラシコトヲ欲ス、是其本義ナリ

又一國ノ分子タル者ハ均シク其共同義務ヲ負フヘク、又其權利ヲ一徧ニ限制スヘカラス、故ニ税源ヲ拡メ各人ノ負担ヲ均一ナラシメ、又其公權利ノ享有ヲ普ネカラシムルハ、今ニ於テ審考スヘキノ急要ナリトス

前陳數件ハ常ニ時機ト歲計ノ許ス処ニ從ヒ之ヲ施行シ、逐次地租ヲ輕減スルノ方途ニ就クコトヲ期ス

#### 地租修正總意書

地租ノ經理ハ実ニ國家ノ大計ニシテ、之カ施設ハ政理ニ考ヘ時宜ニ酌ミ、課程ニ從フカ如ク着々其順序ヲ踐行スルコトヲ要ス、而シテ正当ノ順序ヨリ完全ナル施設ヲ按スレハ要件ニテリ、曰ク地籍ノ調査、曰ク純益ノ調査是ナリ、一ハ即所得ヲ算定スルノ根基、一ハ即土地ノ原位原量ノ標準ニシテ、兩者合シテ地租其物ノ成体ヲ組成スルモノト云フヘク、其一ヲ欠クトキハ根基ナク原位ナキモノト云フヘシ、是兩ラ完成ナル地租ノ經理ニ必要ナル制度ナリト雖モ、

地籍ノ調査ハ國費ノ許ス処限リアリテ、其必要ナルニ係ラス稍ヤク悠久ノ期年ヲ要ス、又純益ノ調査ハ地籍調査ノ如クナラスト雖、諸機關ノ組成ト目的ト各其効果ヲ見ルノ日ニアラサレハ完全ナルコトヲ得ス

而シテ是等調査ハ実ニ國家百年ノ永固ニ係ル故ニ、此正当ノ順序ヲ踐テ諸般ノ計圖ヲ設クルノ必要ヲ認ムヘシ、而シテ之ト共ニ簡略ノ方按ニ依リ、時宜ニ通シテ漸次地租ノ負担ヲ輕クスルコトヲカメ、農民ノ發達ヲ計ルハ実ニ目下緊要ノ事トス、現行地価ハ二十一年二十二年法律ヲ以テ一般ニ權衡ヲ整理セシト雖トモ、若干ノ地方ハ修正ヲ加ヘスシテ從前ノ低位ニ居レリ、是ヲ他地方ノ負擔ニ比スレハ尚不權衡ヲ免レス、故ニ別案ニ於テハ其地価ノ低位ナルモノヲ修正シテ地価ヲ増サシメ、又其從來ノ負擔ノ尚高位ニ居ルモノニ對シテハ、一定ノ率ニ依リ通シテ減租ヲ行ハントス、細觀スレハ或ハ地方ノ異ナルニ從ヒ、減率ニ數等ヲ設ケ各其減租ノ程度ヲ定メ、或ハ小部分内ノ細修正ニ涉ルハ盡シ必要ナルヘシト雖、如斯ハ年月ト勞費ヲ要シ其調査ノ前後ト地方ノ異ナルニ依リテ、從テ查スレハ從テ變シ殆ト究極スル処ナシトス

故ニ此点ニ對シ將來慎重ノ方綱ヲ守リ、細故ヲ視スシテ地租原額ヲ徐々ト減却スルコトヲ得ヘキ方案ヲ主ト為シ、勞費ヲ省キ一般臣民ニ安固ノ念ヲ与ヘ、其富實ヲ庇護スルコトヲ主要トスヘキナリ

而シテ此修正ニシテ舉行ヲ得ルトキハ、將來歲計ト時宜ノ許ス処ニ從ヒ、一率ヲ以テ一般ニ地租ヲ通減スルノ成績ヲ見ルヲ期スヘシ

宅地稅ノ現行法ハ其賦課法ヲ普通市街・準市街・郡村宅地ノ三級ニ分チ、東京等ノ市街ト稱スル部分ニ於テハ、各区表裏ノ坪數ヲ區別シ、商業ノ盛衰運搬ノ便否其他ノ情況ヲ細查シ、該地ノ地力ヲ鑑定シ、其高低ニ從ヒ地位ノ等級ヲ分ツト雖トモ、郡村宅地ニ至リテハ單ニ上級ノ田畑ノ等級ト比準セシニ過キサルアリ、或ハ賃貸料ヲ包含セシト雖、是等区々ニ涉ルノミナラス一般ノ調査ハ法制完カラス、氣運未タ開ケサル時ノ成立ニ係リ、永ク現行ノ儘之ヲ存続ス



ル能ハサルモノトス

又鉾泉地稅ノ如キ、變動スヘキ營業ノ收利ヲ地租ニ合算シ課稅ノ本義ニ適セス、而カモ失實ノ嫌ヒアルヲ以テ共ニ更正ヲ要スヘシ

宅地稅ノ本質ヨリ稅ルトキハ、家屋稅トハ差別アルヘシト雖トモ、現状及調査ノ勞費ヲ視レハ僅チ二家屋稅ヲ與サスシテ、之ヲシテ宅地稅ニ包含セシメ、現行宅地中他ノ類目ニ屬スル土地ヲ除去シ、固有ノ宅地ノミニ對シテ改正宅地稅ヲ施行シ、又現在及將來ニ於テ運輸交通ノ變更ヨリ各地方ノ情況ノ變更ヲ感リ、之ニ準シテ賦課額ヲ變更スルニ容易ナラシム

此改正宅地稅ハ家屋ノ收利ヲ斟酌セシモノニシテ、之ヲ施行スル上ハ府縣稅以下ノ附加稅ニ於テ現行ノ賦課額ヲ以テ限トシ、此制限ヲ超過セサラシムヘシ

## 一甲、參照

### 地籍圖調製ノ議

凡地圖ノ國家經綸上ニ關係アルヤ至大至重ニシテ、軍事其他百般ノ政務ヨリ農事工業等ニ至ルマテ皆之ヲ要セサルナキハ論ヲ俟タス、特ニ地籍圖ノ地租事務ニ於ケルヤ其關係最モ重シト云フヘシ、本邦從來地圖ノ設ナク画一ノ基礎ニ拠テ之ヲ調製セルモノ尠ナク、又數理ノ応用其宜シキヲ得サルヨリ實用ニ適スルモノ殆ント稀ナリ、於是乎、去ル明治廿年六月中地圖兩製式及更正手續ナルモノヲ定メ之ヲ各府縣ニ示シ、時機ト民力トヲ考慮シ漸次新製セシムルノ方針ヲ採レリト雖トモ、改租當時ノ地圖ニ多少ノ改良ヲ加ヘシノ方法ニ過ギサルヲ以テ、數理上ヨリ觀察スレハ是亦正確ノモノト云フヘカヲサルヤ論ヲ俟タス、故ニ縱令全國画一ノ製式ニ拠ルト雖トモ、正確ノ點ニ於テ欠如タル以上ハ、

到底完全ノ効用ヲ得ル能ハサルハ陸易キノ理ナリ、而シテ其方法タル固ト人民ヲシテ調製ノ責ニ任セシメ、而シテ其一本ヲ官庁ニ納付セシムルノ旨趣ニシテ、其費用ハ反テ多キヲ加ルノ傾キヲ生スルナリ、殊ニ將來官民ノ責任愈々圖然タルニ至リシヲ以テ、亦昔日ノ如ク人民ノ費用ヲ以テ政府部内ノ所用ヲ充タサントスルカ如キハ、業已ニ為シ得ヘカラサルコトナレリ、且該調製式ニ依リ既ニ調製ヲ了セシ地方ハ僅カニ三四ニ過ギスシテ、其他ノ地方ハ依然旧來ノ儘所用スト雖トモ、既ニ前段ニ於テ述べセシ如ク、概ネ陳腐ニ屬セルモノナルカ故ニ、將來我國財力ノ貯ス限リニ於テ、能ク完全ナル効用ヲ収ムルニ足ルヘキモノヲ製出セント欲セハ、果シテ如何ノ方案ヲ用ユヘキ乎、是レ今ニ於テ計画ヲ要スヘキ要件ナリトス

現今參謀本部内ニ陸地測量部ヲ置キ、三角術ノ法式ニ從ヒ測量ノ事業漸次全國ニ及ホスノ計画ナルヲ以テ、更ニ其規模ヲ拡張シ地籍圖調製ノ基礎ヲシテ此ニ資ルアラシメハ、軍用行政用兩ナカラ完全無欠ノ地圖茲ニ初テ備ハルヘク、便利之ニ過クルモノアラサルヘシ、抑モ三角測量ナルモノハ經緯度ニ基キ起算スルモノニシテ、實ニ諸測量ノ基礎ト云フヘシ、而シテ之ヲ区分シテ一等三角形二等三角形三等三角形四等三角形トシ、一等三角形ノ辺長ハ十里乃至二十里ニシテ、二等三角形ノ辺長ハ三里、三等三角形ノ辺長ハ一里、又四等三角形ノ辺長ハ半里以下ニ至ル、而シテ其三等三角點迄ハ總テ花崗石ノ標柱ヲ設ケテ、其位置ヲ永久ニ指示スト雖トモ、四等三角點ニ至テハ費途ニ限リアルト軍事上必須ナラサルトニ因リ、唯一時粗造ナル目標ヲ設置シ、敢テ永久ニ存続セシムルノ目的ニアラストス

今ヤ從來ノ方針ヲ一變シ實ニ三角測量ノ法式ニ從ヒ、其四等三角形ノ基點ニ準拠シテ、精確ナル実測ヲ遂ケサルヘカラス、然ルニ若シ該事業ヲ以テ新ニ舉行スルモノトセハ、其勞費實ニ小少ナラサルヘシ、故ニ目下ニ在リテハ右四等三角點ヲ定ムルニ方リ多少技術ノ鄭重ヲ加ヘ、而シテ三等三角點以上ト同シク堅牢ナル標柱ヲ設置スルコトヲ以テセハ、為メニ莫大ノ勞費ヲ省キ將來正確ニシテ画一ナル地籍圖ヲ大成スルノ基礎業已ニ確立スヘシ、而シテ漸次其基點

ニ從テ實測ヲ遂ケ之ヲ調製セハ、參謀本部調製ノ軍用地圖ト相須テ細大具備完全ナル帝國ノ一大實測圖ヲ完備スルニ至ルヘシ、是レ特リ軍用及地籍事務ノ為ニ必要ナルノミナラス、帝室財產其他官有地ノ管理ナリ水利土工ノ制度ナリ、民間百級ノ企業ナリ、皆其裨益ヲ享ケサルハナシ、故ニ地籍圖調製ノ設計ヲ定ムルハ實ニ國家ノ大計上ニ於テ必要ナリト云フヘシ、其詳細ナル計画ハ別ニ他日ノ施設ニ際シテ之ヲ陳スヘク、爰ニ其概略ヲ述フルノミ

(同前「自賀田家文書」第4号—1—3)

## 9、明治24年 地価修正に対する会津人の意見

一、非売品

地価修正ニ対スル会津人ノ意見

特別地価修正説ヲ非難ス

方今ノ大患ハ制度ノ備ハラサルニ在ラズ、文華ノ開ケサルニ在ラズ、偏ニ民膏ノ涸渴シ国力ノ萎靡スルニ在リ、維新以來欧米各國ノ器械智識制度風習ヲ輸入シタルハ、決シテ無代價ヲ以テ得タルニ非ズ、為メニ費セル者ハ、皆我國民ガ粒々辛苦ノ膏血ニシテ、今ヤ財源殆ンド涸渴シテ民ニ生色ナク、一般ノ状、人ノ貧血病ニ陥ルニ似タリ、抑立國ノ大本ハ國民ノ實力財力ニ在リ、苟モ其本根ニシテ枯槁スル時ハ、枝葉ニ屬スル典章文物ノ燦然タル有リ共、亦何ノ用オカ為サン、今日ノ急務ハ實ニ大ニ民力ヲ休養シテ其本ヲ立ルニ在リ

我邦建國以來財源ハ一ニ農民ニ出テ、因襲ノ久シキ、政費ノ負担ハ遂ニ農ノ一方ニ偏重シ、今ニ至テ改ムル無シ、而シテ農ハ我國民ノ最大多数ヲ占メ、國民即農民ト云フモ誣イザル処ナルヲ以テ、民力休養ノ必要ハ即チ農民ノ負担ヲ

輕フスルノ必要ヲ謂フ者ニシテ、今日租稅ヲ公平ニシ農民ノ頭上ヨリ偏重ノ課稅ヲ除クハ、要ノ又要、切ノ又切ナル政治問題ト謂フ可キ也

故ニ地租ヲ輕減シ民力ヲ休養スルハ已ニ天下ノ輿論ニシテ、復多言ヲ要セスト雖トモ、其租稅ノ公平ヲ求ムルニ至テハ、決シテ姑息ノ手段ヲ以テ得ヘキニアラス、必スヤ一大英斷ニ依リテ以テ其成ヲ期スヘキナリ、而シテ之ヲ成スノ道如何、他ナシ、第一ノ地租改正ヲ舉行スルニアリ、然レトモ此等タル頗ル重大ノ事業ニ屬ス、假スニ數期ノ歳月ヲ以テセサル可カラス、然ルニ今ヤ特別地価修正論ナルモノヲ唱ヒ、或部分ニ就キ現地價ノ高低標準ヲ改定シテ、以テ減租ノ事ヲ行ハント欲スルモノアリ、其根拠トスル処ハ單ニ標準ヲ米價ノ昂低ニ取リ、以テ輕シク此ノ大事ヲ斷セントス、何ソ其ノ誤ルノ甚シキヤ、夫第一地租改正ハ千古未曾有ノ業ヲ封建割拠ノ余弊ヲ受ケ、國家匆忙ノ際ニ創メタルモノナレハ、今ヨリ之ヲ見レハ多少ノ欠点アルヲ免レス、故ニ到底之ヲ改正シテ公平ナラシメサル可カラスト雖モ、之ヲ再ヒスルニ方リ、其大公至正ヲ得ント欲セハ、宜シク慎重ヲ加ヘテ其計較ヲ精クシ考慮ヲ明カニシ、假スニ歳月ヲ以テシ、費スニ巨財ヲ以テシ、以テ大成ヲ期セサル可カラサルナリ、然ルニ其一隅ヲ舉ゲテ三隅ヲ推シ、速ニ急決ヲ以テ几案ノ上ヨリ大計ヲ放論シ、一部ノ統計比較ニ拠リ大局ノ情勢ヲ舉ゲテ、一網ニ打尽シ去ラント欲スル彼力如キモノハ、是レ自ラ誤リ、併セテ人ヲ誤ルモノト云フヘキナリ、蓋シ租法ハ國家ノ安危之レニ繫リ、人民ノ休戚之ニ依ル、苟モ一着ヲ誤ルアラハ、其害ノ及フ所殆ント國土ヲ以テ陸沈ニ付スルニ異ナルコトナシ、豈徒ラニ空想ヲ頼テ大勢ヲ描寫シ、經綸ヲ取テ戲弄ニ供スルヲ得ンヤ、論者ハ名ヲ修正ニ假ルト雖トモ、其實ハ改正ニ異ナルコトナシ、其修正其改正、孰レカ敢テ輕重ヲ其間ニ措クヘキ、乃改正ナルヲ以テ鄭重ヲ極メ、修正ナルトキハ疎漏モ妨ケナシトスルカ、蓋幾部ト全國トニ論ナク、苟モ手ヲ下ス限リハ、其根基ヲ定ムルニ大公至正ヲ以テセサルヘカラサルナリ

修正論者ハ果シテ全國都鄙ノ形勢状態ヲ曲尽シテ之ヲ掌上ニ運シ、而ル後ニ此議ヲ發セシカ、將夕區々一部ノ地ニ標

準シテ一片ノ想像ヲ描キ、推理ヲ以テ高低ヲ定メタルカ、我輩未タ論者ノ全圖ノ状態ヲ深く探求シタルヲ聞カス、然ラハ則架空ノ想像ヲ以テ彼等カ修正論ノ骨子トナセルヤ明ケシ、乃此ノ不倫無稽ノ骨子ヲ以テ容易ニ事ヲ行フニ當リテハ、其偏極偏重ノモノ益々偏極偏重ニ、其不權衡ノモノ益々不權衡ニ陥リ、已ニ公正ヲ求ムルノ希望ハ、反テ公正ヲ失フノ結果ヲ來スヤ必然ナリト云フヘシ、夫レ知ラスシテ之ヲ為サント欲セハ是レ不明ナリ、知テ之ヲ為サント欲セハ是レ不智ナリ、不明不智ハ人ノ取ラサル所ニシテ、猶強テ之ヲ行ハントスルアラハ、勢ヒ鼓ヲ鳴ラシテ之ヲ攻メサルヲ得サルナリ、乃根底ヨリ一大地租改正ノ舉アルニ非スンハ、姑息ナル地租修正ノ如キハ毫モ民利國益ヲ生スルコト能サルノミナラス、寧口紛雜ヲ求ムルノ具タルニ過キサルノミ、何等飾辭巧言ヲ弄ヒ、空中ニ樓閣ヲ現シ平地ニ波瀾ヲ漲ラスト雖モ形已ニ正カラス、其影響ソ曲カラサルヲ得シヤ、故ニ断シテ曰ク、彼ノ地租修正ハ非ナリト抑地租改正ノ之ヲ根底ヨリ為サ、ル可ラサルハ、舉世皆之ヲ知ル、論者ト雖トモ蓋シ之ヲ知レルナラン、然レトモ特別地租修正ノ姑息タルハ亦孰カ之ヲ知ラザラン、論者ト雖トモ蓋シ之ヲ知レルナラン、然ルニ改正ニ出テス修正ニ出ツルモノ何ソヤ、蓋シ改正ノ大業ニシテ難ク、修正ノ部分ニ屬シ、其易キヲ思フカ故ナラン、固ヨリ全圖ト幾部トニ於テハ、区域ニ広狭ノ別、事ニ大小ノ差アリト雖モ、其部分ニ對セハ改正ト修正ト何ソ扱ハン、其當ヲ求ムルニ於テハ勞費ハ則一ナリ、且其修正スヘキ部分ハ指定ノ幾部ニ止マルカ、將タ其他諸部ニ涉ルベキカ、是又實地探討セスンハ坐上ニ於テ之ヲ定ムヘキモノニアラス、或ハ山河ヲ襟帶シテ州ヲ為シ、方域ヲ區画シテ界ヲ畫キ、一州一県ノ内ト雖モ肥瘠同シカラス、寒温迥ニ異ナルアリ、其一々ヲ詳悉シテ修正ヲ行ヒ、賦ニ厚薄ノ弊ナク民ニ勞逸ノ偏ナキヲ欲セハ、是レ咄嗟ニシテ能ク弁スベキ所ニアラザルナリ、是ヲ以テ断シテ其非ヲ鳴ラスト雖モ、假ニ百歩ヲ譲リ枉ケテ修正論者ニ從フトセハ、試ニ問ハントス、論者はヨリ下文ニ述フル所ヲ探求セント欲スルカ、若シ然ラスンハ坐上ノ空談ナリト稱スト雖モ、論者固ヨリ其實メヲ辭スル能ハサルヘシ

元來第一期ノ地租改正ハ租率ヲ收獲・石代・利子ノ三要素ニ定メ、而テ收獲額ニ配當セシモノ、如シ、故ニ今日ノ純益ニ比例スルトキハ懸隔ヲ生スルコト甚多シ、是レ畢竟純益ヲ目的トシテ率ヲ立テサルニ因レハナリ、然ハ則当初改正ノ成立ハ完全ト謂フ可カラス、今試ニ之ヲ舉ケンニ、第一丈量ハ完全ナラス、第二收獲査定ノ時種々ノ情実行ハレ、且ニ二毛作以上ヲ忽諸ニ付セリ、第三穀価調査ハ粗雑ナリ、第四利子ハ地方ノ実況ニ適合セス其範圍甚々狹隘ナリ、是其租税ノ均一ナラサルヲ來ス所以ナリ、今之カ修正ヲ行ヒ既往ノ欠漏ヲ補ヒ弊害ヲ矯正シ、將來ノ公平ヲ保ツヲ期セント欲セハ、茲ニ完全ノ標準ヲ定メサル可カラス、其丈量ハ既ニ地押調査ヲ經ルヲ以テ、不完全ト雖トモ忽テ率率旧ニ由リ、只其甚々誤ルモノヲ改メ、其收獲ハ一毛作ト二毛作以上トヲ區別シ、穀価ハ五ヶ年以上ノ平均ヲ取り、共ニ正穀ノ調査ヲ遂ケ、其利子ヲ少クモ三分以上、八分以下ノ範圍ニ於テ純益ニ適合スルヲ目的トシ、其適合査定ノ標準ハ大約氣候、地勢及ヒ運輸ノ便否、純益ノ多寡、耕耘ノ難易、災害ノ關係、土地売買ノ實価、都府ノ遠近、人民生活ノ実況、戸口ノ疎密等ヲ詳カニセサル可カラス、論者ノ胸中能ク此等ノ情勢ヲ羅列シ、手ニ隨テ鄉村都市ヲ經緯シ、急箭ノ飛ヒ快輪ノ走ルカ如ク、縱橫自在ニ公正ノ措置ヲ施シ、活発々地ノ実効ヲ奏スヘキカ、若然ラスンハ荆棘ノ叢ニ入ルカ如ク、進退ニ窮苦シテ忽チ本抛ヲ失シ、岐路ニ彷徨スルノ醜狀ヲ呈セントス、既ニ前段ニ述フル如ク、其地ノ豊凶ニ因リ昂低常ナキ米価ノ一点ニ基ツキ、將サニ修正ヲ試ミントスルハ、俱ニ經綸ノ道ヲ談スルニ足ラサルモノタリ、米価ノ以テ租率ニ充ツヘカラサルハ、則土地ニ寒温肥瘠ノ別アリ、運輸ノ便否アリ、耕耘ノ難易、收獲ノ多寡、利子ノ差等アリ、是レ皆租率ト大關係ヲ相為スモノニシテ、凡此等ヲ乘除セサレハ利害ノ在ル所ヲ知ルコト能ハス、然ルヲ單ニ米価ニ拠テ突進シ、百般ノ事ヲ揮撒シテ願ミル所ナク、直ニ以テ奇勲ヲ策セント欲セハ、実ヲ去ルコト弥々遠ク徒ラニ冒險ノ業ニ隨テ、安民ノ道ヲ講スルニ異ナルコトナク、乃僥倖ヲ万一ニ冀ヒ、米価ヲ孤柱トシテ人民ノ休戚ヲ玩弄スルモノト謂フモ亦可ナリ

今其事実ヲ歴察シテ修正ノ不可ナルヲ証セン、我会津地方ノ如キハ修正論者カ視テ以テ地価ノ低廉ナリトスル所ナリ、然トモ其実ヲ知ラハ反テ其高キニ失スルヲ覚ルヘシ、国土ノ広キ此類勝テ数フヘカラス、先会津ノ一方ト雖モ左ノ事  
 実アルヲ如何スヘキ

第一氣候

氣候寒冷ニシテ積雪半歳ニ涉リ、全ク耕耘スルハ六七ヶ月ニ過キス、蓋シ氣候ノ農事ニ關係スルヤ頗ル大ナリ、特ニ動植ノ特有産物ニ至テハ關係尤モ多ク、人力ノ能クスル所ニアラス、農産物ノ種類及品質ノ良否ヲ左ニ列挙ス

農産物

第一 会津ノ地ニ産スル重ナル農産物

- 一 米
- 二 大豆
- 三 麦

第二 僅カニ一局部ニ産スル特有農産物

- 一 蕎麥
- 二 繭

第三 僅カニ一局部ニ産スモ利益甚タ少ナク、漸次減滅ノ徵候アル特有農産物

- 一 綿花
- 二 藍
- 三 煙草

第四 栽培シテ得失相償ハサル農産物

- 一 甘藷
- 二 茶
- 三 糖類

農業ノ利益ハ概シテ普通農産物ニ少ク、特有農産物ニ多キハ、産地ノ実況ニ察シ政府ノ統計ニ視ルモ歴然争フベカラサルノ事実ナリトス、然ルニ会津地方ハ地勢氣候ニ因リ前項ノ如ク利益多キ物産ニ適セス、其産スルモノハ利益小キ普通農産物ノミ、第二項ニ掲クル蕎麥繭二種ノ如キハ、將來幾許ノ望ナキニ非サルモ、産地ハ僅々タル一小部分ノミ、降雪多キノ年ハ繭ノ原資タル桑樹ハ雪霜鼠齧等種々ノ災害ヲ受ケ収穫半ハ以下ニ減スルコトアリ、第三項ニ掲ケシ綿花藍煙草等ノ如キハ漸次退歩ノ状アリ、只自家用料ノ為メ得失ヲ問ハス栽培スルニ過キサルノミ、又中央氣象台ノ調査ニ係ル「氣象ト農事トノ關係」ヲ閱スルニ、其中直ニ会津地方ヲ指定セサレトモ一般ノ氣候ヲ推測セハ、正ニ陸前渡島ノ中間ニ在ルモノトス、其表左ノ如シ

種類	第一土佐	第二山城	第三武藏	第四陸前	第五渡島
日数	一九一	一八四	一三九	一六七	一一六
温度	三九八五	三八九六	三〇〇三	三一九九	一九〇三
収穫高	七合〇〇	七合四〇	五合〇〇	五合〇〇	四合五〇

品質

- 一 成熟不充分
- 二 乾燥不完全

物産品質ノ良否ハ價格ノ高低ヲ生シ、農業經濟ニ影響ヲ及ス輕少ナラス、然ルニ会津五郡ニ産スル農産物ハ氣候ノ不充分ナルヨリ、晚植早刈ヲ常トスル等ノ為メニ右ニ項ノ結果ヲ呈シ、乃市価ニ依ルモ博覽會共進會等出品審査ノ成績ニヨルモ甚々明瞭ナリ、是レ五郡農家ノ蒙ル不利益ナリ、五郡ヨリ第三回内國勸業博覽會ニ出品セシ農産物數千種中、褒賞ヲ受ケタルモノ僅カニ三人ノミ、亦以テ其一班ヲ見ルニ足ル

又「氣象ト農事トノ關係」ニ拠レハ、玄米品質ノ佳良ナラサルヲ証スルニ足レリ、乃其他ノ穀類モ亦之ニ準シ推知スヘシ、是亦会津ノ名称ナキモ正ニ新潟青森ノ中間ニ在ルモノトス、其表左ノ如シ

地名	溫度	平均年數	玄米一石ノ重サ
東京	三三〇六度	五	三十八貫五百目
長崎	三五六八度	五	三十八貫目
高知	三四八九度	四	三十八貫目
広島	三四八八度	六	同
和歌山	三五五五度	六	同
京都	三四二三度	四	同
新潟	三一八二度	三	三十六貫五百目
金沢	三二三五度	四	三十六貫目
野蒜	二九六四度	四	同
青森	二七三〇度	四	三十五貫五百目
函館	二四一九度	三	不詳

第一 地勢

札幌	根室
二四七六度	一九二一度
三	三
同	同

会津ノ地ハ元ト北会津・南会津・耶麻・河沼・大沼ノ五郡及ヒ東蒲原郡・安積郡ノ西部ヲ以テ一藩ノ領地トナシ、後東蒲原・安積西部ハ他ニ屬シ今会津五郡ヲ以テ一區域トナス、其四面ハ重山複嶺ヲ遮障シ各所ニ峯巒ノ起伏四出スルアリ、其中間ノ平地ハ殆ント百ノ二三ニ過キス、其余ハ皆山間ニ在シ人口モ亦稀疎ナリ、地形最も高ク中心ヨリ起点スレハ海浜ヲ走ルコト東西各々三十六里余アリ、猪苗代湖ハ耶麻郡ノ一部ニ在リ、日橋川此ヨリ出テ、而シテ大川・只見川・其他ノ諸流山間ヨリ出テ、之ニ合シテ阿賀川トナリ越後ニ注キ、山間ニ在リテハ灌溉ノ用ニ乏シク、平地ニ在リテハ汎濫ノ患多ク、田圃ヲ浸シ作毛ヲ漂スコト年トシテ之レナキハナシ、且地質ハ平地ニ於テ肥沃ニ屬スルノ部分アリト雖モ、全耕地ニ比シ僅カ百分ノ一二ニ過キス、其余山間山麓ノ地ハ率ネ脆瘠ニ屬シ收穫極メテ乏シ

第三 運輸ノ便否

岩代中東北鉄道ヲ通スレトモ連山ノ外鑿城ノ界ニ在リ、若松ヨリ郡山又ハ本宮等ノ停車場ニ達スル道程十五里余、其他各方面ニ至テハ四十里以上ヲ距ルモノアリ、且其間東滝沢・沼上等ノ峻阪道ニ当リ辛フジテ人馬ヲ通スルノミ、故ニ鉄道ノ開通ハ会津地方ノ運輸ニ利益ヲ与ヘス、又若松ヨリ新潟海港ニ達スル道程二十六里余、其間七下リ・藤・小出・鳥井等ノ諸峠アリ、最も險峻ヲ極ム、海運モ其利ヲ受クルコト能ハス、此他ノ諸道ハ懸崖重壁僅カニ鳥道ヲ通スルニ過キス、且敷糸ノ河川ハ奔流激湍舟楫ノ利ナク只筏ノ僅カニ通スルアルノミ、故ヲ以テ物貨ノ運賃極メテ高ク、穀穀ノ如キ重貨ノ物産ハ時ニ或ハ得失ヲ徴ハス、其輸出ヲ停ムルコト往々アリ、東京ヲ距ルコト七十余里

固ヨリ米穀ヲ輸出シテ利ヲ獲ルコト能ハサルヤ明ケシ、之ヲ聞ク穀菽類ハ陸路四十里外ニ運搬セハ其原価ヲ消滅スヘシト、是蓋シ一般ノ地勢ニ拠リ目ヲ立テシナラン、会津地方ノ如キハ猶コレヨリ甚シキモノアリ

第五 耕耘ノ難易

降雪ハ例年十一月中旬ヨリ初メ、三月中旬ニ至リ始メテ融ク、其間四望瞭然目ニ一点ノ青ヲ見ス、雪深キコト四尺ヨリ十尺ニ至ル、故ニ耕耘期ハ五ヶ月又ハ七ヶ月ニ過キス、乃一歳ノ業ヲ挙テ此短期ノ間ニ処理セサル可カラス、之カ為メ四月ヨリ九月ニ至ル六ヶ月ハ繁劇ヲ極メ、十月ヨリ三月ニ至ル六ヶ月ハ閑寂ニ堪エス、其繁閑平均ヲ失ヒ有餘不足ヲ補給スルコト能ハス、殊ニ降雪ノ積庄ニ依リ耕土ヲ凝結シ或ハ湿却シ、耕耘ニ苦ミ勞力ヲ費スコト甚タ多シ、且水田ニ至テハ秋耕ヲ為スコト能ハス、耕地ハ多ク棚田ニ属シ、便利ノ農具ヲ用ヒ且動物ノ力ヲ利用スルヲ得ス、是皆耕耘ノ難事農業ノ妨害ナリ

第六 土地売買ノ景況

土地売買ハ僅カニ一区域内ノ授受ニ過キス、他地方人ノ之ヲ買フモノナシ、其運輸ノ不便収益ノ少ナキニ因ル、下ニ掲クル各登記所ノ調査ニ成ル統計ト、急納処分ノ為メ公売ヲ受ケタル実績表トニ拠リ其景況ヲ知ルヘシ、但公売ニハ種々ノ原因アリ、直ニ土地ノ真価ヲ判定スルニ足ラスト雖モ、要スルニ收得ノ少キヨリ之ヲ愛惜スルノ念薄キニ出ツルモノナリ

第一号

明治二十一年分地所ノ売買及券面金高

登記所名	売買金高	券面金高
北会津郡若松	五、七六二 円	八三、二二八 円

耶麻郡喜多方	三九、九八五	一二〇、三二九
河沼郡坂下	五六、八七六	九九、〇五九
計	一四八、六二三	三〇二、六一六

第二号

地所公売代価ト地券面ノ地価比較表 明治二十一年

郡名	反別	公売代金	券面代価
北会津郡	九一四、一二六 歩	八九四、七三八	七、四三六、九四二
南会津郡	五一、一二八	四二、六五三	二九六、八二六
耶麻郡	一、九一九、六〇〇	三三三、六六一	三七、四三五、九〇二
河沼郡	二五八、一二九	四三七、三八〇	四、〇四二、七八八
大沼郡	一三四、九一八	一七二、二六九	一、八三七、二〇〇
計	三、二七八、一一一	四、八八〇、二七〇	五一、四八七、三八〇

第四 収獲ノ多寡

氣候寒冷地勢宜ラ得サルハ既ニ前諸項ノ如シ、乃其寒冷ナルカ為メニ古来苗代田ト称スルモノアリ、単ニ苗代ニ充テ例年休作ス、此田ハ多ク肥料ヲ施シ苗ノ發生ヲ助クルヲ以テ、若或ハ作付スルトモ只稻幹生長シテ秋熟ヲ見ル能ハズ、初メ地租改正ノ際此田ヲ除カスシテ地価ヲ算出シ、且之ヲ上田ノ部ニ置ク、即チ一粒ヲ産セサル空田ニ向テ多額ノ租税ヲ課スルモノナリ、苗代田ハ燠地ノ無キ所ニシテ、会津ノ如キハ之レ無カルヘカラス、其他山間山麓ノ

畑地ニ至テハ蕎麥・粟等ヲ作り、纒ニ其畑地タル体面ヲ失ハサルニ過キササルノミ、今最近福島県勸業年報ニ拠リ其  
 収獲ヲ下ニ示スベシ、尤モ土地ノ純益如何ハ小作料ノ高低ニ依リ表明スル者タリ、元來小作ハ全ク地主ト小作人ト  
 ノ關係ヨリ成リ、地力ノ厚薄・耕耘ノ便否ニ応シ利益ヲ分割ス、因テ其多寡ヲ見テ地価ノ適否ヲ判定スルヲ得ヘキ  
 者タリ、会津地方ノ他ニ比シ小作料ノ僅少ナルハ、地価ノ過当ナルカ為メナリ  
 北会津外四郡平均

種類	作付反別	産額	老反出収獲
米	一九、六二五、一 <sub>反</sub>	二五五、五一七、五〇〇 <sub>石</sub>	一、二〇二
大麦	三、一六八、四	一九、六八七	六二一
大豆	五、八九一、七	四〇、九二二	七一、二
甘藷	七、八	八、五二八 <sub>貫</sub>	一〇七 <sub>貫</sub>
実綿	五五八、九	九三、三二二 <sub>貫</sub>	一九、一三七 <sub>貫</sub>
蕎麥	二、六九六、〇	一四、四六七 <sub>石</sub>	五三六、六 <sub>石</sub>
煙草	一五六、〇	五三、九三二 <sub>貫</sub>	三三、八七〇 <sub>貫</sub>
藍	一四八、二	二九、七四六 <sub>貫</sub>	二四、八八二 <sub>貫</sub>

小作料比較表

府県名	京 都		埼 玉		静 岡		宮 城		広 島		福 岡		福 島ノ内		会津五郡	
	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田
	三石	三斗五升	三斗五升	三斗五升	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗
最高	三石	三斗五升	三斗五升	三斗五升	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗
最低	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗
普通	三石	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗	三斗

(各府県農事調査二拠ル)

往時會津藩徴租ノ政略ハ、専ラ重キヲ地租ニ負担セシメ、其所得ヲ薄フシ、以テ農民ノ貧富ヲ平等ニシ、土地兼併ノ  
 弊ヲ防クニアリ、而シテ租額ハ五公五民ヲ標準トシ、田畑石盛ニハ免ヲ以テ租ヲ課シ、尚其土地ノ厚薄、農民ノ貧弱

ヲ査察シ、特ニ定石代納ノ法ヲ設ケ、金壹分ニ付八斗替(田)・六斗替(畑)ノ代納ヲ許シ、僅カニ粗田ノ荒蕪二期スルヲ防止シタリ、明治五年若松県ニ於テ一般檢見取ノ制ニ依リ、藩制ヨリ繼續セシ定石代納ノ法ヲ廢シタルカ爲メ、其租稅ニ莫大ノ増額ヲ生シ、爾來農民ノ困難其極ニ達シ、政府ヨリ増租金額ニ對スルニ割ヲ貸附ケ、無利子ヲ以テ年賦返納ノコトトナシ、僅カニ一時ノ急ヲ療シタリ、是レ若松県カ藩制ノ迹ヲ追ヒ、其恩惠ヲ去テ苛歛ヲ取リ、之レヲ斟酌スル所以ヲ知ラサルカ爲メ甚々租額ヲ増シ、其餘藩ハ延テ地租改正ノ時ニ及ホシ、遂ニ土地ノ實收益ニ匹敵セサル現時ノ地価ヲ生シタル所以タリ、殊ニ幕府領ニ屬スルノ地、即チ南会津全郡及大沼郡中西部ハ往時ニ比スレハ殆ント倍租ヲ出スニ至レリ、之レニ依リ五郡中往々荒蕪地ノ増スアルモ、開墾事業ハ斷ヘテ之レアルヲ見ス、尚地租改正當時ノ実状ヲ左ニ録セン

一 土地ノ丈量

若松県ニ於テ地租改正ヲ行フニ當リ、非常ニ嚴密ヲ極メ其調査ヲ結了シタリ、其丈量法ハ新等ヲ用ヒ、其長サ六尺(二分加)、所謂十文字ヲ以テ、検査官實地ニ就キ一筆毎ニ嚴密ヲ施シ、毫モ仮借スル所ナク再三之レヲ調査セシム、故ニ明治十八年ヨリ廿年ニ涉リ施行セシ地押調査ノ際ハ、他府県ニ比シ異動發見等ハ極メテ僅少ナリ、北会津郡ノ元反別一九、二二ニ對シ一、二、河沼郡ノ元反別一九、五九八ニ對シ三〇六、大沼郡ノ元反別二三、九五六ニ對シ三五三ノ増加ヲ見シニ過キササルヲ以テ、其精確ナリシヲ窺フニ足ル

收穫米ノ歩合

地租改正ノ際査定シタル收穫米ノ歩合ハ甚々低キカ如シト雖モ、其實ハ却テ高シ、元來会津ノ地タル、已ニ地勢ノ項ニ記セルカ如ク、山多ク土瘠セ收穫僅少ナリ、会津藩ニ於テ到底米租ノ徵收ニ由ナキヲ知り、特ニ定石代納ヲ特許セリ、其幕府領ニ屬スル部分、租額ハ会津領ニ比スレハ殊ニ低廉ナリ、今会津藩ニ於テ地味ノ厚薄ヲ調査シ納稅

ノ標準トセシ者ヲ擧ケレハ

(会津藩石代取調帳)

一 田卷反歩ニ付	上田米貳石	但領内壹分五厘通り
一 一同	中田米壹石四斗	貳分通り
一 一同	下田米七斗	六分五厘通り
右卷反歩ノ收穫平均壹石〇三升五合		
一 畑卷反歩ニ付	上畑大豆壹石貳斗	但領内貳分通り
一 一同	中畑大豆六斗	二分通り
一 一同	下畑大豆貳斗	六分通り
右卷反歩ノ收穫平均四斗八升		

右ノ外幕府領タル南会津全郡及大沼郡中西部ノ地方ハ、皆山間ニ僻在シ土地瘠薄、僅カニ稗粟ヲ産スルニ過キス、以テ会津全部ノ瘠地多キヲ知ルベシ、而シテ地租改正ノ際採用セシ平均收穫米ハ壹石貳斗五升三合ニシテ、藩制ニ比シ反テ過重ノ標準ニ上リ、其幕府領ニ屬スル部分ハ苦ヲ受クルニト殊ニ甚シ、尚其畑方ニ就キ地租改正ニ採用セシ平均收穫額ハ、大豆六斗壹升四合四勺ニシテ、他ノ低廉ナル麥ノ收穫ニ取リ地価ヲ算出セシ地方ニ比較スレハ、獨り平均地価額ノ高度ニ居ルノミナラス、田畑共ニ實收穫ニ適ハサル苛歛ノ徵租ニ遭フモノナリ

一 石代相場ノ適用

石代相場ハ明治三年ヨリ七年ニ至ル五ヶ年ヲ平均シテ價格ヲ定メ、地租改正ノ際ニ適用シタル者ナリ、之ヲ現今ノ相場ニ比較スレハ多少ノ徑庭アルカ如シト雖モ、会津地方ハ氣候・地勢・運輸等前數項ノ如キヲ以テ、米質疎悪・



價格低廉ナルノミナラス、他ノ地方ニ於テ米價昂騰スルアリトモ、空ク道路ノ不便ニ妨ケラレ急遽輸出シテ利益ヲ收ムル能ハス、其低昂ハ僅カニ一区域ノ内ニ進退シテ、上國ニ向ヒ之ヲ争フノ便ヲ欠ケリ、亦以テ全國比較ノ價格ニ標準シテ、会津ヲ視テ不相當ナリトスルヲ得サルモノトス、左ニ掲クル表ハ明治十七年ヨリ廿一年ニ至ル、若松・坂下・喜多方・高田・田島ノ五ヶ所毎月ヲ通算シ、而シテ一ヶ年毎ニ平均ヲ取リタルモノナリ

年 度	価 格
十八年	二九〇六
十九年	三六五六
二十年	三二五九
二十一年	二九七二
二十二年	四一六六
平均	三三九二

一 利子ノ査定

地租改正ノ際ニ用ヘタル利子額ハ、全國ヲ通シテ概算シタルモノナリ、会津地方ノ如キハ六分〇七ヲ標準トシテ之ヲ算出セリ、元來利子ハ都府ニ低ク僻地ニ高キハ數ノ免カレサル所、殊ニ会津ノ如キ寒郷ニ在リテハ、其標準甚タ低キニ過クル者トス

前ノ如ク会津地方ノ一例ニ拠ルモ、以テ徵租ノ公平ヲ求ムルノ至難ナルヲ知ルニ足レリ、然ルニ漫然タル目的ニ出テ容易ニ修正ヲ施シ、大計ヲ經綸セント欲スルハ、是レ惑ヘルノ甚シキニアラスヤ、且會津五郡ノ実況ハ前ノ如ク高寒ノ地ニ位シ、峯巒ノ蜿蜒鶴張スルアリ、此連山ヲ以テ内外ヲ隔斷シ五郡ハ殆ト別天地ニ在ルカ如シ、殊ニ積雪平歲ニ

涉リ人家林野ハ悉ク白沙ニ埋没シテ、住民ハ恰モ穴居ノ姿ヲナセリ、農業ハ勿論其他ノ業モ亦之ヲ執ルコト能ハス、家々雪ヲ穿テ窓トナシ葦族ヲ擁シテ昼眠ル、其外ニ出ツルヤ雪ニ梯シテ道ニ登リ歩驟ノ声ハ高ク齧齧ヨリ伝フ、車馬ノ以テ運輸ヲ資クルヲ得ス、只雪車ヲ引テ負担ニ代フルアルノミ、殊ニ僻隅ノ境ニ至テハ雪ノ人ヲ凍殺スルモノ年トシテ之レナキハ莫シ、其雪ヲ降スコト甚シキニ至リテハ眼前咫尺ヲ弁セス、須臾ノ間ニ堆積數尺ニ及ヒ、人若シ山間平野ヲ行クニ当リ俄カニ大雪ノ來ルニ逢ハ、忽チ前後ニ平鋪シテ方位ヲ求メ行歩ヲ移スコト能ハス、或ハ雪塊輪ノ如ク山嶺ヨリ転シ屋ヲ覆キ人ヲ庄スル等頗ル慘虐ヲ極ム、夫此ノ雪國ノ苦況ヲ華ケ寒菜ヲ摘テ梅花ニ對シ、佳景ヲ以テ疎管ヲ賞スルノ暖地ニ比セハ、正朔ヲ同フシ邦土ヲ奇フスルノ民ト謂フヘカラサルノ状アリ、乃交通ノ便少ナク運輸ノ利乏キカ為メニ、製造工業ヲ以テ大ニ地方ヲ益スルコト能ハス、只生ヲ農ノ一方ニ仰クモノ多ク、其資力ノ薄弱ナルモ亦温暖地ノ比ニアラサルナリ、尚又會津ハ曩キニ戰乱ノ大難ニ遭ヒ、其疲弊未タ癒エサルニ凶歲荐ニ至リ、而シテ地租改正ノ舉アリ、初メ兵革ニ畏怖セシノ念慮猶存シ、官軍ヲ見タル心ヲ以テ官吏ヲ視、尙モ其曠ニ触レンコトヲ是レ恐ル、因テ丈量檢定ニ至ルマテ敢テ争フ所ナク、惟命コレ從フ故ヲ以テ其結了スルニ及ヒ、租税ヲ出スモノ収獲ノ度ニ過ギ、地方年ニ竭キ民膏日ニ貧シ、之ニ加フルニ増租ノ事アランニハ、遂ニ如何ノ悲惨ニ陥ルモ亦未タ測ルヘカラサルモノアリ

今已ニ政費ノ負担ハ偏ヘニ農民ニ重ク、大本ノ齋血ハ頗ル消耗ニ就キ、饑寒ニ疊歲ニ逼マリ流離ニ昇平ニ遭ヘリ、其斯ノ如キヲ憫ヒ休養生息ヲ圖ルニ汲々タルモノ海内ノ輿論ナリ、然ルニ其間ニ在リ地価修正ヲ以テ幾部分ニ租税ヲ減シ、更ニ東北其他ノ地方ニ就キ之ヲ増徴セントス、敢テ言ヲ設ケテ曰ク、高租地方ノ不平ヲ慰セント欲スルニ在リト、是レ何ノ言ソヤ、只空疎曠漠ノ見ニ出テ、地ニ寒燥・肥瘠ノ別アリ、耕ニ難易・便否ノ差アルヲ察セス、一己立脚ノ地ニ標準シテ天下ヲ易ヘンコトヲ思ヒ、几案ノ上ニ經緯ヲ圖テ造化ノ配置ヲ沙汰センコトヲ謀リ、適々一方ノ不平ヲ

慰セント欲シテ、一反テ一方ノ不平ヲ醸スヲ知ラサルモノナリ、曾テ農民ハ痛苦困憊ヲ極メ告訴スル所以ヲ知ラス、忍テテ其期ヲ待ツト久シ、幸ヒニ帝國議會ノ開会ニ会シ起テ積蓄ヲ上陳スルニ方リ、務メテ政費ヲ節制シテ租税ヲ減削スルハ、興國済民ノ長計ニアラスヤ、然ルニ事此ニ出テス、反テ部分ヲ区画シテ租税ノ増減ヲ試ミント欲スルハ、倒懸ヲ解テ固本ヲ培養スル所以ノ意ニ戻リ、股ヲ割テ腹ニ溜ツルニ異ナルコトナシ、乃國民ヲ休養生息セント欲セハ一般ニ租税ヲ減スヘク、租税ノ均一ヲ求メハ根底ヨリ地租ヲ改正セサル可カラス、況ンヤ輕忽ナル修正論ヲ以テ人民ノ既得権ヲ侵害スルノ嫌アルニ於テオヤ、苟モ全国土地ノ肥瘠ヲ詳カニシテ純益ノ多少ヲ算リ、下表ニ抛リ純益ニ隨テ改正ノ標準ヲ定ムルトキハ、修正論者ノ視テ以テ租税低シトスル地方ハ反テ高ク、其高シトスル地方ハ反テ低キノ実アル可シ、何ソ其高キニ増シテ低キニ減スルノ理アラシヤ、故ニ曰ク、論者ノ如キハ瘠地ノ民ヲ苦メテ沃土ノ民ヲ肥スモノナリ

埼玉外十四県地価高低差合算出表 田之部

府県	一反当		純収入	現行一反		地価金	現行地価金		地価金	地価金	地価金
	一反当	一反当		一反当	一反当		一反当	一反当			
埼玉	一、七二六	五、八〇四	八、〇六六	八、五二一	五、三二六	三、三一九	六、三四六	二、一三八	五、三〇六		
群馬	一、六七〇	六、四〇五	九、一三三	九、二一一	五、三〇二	三、九〇九	七、三六九	二、三〇三	五、七四〇		
群馬	一、八一六	五、七四六	八、八七七	八、八七〇	五、一〇一	三、七一一	七、一五三	二、二二四	五、六一四		
群馬	一、九一三	五、一九八	八、八七七	八、五二一	五、三〇二	三、九〇九	七、三六九	二、三〇三	五、七四〇		
群馬	二、一七六	五、一六二	九、五〇八	九、五〇八	五、〇〇七	四、一〇七	七、五八〇	二、三三七	六、〇二五		
群馬	一、三〇二	六、二二六	九、一〇〇	八、八八八	五、〇九七	一、七九七	五、八一九	一、二二二	三、三〇六		
群馬	一、二八七	三、三九二	三、七二一	三、四一八	二、五二二	九、七九三	三、〇九九	八、七一	二、四二五		

府県	一反当		純収入	現行一反		地価金	現行地価金		地価金	地価金	地価金
	一反当	一反当		一反当	一反当		一反当	一反当			
埼玉	一、二五五	四、二〇五	四、四八三	四、一八八	三、三二七	一、八七一	八、〇七三	一、〇四七	二、九三七		
群馬	一、〇三八	四、六五二	四、一〇五	三、八五五	二、四〇〇	一、四三〇	五、九〇一	九六四	二、六八二		
群馬	一、八五四	四、八二五	七、五八二	七、六二六	四、二〇〇	三、四二六	八、〇四六	一、九一五	四、七五五		
群馬	二、三〇六	四、九八五	九、七九六	九、九四一	六、五二五	三、四〇六	五、二二五	三、四九九	六、一〇七		
群馬	一、八一二	四、七二六	七、三三三	七、二八二	四、四七八	二、八〇二	六、二五八	一、八二〇	四、六六一		
群馬	一、八一二	五、一九九	八、〇二八	七、九八五	四、一三四	三、〇三三	六、一七七	一、九八七	五、〇八三		
群馬	一、七〇二	五、三二七	七、八七三	七、七九〇	四、四八三	三、三三一	七、三八六	一、九四九	四、九九六		
群馬	二、〇〇三	四、七二六	八、二二四	八、〇三六	四、二八五	三、四一一	七、三七八	二、〇一一	五、一五六		
群馬	一、八〇七	四、五二六	六、九五〇	六、八四七	三、六四二	三、二〇五	八、九九九	一、七二二	四、四二二		

本表ニ埼玉外十四県ヲ掲ケタルハ、全国各地々価ノ当否ヲ察知センカ為メ、毎農区ニ就キ各若干ノ府県ヲ調査シタルモノナリ

- 一 収穫米ハ別紙標準ニ抛リ検定ス
- 一 石代相場ハ明治十八年ヨリ同廿二年迄五ヶ年間、各府県都府平均相場ニヨル
- 一 利子ハ別紙標準ニ抛リ検定ス

田収穫米検定標準

府県名	科目			合計	平均	二毛作収穫	合計
	第一収穫	第二収穫	第三収穫				
埼玉	一、二五三	一、三三六	一、七〇〇	四、二八九	一、四三〇	二八六	一、七一六

内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		
大分	佐賀	高知	徳島	広島	大坂	京都	岩手	秋田	福島	滋賀	愛知	静岡	群馬	大分	佐賀	高知	徳島	広島	大坂	
一、一八八	一、三六九	一、二二八	一、三三二	一、三〇五	一、六九〇	一、一八八	九八二	一、一四七	一、一五六	一、四〇二	一、四〇二	一、二七〇	一、二二四	一、二三〇	一、五三九	一、二〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、二〇〇	四、一八六
一、二三〇	一、五三九	一、二二九	一、一九七	一、一四三	一、八七六	一、五三六	九三三	一、一六	一、二九八	一、三八九	一、三八六	一、二六八	一、一六二	二、一〇〇	一、八三九	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	四、一八六
二、一〇〇	二、一〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇八〇	二、二〇〇	一、九一〇	一、二〇〇	一、五〇〇	一、四五〇	二、一〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一、八〇〇	四、五二一	四、七八八	二、五九六	二、五九六	二、五九六	二、五九六	四、一八六
四五一八	五〇〇八	四三五七	四五二九	四五二八	五七六六	四六三四	三一五	三七六三	三九〇四	五四四〇	四七八八	四五三八	四一八六	四、五二一	四、七八八	二、五九六	二、五九六	二、五九六	二、五九六	四、一八六
一、五〇六	一、六六九	一、四五二	一、五一〇	一、五〇九	一、九二二	一、五四五	一、〇三八	一、二五四	一、三〇一	一、八一三	一、八一三	一、五一一	一、三九五	一、五〇六	一、六六九	一、四五二	一、五一〇	一、五〇九	一、九二二	一、五二一
三〇一	三三四	二九〇	三〇二	三〇二	三八四	三〇九	〇	〇	〇	三六三	三一七	三〇三	二七九	三〇一	三三四	二九〇	三〇二	三〇二	三八四	二七九
一、八〇七	一、〇〇三	一、七四二	一、八一二	一、八一二	一、三〇六	一、八五四	〇	〇	〇	一、七六六	一、九一三	一、八一六	一、六七四	一、八〇七	一、〇〇三	一、七四二	一、八一二	一、八一二	一、三〇六	一、八五四

備考

地価検定ノ要案一ニシテ足ラスト雖モ、土地ノ収獲ヲ以テ一大基礎トナサ、ルヘカラサルヤ論ナシ、而シテ此基礎タル収獲ノ実ヲ得ル、我國今日ノ如ク農業簿記ノ行ハレサル時ニ際テハ、最モ至難ノ事業ナルヤ又必セリ、試ニ諸種ノ統計ヲ閱覽セハ蓋シ思ヒ半ニ過シ如ス、其実ト大差ナキモノヲ得シコトヲ欲セハ、數個ノ統計ヲ參酌スルニアルノミ、

之レ本表ノ主眼ナリ

- 一 第一収獲ハ特別地価修正後ノ明治二十三年一月ノ現在額ナリ
- 一 第二収獲ハ政府ノ統計年鑑ニヨリ、明治十七年ヨリ同廿二年迄五ケ年間ノ平均額ナリ
- 一 第三収獲ハ各府県ノ農事調査ニ基ケリ、其之ナキモノハ他ノ統計又ハ隣県等ノ比準ヲ取り検定シタルモノナリ
- 一 一毛作地ノ裏作ハ凡テ耆反当り収獲米ニ算入シ、之レナキニヨリ検定ヲ以テ加ヘタリ
- 一 一毛作収獲高ノ検定ハ、各地耕土ノ構造又ハ耕地ノ多寡等ニヨリ、作付ノ歩合・収獲ノ割合等多少ノ差違アルヘシト雖モ、之ヲ詳細ニ調査スルハ繁ニ堪ヘ難キヲ以テ、収獲米ノ二割ヲ以テ算出セリ

利子検定標準

内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		内州		
秋田	福島	滋賀	愛知	静岡	群馬	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	埼玉	
六	五	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
五	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
七	八	三	四	三	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
七	五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一〇	九	四	六	六	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
九	八	六	二	七	八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
四	四	二	一	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
七	七	五	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
六	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
二	九	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
六	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五



畑収獲金檢定標準

府県	科目		合計	平均	代金	大豆外七種収益金	合計金
	第一収獲	第二収獲					
埼玉	三三五	一〇五六	四一〇	七〇六	二〇四九	三、一九七	五、二四六
群馬	三三五	五八七	九四二	四七一	一、五一〇	四、二二六	五、七三六
静岡	三〇七	四三八	七四五	三七三	一、〇七五	二、八二六	三、九〇一
愛知	五五〇	九二六	四七六	七三八	一、九一八	四、五七六	六、四九四
滋賀	八一七	七三二	五四九	七七五	二、〇〇〇	一〇、〇五九	一二、〇五九
福井	三九四	三〇二	六九六	三四八	八〇四	二、九六九	三、七七三
本州 北区内	六四一	二一七	八五八	四二九	七二八	二、〇五六	二、七八四
本州 西区内	二四八	二一一	四五九	二三八	六〇六	一、三三二	一、九三八
京都	六〇二	六三六	一二三八	六一九	四八九	四、一四五	五、六三四
大阪	九三一	一、一五九	二、〇九〇	一、〇四五	二、六一一	八、八七四	一〇、四八五
徳島	六一九	七三三	一、三三二	六六七	一、五九一	六、一一〇	七、七一一
高知	四九五	七八九	一、二八四	六四二	一、六六九	七、五四四	九、二二三
九州 内	九二	二六〇	三五二	一七六	四六八	一、〇九二	一、五六〇
佐賀	三七〇	五三五	九〇五	四五三	一、〇八一	四、三四四	五、四二五
大分	四〇二	六〇一	一、〇〇三	五〇二	一、一三六	二、六〇五	三、七四一

畑ノ収得ハ水田ト其趣ヲ異ニシ、気象地質ト植物ノ種類ニヨリ収益多寡ニ於テ甚シキ差違アルモノナリ、而シテ之レ

ヲ調査スルノ困難ナルハ田方収獲米ノ比ニアラス、故ニ本表ハ其地ニ産スル重ナル物産ノ總金額ヲ概算シ、之ヲ総反別ニ割當、而シテ卷反当リノ収益金ヲ得、以テ其地力ヲ檢定シタルモノナリ

但シ麥菜種ノ二種ハ、二毛作地ニ於テハ田ニ植タルモノモ混合シアルカ故ニ、調査上紛數ニヨリ全ク之レヲ分別シテ調査セリ

一 第一収獲ハ特別地価修正後明治二十三年一月ノ現在額ナリ

一 第二収獲ハ農商務省第四次農商務統計ニヨリ、各府県平年麦作付總反別ト其産額トニヨリ卷反当リノ収獲麥ヲ算出シ、而シテ其作付反別ハ桑茶ノ類ヲ植、或ハ降雪多キ地ニシテ卷毛作ノミノ為メ作付セサル分ヲ概算シ、二割以上七割五分以下ヲ減シ卷反当リノ収獲ヲ檢定セリ

一 大豆・綿・砂糖・甘藷・麻・茶・繭・藍ノ産額ハ第四次農商務統計ニヨル

一 価格ハ各地ノ売価ニ基キ、而シテ麻・茶・砂糖・繭・藍ノ如キハ其製造費、或ハ飼育費ヲ概算シ、之レヲ引去リ原料ノ代価ヲ見積リタルモノナリ

一 収獲麥ノ石代ハ田方ニ用ヘタル米価ノ半額ヲ以テセリ

一 菜種ハ麦ニ換ヘ計算セリ

明治二十四年二月十一日印刷

明治二十四年二月十三日御届

岩代国河沼郡広瀬村大字青木卷番地

生江孫太夫

東京市京橋区銀座三丁目十七番地

## 10、明治24年 三重県下の地価修正及び地租軽減請願主意書

非売品

地価修正及び地租軽減ノ請願主意書

地価修正及び地租軽減ノ請願主意書

夫レ租税ハ國費ヲ支持スルノ財源ナリ、故ニ國家存立ノ道ニ於テ重要之ニ及ブモノナシ、而シテ租税ノ賦課其宜ヲ制スルハ、民力ト能ク均衡ヲ得ルニ在リ、若シ夫レ賦税其宜ヲ得ザレバ、一部ニ輕課優俸ノ人ヲ見ルト共ニ、他部ニハ重課苦歎ノ民ヲ牛ゼン、是レ國家財政ノ大患ナリ、然ルカ故ニ苟シモ租税ヲ議シ財政ヲ処スルノ位ニ与カル者ハ、勉メテ其公平均衡ヲ求メサルベカラズ、今世願ミテ我國租税ノ賦課如何ヲ察スルニ、果シテ能ク民力ト均衡ヲ得タルヤ否ヤ、一部ニ優俸ノ人アルト共ニ他部ニ苦歎スルノ民ナキヤ否ヤ、其等不才自ラ揣ラズ、敢テ鄙意ヲ陳シテ貴衆兩議院ニ請願スルコトアラントスルハ是レガ為ナリ、希ハ議員諸君ノ採択ヲ得ン

先ツ租税諸種ノ中ニ就テ、民力ノ均衡上其過重ナルヲ見ルハ地租ノ收額ナリ、故ニ首トシテ地租ヲ軽減スベシトノ一議ヲ提出セザルベカラズ、然ト雖トモ其等ハ今此所ニ於テ地租ハ土地ノ收益ニ比シテ過重ナル事案ト、又之ヲ軽減セ

ザルベカラザルノ理由トヲ詳述スルノ要ナシト思ヘリ、何ナレハ此ニ問題ノ如キハ夙ニ天下ノ輿論トナリタル所ニシテ、殊ニ又十數年以前地価制定ノ時ニ當リ、我政府ガ後來大ニ地租ノ減スベキヲ示シタル一事案ニ著明蔽フベカラザルモノアレバナリ、是ヲ以テ其等敢テ喁々ヲ要セズ、唯々單簡ニ民力ノ均衡上宜シク地租ヲ軽減スベシトノ一語ヲ以テ其意十分ナルヲ信ズ

次ギニ地租ヲ軽減スルニ付テハ、其方法ニ於テ民力ノ均衡如何ヲ查察セザルベカラズ、世ニ唱道スル軽減方法ニアリ、一ニ曰ク、現在ノ地価ヲ本トシテ平等ニ地租ノ歩合ヲ減スベシ、二ニ曰ク、地価ヲ修正シテ各地ノ不均衡ヲ矯メ、然ル後地租ノ歩合ヲ減スベシト是ナリ、兩者ノ孰レガ最も税法ノ宜シキヲ得タリトスルヤ、人或ハ云フ、地租ハ他税ニ比シテ全般ニ重キナリ、故ニ之ヲ軽減スルモ亦全般同一ノ歩合タルベシ、殊ニ地価修正ノ如キハ其事ノ繁ナルノミナラズ、又公平ヲ求ムルニ難シト、是レニ方法中ノ前者ヲ主張スル説ニシテ、全ク民間ノ實際ヲ明ニセザルノ言ナリ、斯ノ如キ議論ハ地租軽減ト云ヘル名称ニ睨ミテ、其軽減ノ由テ生ズル根源ヲ知ラズ、平等地租法ノ行ヒ易キニ眩シテ地価修正法ノ必要ヲ忘レタル者ナリ、然レトモ焉ゾ知ラン、民力ノ均衡上地租負担ノ公平ヲ得セシムル方法ハ前者ニ非ズシテ後者ニ在リ、即チ平等減租ニ非ズシテ地価修正ニ重キヲ有スルコトヲ

世論ハ既ニ認定セリ、各府県ノ制定地価ニ大不均衡ノ存スルヲ、而シテ地租ハ皆此制定地価ニ基テ徵收ス、然ラバ則チ大不均衡ナル地価ニ基ケル地租ハ、實ニ大不均衡ヲ含ミタル課税法ナリト云ハザルベカラズ、豈ニ是レ我帝國國入ノ大税源ヲ処理スルノ適法ナランヤ、夫レ凡ソ地租ノ賦課ニ付テ民力ノ均衡ヲ得ント欲スルトキハ、必ズヤ其土地ヨリ生ズルノ利益ヲ標準ト為サルベカラズ、然ルニ制定地価ナルモノハ、維新ノ業未ダ全カラズ百事不備ノ時ニ設ケタル故、地方偶然ノ事情ト有司ノ斡旋如何ニ由テ彼此ノ權衡其宜ヲ得ザルコト多カリキ、今試ニ各府県地価ノ平均ニ付テ之ヲ見ルニ、高キハ田一反当金六十餘円ヨリ低キハ同金二十餘円ニ至ル、其差幾シド三倍ニ及ベリ、地味ノ肥瘠

府県	收種地価(石代及利子表)		(田ノ部)		現在	修正	増	減	現在	修正	増	減	現在	修正	増	減	現在	修正	増	減
	現在	修正	現在	修正																
東京	二二八六	二二八六	五五七	五五七	八〇〇	八〇〇	〇	〇	六〇〇	六〇〇	〇	〇	六〇〇	六〇〇	〇	〇	六〇〇	六〇〇	〇	〇
埼玉	二二五三	二二五三	五二二	五二二	七四八	七四八	〇	〇	四三三	四三三	〇	〇	四三三	四三三	〇	〇	四三三	四三三	〇	〇
群馬	二二二四	二二二四	五〇四	五〇四	四八八	四八八	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇
茨城	九七〇	九七〇	三三〇	三三〇	四九二	四九二	〇	〇	一〇〇	一〇〇	〇	〇	一〇〇	一〇〇	〇	〇	一〇〇	一〇〇	〇	〇
千葉	九三四	九三四	三二二	三二二	四二九	四二九	〇	〇	九二	九二	〇	〇	九二	九二	〇	〇	九二	九二	〇	〇
神奈川	二二三八	二二三八	五二二	五二二	四八八	四八八	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇
山梨	二二八七	二二八七	五〇〇	五〇〇	四八八	四八八	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇	三二二	三二二	〇	〇

- |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 福原資英  | 西田喜兵衛 | 木村善太郎 | 和波久十郎 | 下田亨三  | 辻寛    |
| 佐藤邦光  | 山田光次郎 | 奥村要蔵  | 伊藤斎太郎 | 紀平雅次郎 | 海野謙次郎 |
| 平松直棟  | 信藤勘十郎 | 笹井祐助  | 佐野直市  | 齋田迪   | 土屋源一郎 |
| 西野利一郎 | 乾逸太郎  | 蜂谷愚郎  | 角利助   | 森本確也  | 福地次郎  |
| 阿波直三郎 | 深山健雄  | 中井寅次郎 | 竹原模一  | 荘司晋太郎 |       |

ヤ、今此事二関セル調査ヲ表示スルニト別表ノ如シ

三重県下廿一郡地価修正附屬委員

八固ヨリ価格ノ高キヲ作スベシト雖トモ、此等ノ大差壹ニ悉ク公平ナル地方ノ比例ニ基クナランヤ、然ハ則チ茲ニ地方比例ノ外ニ地価ノ高キヲ受クルノ地方ハ、其制定以来年々偏重ノ地租ヲ払ヒ、又地価ノ低キ地方ハ年々偏輕ノ地租ヲ払ヒタルナリ、是故ニ地租全体ヲ以テ他種ノ租税ニ比スルトキハ一般ニ重課ナリト宣言シ得ベキモ、之ヲ地租ノ部内ニ於テ分解スルトキハ偏重ノ重偏輕ノ差異アルヲ知ラン、而シテ農民ガ重課ニ迫ラレテ飢寒身ヲ困ムル者ハ、偏輕ノ重ニ在ラズシテ実ニ偏重ノ重地方ニ在ルナリ、然ルニ彼ノ平等減租法ニ在リテハ斯ク從來ノ地租中ニ偏重ト偏輕トノ差別アルヲ認メズ、一般同等ニ重課ヲ受クルモノト見做シ、地価制定ニ基キタル不公平ヲ永久ニ持續セント欲スルナリ、是レ豈ニ我帝國ノ大税源ナル地租ヲ処理スルノ適法ナランヤ

更ニ又地価修正ノ煩雜ヲ厭ヒ、且ツ之ヲ以テ公平ヲ求ムルニ難シト云フニ至テハ其説既ニ窮セリ、地価修正ハ之ヲ平等減租ニ比シテ幾分ノ煩雜ヲ免カレズト雖トモ、其結果ニ於テ彼レニ愈ルコト幾倍ゾ、若シ世ニ煩雜ヲ口実トシテ利害ヲ放却スルアラバ、恐ラクハ改良ノ時期來タル莫カラシ、又地価ノ修正ハ果シテ緊密ニ公平ヲ得ルヤ否ヤハ確實シ難シト雖トモ、之ヲ修正セザルノ現時ニ比シテ幾分ノ公平ヲ得ルヤ疑ヒナシ、政府ハ前年地価特別ノ修正ヲ實施セリ、之レヲ其實施以前ニ比スルトキハ幾分か公平ノ方途ニ近キタルヲ見ル、然レトモ惜イ哉、其修正ノ材料斟酌宜シキヲ得ザリシカ、今尚ホ不權衡ノ存在スルヲ免カレザルナリ、故ニ若シ再ビ修正ヲ行ヒテ前時ノ欠ヲ補ヒ、良材料ヲ用ヒテ其及バザルヲ充テサバ、是レ則チ現時ノ不公平ヲ矯正スルノ道タルベシ、然ルニ何ヲ困ミテカ此方法ヲ排セントスルヤ、某等其理ノ在ル所ヲ知ラザル也

之ヲ要スルニ、先ツ地価修正ヲ為シ以テ地租負担ノ公平ヲ得セシメ、而シテ後ニ平等減租ヲナサルベカラス、是レ税法ノ根本規則タル公平ヲ主眼トシ、課税ト民力トノ均衡ヲ得セシムル所ノモノナリ、夫レ租税ハ國費ヲ支持スルノ財源ニシテ、國家ノ存在ニ於テ重要之レニ及ブモノナシ、豈ニ其賦課法ニ付テ不公平不權衡ヲ容ルスベキコトナラン

取極地箇石代及利子表	(り) (り)	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減
	取極地一段歩留	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減
	取極地一段歩留	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減
	取極地一段歩留	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減	現在	改正	増	減

合	鹿	宮	照	長	佐	福	大	愛	香	德	高	岩	岩	岩	合
計	児	崎	本	浜	賀	岡	分	媛	川	島	知	手	手	手	計
	九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	九
	五	〇	一	〇	五	二	八	二	四	三	二	八	九	八	六
	四	一	一	〇	九	二	八	一	二	三	二	八	九	八	一

秋	山	沼	新	長	富	石	福	島	山	廣	岡	兵	大	京	京	和	三	岐	愛	静
田	形	品	沼	野	山	川	井	根	口	島	山	麻	阪	野	都	歌	重	本	知	園





(位号)  
地租軽減調査表

府県	地価台帳 現在石代	十八、十九、二十 五年間ノ平均値
東京	五、〇〇〇	五、九二二
京都	四、一五七	五、一三三
大阪	四、五三四	五、二五一
神奈川	四、九三五	五、八四三
兵庫	四、六二八	五、一七二
長崎	三、九七七	四、九九七
新潟	三、一六〇	四、六三九
埼玉	四、九一六	五、七九三
千葉	四、六三六	五、五四七
茨城	四、三四九	五、五九五
三重	四、四六〇	五、四四六
愛知	四、四二六	五、四八一
静岡	四、八〇五	五、八五九
山梨	四、五八〇	五、九二八
滋賀	四、三三〇	五、五二二
岐阜	四、四三五	五、四七八
長野	三、七〇七	四、八七四
宮城	二、七〇五	四、八五一
福島	三、一三三	四、九六一
岩手	二、九三六	四、三五一
青森	三、〇〇八	四、四五四
山形	二、八六四	四、八三一
秋田	二、四二八	三、三三八
福井	三、八〇九	四、三〇〇
三根	三、五二〇	四、三〇〇
島根	三、二二二	四、三〇〇
岡山	四、二二二	五、〇九二
広島	四、〇三八	五、三五六
山口	三、〇〇〇	五、二九九
山歌山	四、三二〇	五、一七七
和歌山	四、三二〇	五、三九七
徳島	四、三四〇	五、一〇五
香川	四、三〇〇	五、〇九〇
愛媛	四、一六〇	五、〇九七
高知	四、二九五	四、九〇八
福岡	四、〇〇六	四、三〇〇
大分	三、七一五	四、九〇八
佐賀	三、九七八	四、三〇〇
熊本	三、九六一	四、三〇〇
宮崎	三、三三八	四、三〇〇

東京都	五〇〇〇	五九二二
京都府	四一五七	五一三三
大阪府	四五三四	五二五一
神奈川県	四九三五	五八四三
兵庫県	四六二八	五一七二
長崎県	三九七七	四九九七
新潟県	三一六〇	四六三九
埼玉県	四九一六	五七九三
千葉県	四六三六	五五四七
茨城県	四三四九	五五九五
三重県	四四六〇	五四四六
愛知県	四四二六	五四八一
静岡県	四八〇五	五八五九
山梨県	四五八〇	五九二八
滋賀県	四三三〇	五五二二
岐阜県	四四三五	五四七八
長野県	三七〇七	四八七四
宮城県	二七〇五	四八五一
福島県	三一三三	四九六一
岩手県	二九三六	四三五一
青森県	三〇〇八	四四五四
山形県	二八六四	四八三一
秋田県	二四二八	三三三八
福井県	三八〇九	四三〇〇
三根県	三五二〇	四三〇〇
島根県	三二二二	四三〇〇
岡山県	四二二二	五〇九二
広島県	四〇三八	五三五六
山口県	三〇〇〇	五二九九
山歌山県	四三二〇	五一七七
和歌山県	四三二〇	五三九七
徳島県	四三四〇	五一〇五
香川県	四三〇〇	五〇九〇
愛媛県	四一六〇	五〇九七
高知県	四二九五	四九〇八
福岡県	四〇〇六	四三〇〇
大分県	三七一五	四九〇八
佐賀県	三九七八	四三〇〇
熊本県	三九六一	四三〇〇
宮崎県	三三三八	四三〇〇

東京都	五〇〇〇	五九二二
京都府	四一五七	五一三三
大阪府	四五三四	五二五一
神奈川県	四九三五	五八四三
兵庫県	四六二八	五一七二
長崎県	三九七七	四九九七
新潟県	三一六〇	四六三九
埼玉県	四九一六	五七九三
千葉県	四六三六	五五四七
茨城県	四三四九	五五九五
三重県	四四六〇	五四四六
愛知県	四四二六	五四八一
静岡県	四八〇五	五八五九
山梨県	四五八〇	五九二八
滋賀県	四三三〇	五五二二
岐阜県	四四三五	五四七八
長野県	三七〇七	四八七四
宮城県	二七〇五	四八五一
福島県	三一三三	四九六一
岩手県	二九三六	四三五一
青森県	三〇〇八	四四五四
山形県	二八六四	四八三一
秋田県	二四二八	三三三八
福井県	三八〇九	四三〇〇
三根県	三五二〇	四三〇〇
島根県	三二二二	四三〇〇
岡山県	四二二二	五〇九二
広島県	四〇三八	五三五六
山口県	三〇〇〇	五二九九
山歌山県	四三二〇	五一七七
和歌山県	四三二〇	五三九七
徳島県	四三四〇	五一〇五
香川県	四三〇〇	五〇九〇
愛媛県	四一六〇	五〇九七
高知県	四二九五	四九〇八
福岡県	四〇〇六	四三〇〇
大分県	三七一五	四九〇八
佐賀県	三九七八	四三〇〇
熊本県	三九六一	四三〇〇
宮崎県	三三三八	四三〇〇

群馬	五、一〇〇	石川	三、七〇〇	四、七六五
栃木	四、五〇四	富山	三、二六八	四、五〇七
奈良	四、一五〇	鳥取	三、六五一	四、六八九

鹿嶋	三、五六〇	四、五三二
----	-------	-------

備考

本表ノ内総テ修正トアルハ、地租改正当時ノ收穫米ニ當テタル米価ト最近五ヶ年間ノ米価ノ比例ヲ見ルニ、各県非常ニ其差異ヲ生シタルヲ以テ、即チ最近五ヶ年間ノ米価ニ基キ各県ノ一反當リノ地価及一石當ノ米価ヲ算出シタルモノナリ

又岐阜県以下五県ノ反當收穫米ヲ修正セシハ、明治十九年地押ニヨリテ得タル延反別ヲ現在一反ノ收穫ニ乗シ、且ツ之ヲ其県總收穫ニ加ヘ、而シテ之ヲ実トナシ總反別ニテ除出シタルモノナリ

は号ハいる両号ノ表ニ基キ地価ニ修正ヲ為シ、其地価ニ依リテ百分ノ二ヲ乗シ、然テ其増減ノ歩合ヲ算出シタルモノナリ

い表田ノ部

一 本表中現在トアルハ明治十年地租改正ノ當時用キシモノ、及ヒ明治二十二年特別地価修正ノ當時用キシ政府ノ調査ニ係ルモノトス

一 地価ノ修正額ハ修正石代ヲ反當收穫ニ乗シテ一反ノ米代ヲ出シ、此内ヨリ種子代肥料代トシテ一割五分ヲ減シ以テ実トナシ、而シテ現在利子公費四朱ヲ加ヘタルモノヲ以テ除出シタルモノナリ

一 一石代米価ノ修正ハ五ヶ年間平均米価標準表ノ額ニ七四三六ヲ乗シタルモノナリ  
但單ニ平進表ノミニ依リテ算出スルトキハ非常ノ増額ヲ見ルヲ以テ、現在地価ト匹敵スルノ額ニ改メンカ為メ、

即チ七四三六ナル數ヲ乘シタルモノトス

畑ノ部

田ノ部ト同シ、只石代修正ニ於テ五ヶ年平均石代二七四六四ヲ乘シテ出シタルモノヲ修正シタルノ差アルノミ、理由田ノ部ト同シ

因ニ記ス、修正石代ヲ出ス為メニ用キシ五ヶ年平均米価ハ四捨五入ノ法ヲ以テ十位ニ止メタリ、是レ調査上ノ速成ヲ図ランカ為メニ煩ヲ省キシ迄ナリトス

る表

本表中現在トアルハい表ト同シ

一 修正地租ハ修正總地価ニ二割ヲ乘シタルモノナリ

一 歩合ハ現在地租ト修正地租トノ増減歩合、即チ減額ヲ現在地租ニテ除セシモノ、以上ハ田ノ部畑ノ部トモ同シ

三重県下各郡ノ地価及ヒ地租ニ關スル請願書ノ件數

一 地価修正及ヒ地租軽減ノ件	安濃郡	岡村佐一郎	外九百二十七名
一 同 件	多氣郡	乾寛郎	外五百三十五名
一 同 件	飯高郡	藤村文兵衛	外四百七十八名
一 同 件	蒼志郡英虞郡	角利助	外九百六十四名
一 同 件	一志郡	信藤勘十郎	外八百九十七名
一 同 件	一志郡	佐々木二郎	外五百三十七名

同件	飯野郡	齋田 迪	外三百九十二名
同件	阿拜郡山田郡	福田為吉	外三十八名
同件	鈴鹿郡	佐藤邦光	外七百七十六名
同件	度会郡	白井清栄門	外八百九十七名
同件	河曲郡	伊藤宗九郎	外三百六十六名
同件	津市	川喜田四郎兵衛	外三百二十二名
同件	奄芸郡	伊達久七	外六百六十名
同件	南牟婁郡	竹原樓一	外三千九百三名
地価修正外三件	三重郡	辻 寛	外三百八十五名
同件	名張郡	深山登嶮	外九百三十八名
地価修正及地租軽減ノ件	伊賀郡	中井寅次郎	外八百六十五名
同件	員弁郡桑名郡朝明郡	木村馨太郎	外二千八百三十八名
地租改正ノ件	山田郡	福川哲造	外百九十二名
同件	朝明郡桑名郡	田中文助	外千二百四十名
地価修正ノ件			

明治廿四年二月二十日印刷

同 年二月廿一日御届

東京市深川区東六間堀町拾三番地  
 三浦喜久治  
 逸見静馬

11、明治25年 对馬国地価最減の哀願

明治廿五年二月廿五日受  
 取第 八 一 一 号  
 对馬国地価最減之哀願

西鄙ノ小民等謹テ茲ニ我大蔵大臣渡辺國武閣下ニ白ス、小民等千古不遇ノ聖世ニ逢遭シ鯨波四擲ノ島嶼ニ棲息スト雖モ、未タ曾テ覆没ノ厄ニ陥ラス、山脊ニ耕シ溪腋ニ耘リ、以テ父母妻子ヲシテ一日ノ凍餓ヲ免レシムルモノハ、小民等伏テ以テ聖恩ノ隆渥ナルニ感泣セサル克ハサルナリ、嗚呼聖恩何ノ遺ヌ所有テ今之レヲ閣下望ムヲ逞フスルヲ得ヘケンヤ、然リ而シテ小民等カ寸楮織々断ツ克ハス、以テ閣下ニ哀求スル所ノモノ一アリ、閣下宜ク之レカ明裁ヲ賜ヘ、小民等賤陋ト雖モ竊ニ以テ謂ラク、地租ハ租税ノ大基ナリ、租税ハ平衡ヲ保タサルヘカラス、而シテ地租ノ平衡ハ固ヨリ地価ノ平準ニ在リト、然レトモ邦土ノ広キ麓蹙ノ差ヲ制シ時勢ノ移ル騰下ノ機ニ応スルハ、是レ敢テ卒カニ望ムヘキニ非スト雖モ、苟モ其軒輊齟齬ノ看ヲ為スニ至テハ、小民等ト雖モ亦タ既ニ姑息ニ安スル克ハサル所以ナリ夫レ对馬ノ地タル所謂ル滄海ノ一粟ニシテ、南北直径式拾六里・東西平均式里七町三過キス、高山峻嶺蜿蜒相絡ヒ平坦ノ地ハ僅カニ其間ニ星点シ地質礫礫地味瘠瘠、之レニ加フルニ山嵐海颶ノ暴衝到ラサル無ク、耕耘培養殆ト其功ヲ

東京市本所区緑町三丁目二番地  
 印刷者 三浦喜久治  
 (平 17 東京 627)

欠キ樹芸收穫屢々其時ヲ失ヒ、穀産未タ僅ニ此三万ノ人口ニ糊スル克ハサルハ、是レ閣下ノ明固ヨリ見ル所ニシテ天下既ニ是認スル所ナリ、然レハ則チ此ノ對馬ノ地タル我カ帝國最下ノ境土タルハ、小民等カ今ニ於テ多ク言フヲ俟タスシテ以テ止ムヘキ所ナリ、小民等又何ヲカ言ハシ、然レトモ小民等愚誠ノ情感一タヒ既往ニ溯リ自ラ資テ以テ閣下ニ訴ヘサルヲ得サルモノアリ、回顧スレハ明治九年地租改正実地檢定ノ日ニ當リ維新尙ホ淺ク、僻陋ノ頑民未タ治化ニ治カラス、將來ヲ顧慮シテ得失ヲ論スル克ハス、全国ヲ通觀シテ當否ヲ議スル克ハス、曖昧糲糊其歸スル所ニ一任シ遂ニ偏重ナル地価ヲ抱有シ、自家ノ長計ニ於テ其過ヲ貽ス所以ノモノ殆ト恨倒絶泣セサル克ハサルナリ、然リ而シテ小民等夙トニ自ラ悟信スル所アリ、昭代ノ民ハ直ク昭代ノ心ヲ以テ心トスベシ、小民等何ノ苦ム所有テ苟モ往日ノ疎懶ニ安シ、以テ今日ノ枉屈ヲ伸フル克ハサランヤ、過ヲ告ケ諷ヲ正スハ乃チ公道ヲ踏ム所以ナリ、閣下尚ホ一タヒ徐ニ全国ヲ通觀シ、其地価ノ等位ト其收穫ノ比準トヲ查覈セハ、小民等カ望ミ既ニ足レリ、自計自較以テ閣下ニ訴フル如キハ小民等カ稍々戒ムヘキ所ナリト雖モ、忍テ之レヲ漏スモ亦徒空ニ非サルヲ知レリ

抑モ地租改正其終ヲ告クルヤ、田地ハ陸中陸奥羽後陸前隠岐ノ上級二位シ、畑地ハ大隅日向羽後陸前周防飛騨土佐陸中佐渡長門陸奥隠岐ノ上級二位シ、其最下隠岐ニ對シ田地ノ地価ハ貴キコト拾壹圓參拾貳錢九厘、畑地ノ地価ハ貴キコト七圓七錢四厘ナリ、然シテ該國ハ我對馬ニ比スルニ國小ナリト雖モ、田畑ハ却テ三層倍ニ近ク、殊ニ田三引ク水溜數十ヶ所ヲ有ス、我對馬ハ之ニ反シ面積大ナルモ土地硠确ニシテ田畑トナスヘキ箇所寡ク、亦タ水溜等設置セント欲スルモ適當ノ地ナシ、故ニ人カ力ヲ以テ為シ得ベカラザルヨリ未ダ一ヶ所ヲモ有セズ、是レ則チ地質ノ然ラシムル理由ナリ、且ツ明治二十二年地価修正ノ優恩ニ邂逅スルヤ、尚ホ當時ノ算定スル所ヲ看レハ田地三在テ對馬ハ貳拾四圓拾四錢五厘、隠岐ハ拾五圓拾五錢八厘、畑地ニ在テ對馬ハ七圓四拾八錢五厘、隠岐ハ壹圓七拾五錢壹厘ト為レリ、而シテ其重因ナル收穫ヲ勘査スレハ、田地ニ在テ對馬ハ五斗六升九合五勺、隠岐ハ九斗九升九合四勺、畑地ニ在テ對馬

ハ八斗八升六合四勺、隠岐ハ六斗七升壹合七勺ニシテ、畑地ノ收穫ハ偶々其多キコト貳斗壹升四合七勺ヲ現シタリト雖モ、僅々收穫スル對馬産米タルヤ、明治二十年ヨリ同廿四年五ヶ年平均ヲ以テ算出スルトキハ、一石金四圓九拾五錢貳厘八毛ニシテ、其歩合ニ至ツテハ肥筑ニ比スルニ二割以上減下アルヲ見ル、之レ他ニアラス、地味瘠瘠ニシテ麥リ疎悪ニ依ルナリ、是レ小民等カ皆テ最近計較スル所ニシテ未タ其少差チキヲ保セスト雖モ、亦敢テ此ノ杜撰ヲ為スモノニ非サルナリ、蓋シ明治九年ノ地租改正ハ率ネ一県ノ画策ニ止リ、尋テ明治二十二年ノ地価修正モ亦タ關東ノ編緯ヲ脱スル克ハス、是レ實ニ此ノ境土ノ獨特ヲ查覈スルノ深切ナラサルニ職由セサルハアラサルナリ、嗚呼小民等カ此ノ經年流月ノ不幸ハ又軼スル所アラン、覆轍ノ間必ス休養生息ノ日ヲ得サルナキヲ期セサルニ非サルナリ、近口關ク、政府ハ田畑地価特別修正法律按ヲ出シテ以テ帝國議會ノ協贊ヲ促シ、將ニ地価ノ偏重ナルモノニ向テ特ニ修正低減セラレントスト、小民等ノ喜何ソ昔ニ大旱ノ靈寬ノミナランヤ、抑モ聖世至仁ノ沢既ニ此ニ至レリ、今ヤ宜ク口ヲ嚙シテ以テ大令ノ出ツルヲ待ツヘシ、是レ固ヨリ小民等ノ素心ニシテ又小民等ノ分義ナルヲ知レリ、憾ラクハ此ノ素心ヲ懷キ此ノ分義ヲ知テ尚ホ其口ヲ嚙スル克ハサルコトヲ、蓋シ小生等ハ只深ク既往ニ鑑ミル所アリ、熟々遠ク將來ヲ慮ルニ過キサルナリ

閣下願クハ此ノ言ノ誣罔ニ非サルヲ察シ、此民ノ望蜀ニ非サルヲ憫ミ、此ノ對馬ノ地価ヲシテ全国等位ノ最下ニ礎定セラレンコトヲ、小生等言ハント欲スルノ途絶ヘハ乃チ止マンノミ、絶ヘスンハ敢テ其止ム所ヲ知ラサルナリ、閣下其レ此ノ哀求ヲ諒セヨ、小民等鬱泣ノ思ニ堪ヘス、恐悚頓首謹言

明治二十五年十二月二十三日

長崎県下県郡藤原村七拾番戸士族無職業

齡四十八年六月

松田三郎

同 同村六拾四番戸士族同

齡四十八年三月

平田昌之亮

同	同村四拾貳番戶士族商業	齡五十五年四月	藤 操 ㊦
同	同村五十番戶士族無職業	齡五十二年五月	佐治雄熊 ㊦
同	同村五十七番戶士族同	齡六十二年	野田平之丞 ㊦
同	同村六十番戶士族同	齡六十二年六月	梶田平兵衛 ㊦
同	同村卅三番戶士族同	齡廿六年五月	原久次郎 ㊦
同	同村廿六番戶士族同	齡四十一年一月	鈴木小文治 ㊦
同	同村五拾一番戶士族	齡三十一年二月	箕原嘉吉郎 ㊦
同	同村六十二番戶士族	齡三十六年六月	一宮泰太郎 ㊦
同	日吉町貳拾三番戶士族無職業	齡五十二年三月	関野宣三 ㊦
同	長崎県下県郡棧原町五番戶平民無職業	齡六十二年五月	小川十右衛門 ㊦
同	同町七番戶士族同	齡四十八年七月	古川和恒 ㊦
同	同町三十二番戶士族同	齡六十九年二月	財部増兵衛 ㊦
同	同町三十四番戶士族同	齡五十二年七月	平山謙四郎 ㊦
同	同町三十六番戶士族教員	齡參十五年九月	樋口正毅 ㊦
同	同町廿七番戶士族	齡廿八年一月	鈴木信行 ㊦
同	同町貳拾四番戶士族無職業	齡四拾零年八月	正島嘉一郎 ㊦
同	同町拾四番戶士族教員	齡五拾二年三月	賀島謙二 ㊦
同	今屋敷町廿二番戶士族無職業	齡四十一年三月	畑島利就 ㊦

同	日吉町四十五番戶平民農業	齡四十八年	加藤与右衛門 ㊦
同	同町十番戶士族無職業	齡四十四年三月	柴田安宅 ㊦
同	長崎県下県郡宮谷町四十九番戶士族無職業	齡廿年	沢田 統 ㊦
同	同町五十番戶士族同	齡五十七年一月	打它頻次 ㊦
同	同町四十七番戶平民商業	齡四十一年四月	岡村吉三郎 ㊦
同	同町四十五番戶平民同	齡廿二年五月	川口永一 ㊦
同	同町四十三番戶平民同	齡六十七年七月	岡村孫左衛門 ㊦
同	同居 平民同	齡卅年五月	岡村種治 ㊦
同	同町七十一番戶士族官吏	齡四十八年六月	山崎東一郎 ㊦
同	同町十四番戶士族商業	齡三十一年二月	春沢兵介 ㊦
同	同町廿二番戶士族商業	齡五十一年	米田松左衛門 ㊦
同	同町六拾八番戶同	齡二十九年三月	武末昇作 ㊦
同	日吉町廿八番戶士族無職業	齡五十九年	大浦友之介 ㊦
同	長崎県下県郡日吉町拾一番戶士族同	四十二年	主藤専之輔 ㊦
同	同町六拾七番戶士族同	三十七年二月	中原千太郎 ㊦
同	同町廿五番戶士族無職業	齡四十二年九月	高崎弾六 ㊦
同	同町五十六番戶士族同	齡四十三年	柴田広作 ㊦
同	同町四十番戶士族同	齡四十一年十一月	幾度省三 ㊦

同	同町三拾四番戶士族同	齡四十五年	八木庸太 <sup>㊦</sup>
同	同町四十二番戶士族無職業	齡三十二年九月	五十嵐範曹 <sup>㊦</sup>
同	同町廿四番戶士族醫師	齡二十九	古壽 泰 <sup>㊦</sup>
同	同町三拾七番戶士族無職業	齡五十四年	小島辰之助 <sup>㊦</sup>
同	同町三拾九番戶士族同	齡廿七年	立花廉介 <sup>㊦</sup>
同	同町五十番戶平民商業	齡五十五年十一月	早田市兵衛 <sup>㊦</sup>
長崎県下泉郡日吉町十六番戶士族同	同町六拾三番戶士族同	齡五十八年四月	藤田久登 <sup>㊦</sup>
同	同町七拾番戶士族同	齡五十六年十一月	島居衛治 <sup>㊦</sup>
同	同町七拾番戶士族同	齡五十二年七月	重松幸十郎 <sup>㊦</sup>
同	同町七拾番戶士族無職業	二十五	西山謙太郎 <sup>㊦</sup>
同	同町七拾番戶士族無職業	齡卅九年	松村四良 <sup>㊦</sup>
同	同町三拾七番戶士族無職業	齡五十二年三月	平山玄秀 <sup>㊦</sup>
同	同町三拾三番戶士族同	齡五十二年六月	堀部 弥 <sup>㊦</sup>
同	同町七拾六番戶士族官吏	六拾二年三月	西村節 <sup>㊦</sup>
同	同町六拾五番戶士族無職業	三拾八年八月	内野小太郎 <sup>㊦</sup>
同	同町廿貳番戶士族同	齡廿二年一月	樺島鏡一 <sup>㊦</sup>
長崎県下泉郡日吉町廿六番戶士族同	同町廿四番戶平民同	齡廿九年三月	中島為治 <sup>㊦</sup>
同	同町廿四番戶平民同	齡五十四年	春日龜長八 <sup>㊦</sup>
同	中村町參十六番戶士族同		

同	同分町十七番戶士族同	齡四十九年	齋藤席太 <sup>㊦</sup>
同	同淵町百九十五番戶士族同	齡三十二年十月	飯田 元 <sup>㊦</sup>
同	同中村町廿五番戶士族同	齡卅一年十月	倉田慶次郎 <sup>㊦</sup>
同	同田淵町百廿拾番番戶平民同	齡廿七年一月	堀 良蔵 <sup>㊦</sup>
同	同宮谷町貳拾六番戶平民同	齡廿四年九月	中庭嘉吉 <sup>㊦</sup>
同	同中村町九十九番戶平民同	齡四十二年一月	村松卯三郎 <sup>㊦</sup>
同	同日吉町六拾八番戶士族同	齡四十二年八月	間永真輔 <sup>㊦</sup>
長崎県下泉郡中村町拾貳番戶士族無職業	同町拾六番戶士族同	齡廿二年二月	雨森 清 <sup>㊦</sup>
同	同町廿二番戶士族同	齡六十五年十一月	小川弥学 <sup>㊦</sup>
同	同町百六番戶士族醫師	齡廿一年一月	佐藤達三 <sup>㊦</sup>
同	同町百六番戶士族無職業	齡七十二年	川名部登齊 <sup>㊦</sup>
同	同町百番番戶士族無職業	齡六十九年	原 鉄五郎 <sup>㊦</sup>
同	同町卅二番戶士族醫師	齡四十七年五月	吉弘令安 <sup>㊦</sup>
同	同町卅一番戶士族無職業	齡四十七年三月	川辺岡太 <sup>㊦</sup>
同	同町四番番戶平民商業	齡五拾六年	小島庄兵衛 <sup>㊦</sup>
同	同町五拾貳番番戶士族無職業	齡四拾八年六月	藏瀬清彦 <sup>㊦</sup>
同	同町五拾七番番戶平民商業	齡四拾八年	八木辰右衛門 <sup>㊦</sup>
同	同居士族無職業	齡貳拾三年	山村卯作 <sup>㊦</sup>

長崎県下県郡中村町七十九番戸平民商業 齡三十九年十一月 住野平五郎<sup>㊦</sup>  
 同 天道茂町拾三番戸士族無職業 齡三十五年十一月 三井田俊一<sup>㊦</sup>  
 同 中村町八拾番戸士族商業 齡三十五年五月 吉野忠次郎<sup>㊦</sup>  
 同 同町六拾八番戸平民同 齡四十年 比田勝房次郎<sup>㊦</sup>  
 同 同町五十五番戸平民同 齡二十年 梅野作次郎<sup>㊦</sup>  
 同 同町八番戸平民同 齡二十年 吉井周蔵<sup>㊦</sup>  
 同 日吉町五十五番戸平民同 齡五十年六月 吉井友介<sup>㊦</sup>  
 同 同町四拾一番戸士族無職業 齡三十六年 袖岡權之進<sup>㊦</sup>  
 同 同町四番戸士族同 齡廿八年 河島矯介<sup>㊦</sup>  
 同 同町九番戸士族同 齡五十四年六月 小野久米増<sup>㊦</sup>  
 同 同町五十八番戸士族同 齡三十五年八月 佐伯昭忠<sup>㊦</sup>  
 同 同町五十二番戸平民商業 齡廿五年十月 上田貞吉<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町四拾番戸士族無職業 齡六拾七年七月 谷盛三郎<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町三拾八番戸平民商業 齡四十二年九月 大東本次郎<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町三拾貳番戸士族工業 齡五拾二年八月 太田多助<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町三拾番戸平民工業 齡廿七年二月 大宮友治<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町拾六番戸士族同 齡廿三年九月 平間長生<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町拾八番戸士族無職業 齡五十年一ヶ月 平川豊之輔<sup>㊦</sup>

長崎県下県郡天道茂町四拾貳番戸平民商業 齡廿九年七月 佐伯元助<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町四拾八番戸士族無職業 齡五拾二年十一月 内山裕<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町七拾三番戸平民工業 齡五十七年八月 早田勲右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町參番戸士族教員 齡卅三年二月 久井為介<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町四拾五番戸平民商業 齡六十二年三月 春田卯助<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡天道茂町四拾七番戸平民工業 齡四十七年八月 中島伊作<sup>㊦</sup>  
 同 長崎県下県郡今屋敷町壹番戸士族医師 齡四拾六年三月 馬島建造<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町三番戸平民商業 同四拾九年二月 永瀬甚右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町七拾貳番戸士族無職業 同三拾三年 岩村久太郎<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町七拾叁番戸平民同 同五拾年十一月 脇田恭一<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町七拾叁番戸平民同 同五拾貳年七月 和田五郎<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町九番戸士族同 同五拾三年二月 高瀬正志<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町四番戸同 齡廿六年一月 白水恭一<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町拾貳番戸同 同五拾七年六月 小川清之介<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町七拾四番戸平民商業 同六拾八年十一月 龜川民右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町貳拾六番戸士族無職業 齡七拾三年八月 斎藤佳兵衛<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同町百番戸同 商業 同卅五年三月 倉成惣次郎<sup>㊦</sup>  
 同 同郡 同郡園分町五番戸同 無職業 同卅二年五月 箕原慎蔵<sup>㊦</sup>



長崎県下県郡今屋敷町廿六番戸同 同 同六拾年二月 大浦 主<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町三拾五番戸同 同 同四拾二年四月 山田吉朗<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町三拾七番戸同 同 同四拾八年 龜沢三平<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町三拾三番戸同 同 同四拾四年 神宮宇右衛門<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町拾四番戸同 同 同卅年七月 古川昌夫<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町拾九番戸同 同 同六拾年七月 榑山庄一郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡今屋敷町貳拾三番戸第一士族無職業 齡廿貳年 永野為壽<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町同番戸第二同 同 同廿七年五月 前川益三<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町貳拾七番戸同 同 同四拾貳年十月 中島熊太<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町五番戸同 同 同卅二年一月 仁位 定<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町三拾七番戸平民商業 同四拾四年四月 梅田惣八<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町九拾貳番戸同 同 同卅八年二月 関岡惣作<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町九拾三番戸同 同 同五拾年六月 大浦庸吉<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町四拾四番戸同 同 同貳拾年一月 佐伯國助<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町百六番戸同 同 同六拾四年一月 茂村源助<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町百九番戸同 同 同四拾三年十月 荒木恒助<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町百拾番戸士族同 同四拾八年一月 佐治工キ<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町百拾五番戸平民同 同四拾六年二月 土田岩助<sup>㊦</sup>

長崎県下県郡今屋敷町九拾七番戸士族官吏 齡四拾五年二月 堀 準蔵<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町貳拾四番戸同 無職業 同卅八年十月 青柳駒三<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡国分町百四拾四番戸平民商業 同卅八年五月 金子小太郎<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡今屋敷町百四番戸同 同五拾九年一月 龜谷惣九郎<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡 同町九拾九番戸同 同 同卅七年十一月 箕原庄次郎<sup>㊦</sup>  
 同県 同郡国分町六拾貳番戸同 同 同四拾九年二月 平川喜一郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町壹番戸士族無職業 齡四十五年四月 波多常栄<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町貳番戸士族教員 齡卅一年十月 中尾直一郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町参番戸士族無職業 齡六十九年壹月 武本 武<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町四番戸士族無職業 齡貳拾六年三月 森 広作<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町五番戸士族無職業 齡四拾一年八月 木村繁右衛門<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町九番戸士族商業 齡四拾五年八月 岩尾 勉<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町六拾貳番戸士族商業 齡四十六年一月 小田勝右衛門<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町六拾三番戸平民無職業 齡五十四年二月 勝島良辰<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町七拾七番戸士族無職業 齡三十二年十一月 井繁築<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町七拾三番戸平民工業 齡五十二年一月 小島長吉<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町八拾七番戸士族無職業 齡五十二年三月 森口幾久助<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町六拾五番戸士族工業 齡三十二年六月 長里 恂<sup>㊦</sup>

長崎県下県郡田湊町七拾八番戸士族無職業 齡廿七年六月 赤木和作<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町拾五番戸士族無職業 齡五拾年一月 国分立之介<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町拾七番戸士族無職業 齡七拾四年一月 庄司多紀<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町拾七番戸士族無職業 齡四拾年一月 稻留盛次<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町拾八番戸士族無職業 齡廿六年六月 飯田九郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町貳拾三番戸平民商業 齡五拾九年一月 瀧山儀三郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町貳拾七番戸士族商業 齡五拾九年八月 平江清左衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町三十三番戸平民商業 齡三十六年十一月 永里政治<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町三拾八番戸士族無職業 齡六十六年二月 米田隆右衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町三拾九番戸士族商業 齡三十二年一月 草葉清次郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町四拾壹番戸士族 齡四十九年一月 山口喜一郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町五拾九番戸平民工業 齡廿七年七月 島井庸吉<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町百五拾番戸士族商業 齡四十二年十月 河内市藏<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町百八十七番戸士族無職業 齡三十年五月 渡辺卯作<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町百五拾二番戸士族同 齡七拾年一月 古藤伝兵衛<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町百七拾七番戸士族同 齡四拾七年九月 嘉瀬藤左衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町百九拾七番戸士族商業 齡四拾一年一月 中川懐三<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町貳百壹番戸士族同 齡五十二年六月 斎藤平左衛門<sup>㊟</sup>

長崎県下県郡田湊町貳百貳番戸士族商業 齡三十九年二月 高山豊介<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町四拾九番戸平民同 齡廿六年二月 竹内与吉<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町四十八番戸平民同 齡四十二年十月 奥村重次郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町九拾九番戸士族同 齡三十二年八月 戸束庸吉<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡田湊町八拾三番戸士族無職業 齡八十一年三月 平山甚右衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町百廿四番戸士族無職業 齡五十六年一月 竹中幾五郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町老番戸平民商業 齡三拾貳年一月 川上繁治<sup>㊟</sup>  
 同 県同 郡同町三番戸平民商業 齡三十年七月 森田清作<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町五番戸平民工業 齡四拾年一月 森田万作<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町七番戸平民商業 齡六拾七年三月 平間惣右衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町八番戸士族商業 齡四十八年二月 栗津利作<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町五拾一番戸平民商業 齡四十六年二月 中村広右衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町五拾一番戸平民商業 齡六拾四年五月 松本忠右衛門<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町五拾番戸平民無職業 齡廿一年七月 松本得三<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町四拾六番戸平民商業 齡卅一年十一月 三木隆作<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町四拾六番戸平民工業 齡三十九年十一月 鶴岡直次郎<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町六十六番戸平民商業 齡三十二年十一月 梅野文吉<sup>㊟</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町六拾三番戸平民工業 齡五十九年五月 八重梅貞治<sup>㊟</sup>

長崎県下県郡大手橋町百卅番戸士族無職業 齡五拾年拾月 浦沢宇右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町百三十一番戸士族同 齡七十年一ヶ月 永尾登左衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町百二拾五番戸士族同 齡四拾年一月 佐伯松兵衛<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町百七拾一番戸士族同 齡三拾九年九月 小林多右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町百四十二番戸士族同 齡六拾五年八月 立野重右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町八拾番戸士族同 齡五拾一年十一月 藤清一郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡大道茂町四拾壹番戸平民商業 齡三拾九年拾一ヶ月 高島栄一<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町六拾五番戸士族醫師 齡六拾壹年八月 手田文都<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町六拾八番戸士族同 齡五十二年 平山良庵<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町九拾壹番戸平民商業 齡四十二年二月 春田源左衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町九拾番戸平民同 齡五拾七年五月 松本善吉<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町八拾九番戸士族同 齡五拾年二月 米田茂通<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町八拾參番戸平民同 齡四拾壹年十一月 藤野林太郎<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町七拾七番戸平民同 齡四拾壹年十一月 米田茂通<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町廿四番戸平民同 齡廿九年 中山春耕<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町四拾七番戸平民無職業 齡五拾六年 奥村庸七<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町四拾八番戸平民商業 四十二年一ヶ月 三木平八<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町四拾五番戸士族同 齡四拾六年二月 西依友次郎<sup>㊦</sup>

長崎県下県郡田淵町三拾番戸平民商業 齡二拾二年一月 武田菊治<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町四拾三番戸士族同 齡四拾年八月 小宮長右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町百三拾三番戸士族無職業 齡六拾三年六月 扇 柳助<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同町百廿八番戸士族同 齡五拾年 大浦弥七<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同郡田淵町百八拾三番戸平民商業 齡三十八年十一月 勝島平次右衛門<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町三拾貳番戸平民同 齡三拾三年一月 上野貞治<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡大手橋町七拾五番戸平民同 齡四拾二年八月 江口卯右衛門<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同郡今屋敷町百五番戸士族無職業 齡三十七年十一月 宮原敬一<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同郡大手橋町貳拾二番戸平民商業 齡四十九年一月 財部弁作<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同郡大手橋町貳拾壹番戸平民工業 齡四十年十一月 黒岩吉五郎<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同郡大手橋町拾八番戸平民同 齡三十八年十一月 黒岩庄吉<sup>㊦</sup>  
 同 同 同 同郡大手橋町三拾九番戸平民商業 齡六十年 小賀常次郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡嚴原村拾八番戸士族教員 齡卅三年一月 小出安太郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡嚴原村貳番戸士族同 齡四拾年三月 豊田太兵衛<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡天道茂町六拾四番戸平民同 齡三拾三年三月 倉田保定<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡嚴原村貳番戸同居平民同 齡廿四年十月 吉村元作<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡田淵町百二拾一番戸士族同 齡四拾九年三月 園分忠之助<sup>㊦</sup>  
 吉副兵衛<sup>㊦</sup>

長崎県下県郡国分町四番戸士族無職業  
 同 県同 郡同 町六番戸同 同 同六拾九年十月 井上 伝㊦  
 同 県同 郡同 町拾番戸同 同 同七拾貳年一月 黒岩為蔵㊦  
 同 県同 郡同 町八番戸同 同 同七拾九年 畑島久美衛㊦  
 同 県同 郡同 町百廿三番戸同 商業 同四拾二年 加納猪吉郎㊦  
 同 県同 郡同 町百四拾貳番戸平民商業 同卅九年十月 山田静之輔㊦  
 長崎県下県郡国分町百七番戸平民商業 同六拾四年八月 春田市兵衛㊦  
 同 県同 郡同 町百四番戸同 同 同五拾五年三月 川口繁治㊦  
 同 県同 郡同 町百五番戸士族同 同五拾年 岩佐弥市㊦  
 同 県同 郡同 町六拾五番戸同 同 同三拾八年一月 阿比留敏三㊦  
 同 県同 郡嚴原村七拾六番戸同 無職業 同六拾年 青柳高寛㊦  
 同 県同 郡国分町拾六番戸同 同 同廿六年一月 佐伯 甫㊦  
 同 県同 郡同 町九拾三番戸平民商業 同五拾三年八月 野田武助㊦  
 同 県同 郡同 町百三番戸同 同 同卅一年十一月 江口卯吉㊦  
 同 県同 郡同 町貳拾番戸士族無職業 同七拾貳年 島村仙七郎㊦  
 同 県同 郡同 町六拾四番戸平民商業 同廿五年十月 永瀬忠太郎㊦  
 同 県同 郡同 町八拾番戸同 同 同卅九年三月 阿比留万次郎㊦  
 同 県同 郡同 町百卅八番戸士族同 同四拾五年四月 木下与五右衛門㊦

長崎県下県郡国分町拾貳番戸士族無職業  
 同 県同 郡同 町六拾三番戸同 商業 同卅八年十月 阿比留祐作㊦  
 同 県同 郡同 町三拾壹番戸平民同 同五拾一年 阿比留徳右衛門㊦  
 同 県同 郡同 町貳拾七番戸士族医師 同卅六年十一月 沢田益太郎㊦  
 同 県同 郡同 町拾四番戸同 同 同廿三年九月 古藤 遜㊦  
 同 県同 郡今屋敷町八拾番戸同 無職業 同四拾九年一月 比田勝藏之助㊦  
 同 県同 郡同 町百拾九番戸平民商業 同四拾七年四月 太田市三斎㊦  
 同 県同 郡国分町九拾六番戸士族無職業 同貳拾一年五月 佐伯伊勢治㊦  
 同 県同 郡同 町百六番戸平民商業 同四拾六年三月 奇藤善助㊦  
 同 県同 郡同 町百五拾五番戸士族同 同四拾年四月 瀧川伴次郎㊦  
 同 県同 郡同 町百五拾七番戸同 同 同四拾五年九月 藤田清兵衛㊦  
 同 県同 郡同 町百六拾五番戸平民同 同廿七年七月 永瀬平五郎㊦  
 長崎県下県郡国分町百六拾九番戸平民商業 同三拾年三月 国分真一㊦  
 同 県同 郡同 町貳拾壹番戸士族無職業 同七拾三年四月 田中庄之介㊦  
 同 県同 郡同 町六拾七番戸同 商業 同四拾八年四月 西村又右衛門㊦  
 同 県同 郡同 町六拾六番戸平民同 同四拾七年四月 嘉瀬元助㊦  
 同 県同 郡久田道町百貳番戸士族無職業 同七拾四年五月 森川軍治㊦  
 同 県同 郡同 町百壹番戸同 同 同卅四年三月 三木良辰㊦

長崎県下県郡久田道町六拾九番戸士族商業 齡六拾三年七月 梶山喜七<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町七拾九番戸士族無職業 同四拾九年六月 中西 尖<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町五拾貳番戸同 同五拾四年九月 楠本治三郎<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町貳拾五番戸同 無職業 同廿九年三月 梅野清三郎<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町八拾貳番戸同 同六拾八年 浦田弘毅<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町三拾三番戸同 同五拾六年七月 江口弥太郎<sup>㊦</sup>  
 長崎県下県郡久田道町九番戸士族商業 齡三拾年三月 梅田政治<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町拾四番戸同 無職業 同四拾二年十月 春田要三<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町拾五番戸同 同 同四拾一年十一月 佐々木定雄<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町拾九番戸同 同 同卅八年六月 根ノ周作<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町貳拾壹番戸士族同 齡四拾年九月 大森越丸<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町四拾六番戸同 同卅一年四月 大久保廉<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町七拾壹番戸同 同五拾年三月 神宮庄作<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町五拾九番戸平民同 同六拾五年四月 平山寿喬<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町三拾番戸士族同 同四拾四年 古森 佐<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町九拾壹番戸同 同五拾年四月 吉野官平<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町九拾五番戸同 同四拾七年四月 小林 亘<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町九拾九番戸同 同卅七年七月 米田収藏<sup>㊦</sup>

長崎県下県郡久田道町百番戸士族無職業 齡五拾五年六月 仁位琢磨<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町九拾八番戸同 官吏 同四拾三年四月 江口 保<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡殿原村七拾八番戸同 無職業 同廿八年五月 小宮喜代作<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 村八拾四番戸平民商業 同七拾年三月 相部庄兵衛<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 村八拾七番戸士族工業 同五拾八年九月 山本 央<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 村九拾番戸平民同 同五拾八年十一月 大野広吉<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 村九拾貳番戸同 同卅三年五月 瀧本衛夫<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 村九拾三番戸同 同 同七拾貳年二月 武本与吉<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡日吉町十八番戸士族無職業 齡四十八年七月 高瀬相秀<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡天道茂町參拾五番戸平民太物商 齡三拾八年五月 吉田岩治<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町同居士族無職業 齡貳拾八年 次川為之助<sup>㊦</sup>  
 同 県同 郡同 町同居士族農業 齡五拾九年八月 吉田八助<sup>㊦</sup>

大藏大臣渡辺國武殿  
 右奥印仕候也

長崎県下県郡今屋敷町外拾町村

戸長 西山大次郎<sup>㊦</sup>